

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和34年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2017-06-06 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001187

昭和34年度
国立国語研究所年報

—11—

国立国語研究所

1960

刊行のことば

本書は、国立国語研究所が本格的に仕事を始めてから十一年目に当たる、昭和34年度の調査研究について、その概要を記したものである。

「年報」は、その年に研究所の行なった調査研究の一切を記録しておくものである。そして研究調査のそれぞれの項目について成果がまとまった場合には、「国立国語研究所報告」として別に単行本の形で刊行している。本年度内に刊行した「報告」は、

日本方言の記述的研究

高学年の読み書き能力

話しことばの文型(1)

の三つである。

創立以来所長であった西尾実博士は、本年度退職された。しかし、それは35年の1月22日であって、34年度の研究所の仕事は、始めから終わりまで西尾博士のもとに行なわれたと言っても言いすぎではない。

昭和35年 8 月

国立国語研究所長 岩 淵 悦 太 郎

目 次

はじめに

昭和34年度の調査研究のあらまし	1
話しことばの調査研究	
話しことばの文型の調査研究	3
書きことばの調査研究	
雑誌一般の用語の概観調査	6
漢字使用の実態	8
地域社会の言語生活の調査研究	
日本言語地図作成のための調査	32
北海道の言語についての調査	57
国語教育に関する調査研究	
言語能力の発達に関する調査研究	73
言語の効果に関する調査研究	
新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究	76
国語の歴史的発達に関する調査研究	
明治時代語の調査研究	131
特殊問題の調査研究	
同音語の調査	153
国内の国語問題に関する情報の収集・整理	163
中国の文字改革に関する調査	166
国語関係文献の調査	172
図書の収集と整理	178
庶務報告	188

昭和34年度の調査研究のあらまし

本年度も、前年度からの継続が多い。共通語としての話しことばに関しては、

(1) 話しことばの文法に関する調査研究（継続）——文型を中心としてを「話しことば研究室」が担当して実施した。そしてこれまでの研究をまとめて、年度内に報告書「話しことばの文型(1)」を刊行した。

また、共通語としての書きことばに関しては、これも前年度に引き続き、書きことば研究室で、次の事を行なった。

(2) 雑誌一般の用語の概観調査（継続）

地方言語研究室では

(3) 日本言語地図作成のための調査（継続）

を引き続き実施し、本年度は308地点の調査を完了した。通算974地点を調査したことになる。

(4) 言語能力の発達に関する調査研究（継続）

は、国語教育研究室の担当である。小学校一年に入学した児童を、六年卒業するまで引き続き調査して来たのであるが、本年でその仕事が一応すんだことになる。来年度は全体を見渡してのまとめの仕事を行なう予定である。なお、五年生六年生における読み書き能力を調査した結果を、「高学年の読み書き能力」と題して年度内に刊行した。

言語効果研究室では、

(5) 新聞文章のわかりやすさに関する調査研究（継続）

を行なったが、主として、紙面をたて組みにした場合とよこ組みにした場合とで読みやすさが違うかどうかを調べた。

(6) 明治時代語の調査研究（継続）

は国語の歴史を明らかにするための一研究であるが、本年度は、主として、明治初年から20年ごろまでに刊行された学術的・論説的文章の文献を資料として、用語調査を行なった。

(7) 同音語の調査（継続）

は第四研究部の第一資料研究室の分担だが、これは、国語表記の能率化に関する調査研究の一つとして取り上げたものである。本年度は同音語について、コミュニケーションの立場から、混同しやすいものとそうでないものの段階づけができるかどうかを考えた。

(8) 国内における国語問題に関する情報の収集・整理

も継続的な仕事である。これは、国語問題について、どのような意見や説が世間に現われているかを調べようとするもので、本年度は、新送りがな問題を取り上げて、新聞雑誌に現われた各方面の意見や批判を集めた。第四研究部の第二資料研究室の担当である。

(9) 中国の文字改革に関する調査

(10) 国語関係文献の調査

は共に第四研究部の第三資料研究室で担当した。

なお、本年度も文部省科学研究費（総合研究）を得て、

北海道の言語の実態と共通語化の過程

の調査研究を行なった。

本年度当初の研究陣容は次のようである。 (昭和34年4月1日現在)

所長 西 尾 実					
第一研究部	(部長) 岩淵悦太郎				
	話しことば研究室 (室長)	大石初太郎	飯豊毅一	宮地 裕	吉沢典男
	書きことば研究室 (室長)	林 大	斎賀秀夫	水谷静夫	石綿敏雄
	地方言語研究室 (室長)	柴田 武	野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢
第二研究部	(部長) 興 水 実				
	国語教育研究室 (室長)	芦 沢 節	高橋太郎	村石昭三	
	言語効果研究室 (室長)	永 野 賢	林 四郎	渡辺友左	
第三研究部	(部長) 山 田 巖				
	近代語研究室 (室長)	見 坊 豪 紀	広浜文雄	進藤咲子	
第四研究部	(部長) 岩淵悦太郎				
	第一資料研究室 (室長)	松 尾 拾	市川 孝	大久保 愛	
	第二資料研究室 (室長)	高 橋 一 夫	村 尾 力		
	第三資料研究室	有 賀 憲 三	高田正治		

(岩淵悦太郎)

話しことばの文型の調査研究

A. 対話資料による研究

この作業は、昭和31年度からの継続である。すでに過年度の年報で述べてきたように、次のような計画によったものである。

- (1) 共通語における各種の対話のことばを資料とし、実験的調査や内省によってこれを補う。
- (2) 文を、表現意図・構文・イントネーションの三つの構成要素に分析し、その総合としての文型をとらえる。

前年度までの作業としては、資料の収集・整理、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについての基礎的考察、および、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの面からの資料の分析を進めた。

本年度は、まず、前年度からの作業をさらに進めて、表現意図・構文・イントネーションについて、それぞれまとめた。次に、この基礎的研究の成果にもとづいて、一つの試みとしての総合的文型を立てた。総合的文型の立て方にはいろいろのものが考えられるが、表現意図を中心として、それと構文・イントネーションとの対応をとらえるという形を取った。また、ここでは、総合的文型の作業を小規模にして、単純な、基本的な構造で総合的文型をとらえることにした。これを一つの土台として、今後において、いっそう詳しい構造の総合的文型をとらえる作業の展開を期することとしたのである。

以上の結果を記述して、報告書「話しことばの文型(1)―対話資料による研究―」(国研報告18)を刊行した。具体的内容に属することは、すべてこの報告書にゆずる。

B. 独話資料による研究

独話資料による文型の調査研究のためには、前年度に、対話資料作業と平行して、資料の収集・整理に着手したが、作業計画の変更により、中止していた。

本年度、対話資料による研究をまとめたあと、あらためて、これを続けた。

対話資料による文型研究は、ほぼ基礎的研究の段階にとどまったが、独話資料による研究においては、方法を再吟味して、一部修正発展させようとするものであり、また、結果としての文型をいっそう詳しい形でとらえて、独話の文型を明らかにすることを目標とするものである。

本年度、収集・整理した独話資料は、下記のとおりである。

国会中継—安保改定審議— 70分（ラジオ放送）

全国婦人指導者会議 30分（ ” ）

衆議院立候補者政見放送 60分（ ” ）

趣味の手帳等 85分（ ” ）

ニュース解説各種 25分（ ” ）

学校放送—ニュース—等 25分（ ” ）

ラジオ番組各種 110分（ ” ）

テレビ料理各種 65分（テレビ放送）

ニュース解説各種 80分（ ” ）

学校放送—中学校向け各種— 67分（ ” ）

講演（国立国語研究所10周年記念講演会） 60分

式辞・祝辞（国立国語研究所10周年式典、賀宴） 84分

祝辞（国立国語研究所新庁舎開き賀宴） 28分

I氏講演 60分

N氏説明 30分

Y氏談 30分

S氏講義 60分

N氏講義 50分

K氏講義 54分

A氏講義 38分

H氏講義 47分

M氏講義 48分

独話資料による研究は、次年度、さらに進める予定である。

(付記) 「独話」は、ひとりの話し手が(多くのばあい、多数の)聞き手に向かって一方的にする話の意として、おもに国語教育の領域で用いられている術語であるが、しばらくこれを借りる。

C. 担当者

前年度にひきつづいて、話しことば研究室の次の4名が当たった。付記したものは、対話資料による研究におけるおもな分担である。大石初太郎・飯豊毅一(構文)・宮地裕(表現意図)・吉沢典男(イントネーション)。なお、研究補助員、泉喜与子・吉村香苗が作業を助けた。 (大石)

雑誌一般の用語の概観調査

A. 調査の輪郭

目標 現代書きことば資料のうち雑誌という形態をとる刊行物について、多くの部門にわたり、その用語の概観を標本調査法によって計量的に試み、基本語彙設定のための基礎資料を得ようとする。

調査対象 5部門90種の雑誌，昭和31年1～12月号の本文の全用語。

抽出比 約二百三十分の一（広告を除いた全紙面から1/8ページ大の部分約八千を採集箇所として抽出した。助詞・助動詞については，抽出した全箇所の1/3を用いる。）

標本延べ語数 約五十三万（総合雑誌の語彙調査で用いた β 単位で数える。この調査では助詞・助動詞を含む。）

作業の段階 5部門を通じて9段階に分け，3段階ごとに集計する。

B. 前年度までの経過

資料用雑誌の決定，その収集，採集箇所の抽出，採集用カードのリプリント，全9段階のカード採集および検査，第3段階までの整理・集計。

C. 本年度の作業の概要

第4，第5段階の採集カード（延べ約十万）を整理・集計した。これには助詞・助動詞を含まない。

助詞・助動詞について，別に第1～3段階として抽出した箇所から採集されているカード（延べ約九万五千）を整理・集計し，異なり約百五十語を得た。

前年度に一往第3段階までの集計をすませたので，今後の作業を進めるため全体として単位の認定その他の規準について反省し，必要な修正を加えることにした。そのためカードの整理・集計の作業そのものの進み方が予定に及ばなくなった。同語か別語かの認定の問題については，室員の研究討議を続け，判

定を要する語の例を集めるとともに、助詞・助動詞に関しては、作業上の統一規準を定めた。

なお、語の表記および漢字に関する調査は、第3段階までの採集カード（延べ約十四万五千）について転記，整理，集計して，表記一覧表と度数順および部首順の漢字表とを完成した。漢字の調査については，別項の「漢字使用の実態」にするす。

（林大）

漢字使用の実態

書きことば研究室では、さきに婦人雑誌、総合雑誌の語彙調査に付随して漢字の調査を行なったが、つづいて行なった雑誌一般の用語の概観調査のうち、個々の漢字の使用度数および漢字の含有率の調査について、次に述べる。

A. 漢字の使用度数

まえがき この調査の目的は、現代の書きことばにおける漢字使用の実態を明らかにして、漢字制限ならびに表記法体系の改善のための基礎的資料を作ろうとするものである。この調査は来年度以降にも継続される予定であるが、本年度中に中間的な結果が一往まとまったので、それについて以下に報告する。なお、分析その他調査の詳細については、漢字調査の終了後に報告書を刊行する予定なので、それにゆずる。

1. 調査のあらまし 調査対象は、以下に示す5部門90種の雑誌の、昭和31年1月号から12月号までの本文（本誌・付録および増刊号）である。

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| I 評論・芸文（世界・中央公論・新潮・群像等） | 12種 |
| II 庶民（文芸春秋・家の光・週刊朝日・サンデー毎日等） | 14種 |
| III 実用・通俗科学（エコノミスト・農業朝日・時の法令・自然等） | 15種 |
| IV 生活・婦人（主婦の友・婦人公論・装苑・暮らしの手帖等） | 14種 |
| V 娯楽・趣味（小説新潮・面白倶楽部・映画の友・野球界等） | 35種 |

これら90種の雑誌の全紙面（広告を除く）から語彙調査のために抽出した1/8ページ大の部分約八千箇所のうち、さらに 1/3 を漢字および表記の調査^注のために用いた。この採集箇所の中には、延べ約十四万五千語、異なり約二万三千語が含まれる。

なお、各部門ごとの延べ語数（概数）は、次の通りである。

- | | |
|-------------------|----------------|
| I（評論・芸文）一万五千語 | II（庶民）二万五千語 |
| III（実用・通俗科学）二万八千語 | IV（生活・婦人）二万七千語 |

注）表記の調査としては、本年度中に表記一覧表を作成した。これは、約二万三千語の一語一語について、表記の実情（たとえば漢字・かなの書きわけ、送りかな等）が一覧できるようにしたものである。

V (娯楽・趣味) 四万九千語

計 十四万五千語

ただし、以上の数字の中には、助詞・助動詞は除外されている。除外された助詞・助動詞は、同じ採集箇所の中に、述べ約九万五千語、異なり約百五十語が数えられるが、これに使われた漢字については、別個に集計した。

2. 集計の結果 上記の標本に現われたすべての漢字を整理・集計した結果を以下に示す。

(1) 総漢字数

{ 延べ字数 138,488
異なり字数 2,943

第1表 度数別分布表

延べ度数 の区分	教育漢字		教育外 当用漢字		表外漢字		計	
	異なり	延べ	異なり	延べ	異なり	延べ	異なり	延べ
201 以上	152	62980	2	613	—	—	154	63593
200~101	173	24143	15	2084	6	843	194	27070
100~ 91	29	2750	3	290	1	91	33	3131
90~ 81	51	4364	4	337	1	83	56	4784
80~ 71	39	2956	12	892	2	158	53	4006
70~ 61	66	4310	13	836	3	194	82	5340
60~ 51	51	2796	24	1314	1	54	76	4164
50~ 41	66	2997	40	1803	4	185	110	4985
40~ 31	82	2920	76	2660	8	263	166	5843
30~ 21	80	2016	97	2386	17	422	194	4824
20~ 11	60	935	243	3609	73	1013	376	5557
10	7	70	27	270	18	180	52	520
9	9	81	36	324	19	171	64	576
8	4	32	40	320	21	168	65	520
7	3	21	38	266	37	259	78	546
6	2	12	47	282	52	312	101	606
5	2	10	40	200	56	280	98	490
4	—	—	45	180	86	344	131	524
3	—	—	46	138	105	315	151	453
2	—	—	35	70	212	424	247	494
1	3	3	48	48	411	411	462	462
計	879	113396	931	18922	1133	6170	2943	138488
比率	81.88%		13.66%		4.46%		100%	

(2) 全体の延べ字数に対する表外漢字の延べ字数の比率

- a 当用漢字表の1850字以外の漢字を表外漢字として……………4.46%
- b 当用漢字表の補正案を適用したとして……………4.33%
- c 表外漢字から人名・地名に使われたものを除いて……………3.17%

(3) 度数別に見た漢字の種類の内分け・漢字の種類別に見た使用度数の比率を第1表に示す(前ページ)。

漢字の種類を次のように三つに分けた。

教育漢字……………当用漢字別表の881字

教育外当用漢字……………当用漢字表の1850字から当用漢字別表の881字を除いた969字

表外漢字……………当用漢字表の1850字以外の漢字

3. 漢字表 漢字表は、度数順および部首順の表を作成したが、ここには、その中から以下の内容のものをぬき出して第2(a～g)表に示すことにする。なお、作成した度数順漢字表は、一々の漢字について、音訓別・使用語別に一覧できるようになっているが、ここでは度数(全体の標本度数と、その内人名・地名だけに使われた度数)だけを掲げる。

- 2 a 度数の多い漢字(度数201以上, 154字)
- 2 b 度数の多い教育外当用漢字(度数71以上, 36字)
- 2 c 度数の多い表外漢字(度数11以上, 116字)
- 2 d 度数の少ない教育外当用漢字(度数5～1, 214字)
- 2 e 度数の少ない教育漢字(度数10～1, 30字)
- 2 f 標本には一度も現われない当用漢字
- 2 g 当用漢字表の補正案に関する漢字

〔付〕 助詞・助動詞に使われた漢字

なお、以下の漢字表中、漢字の右肩につけた記号は、次の区別を示すものである。(表の内容によって、区別する必要のないものは、記号を省略してある。)

- 教育外当用漢字
- △ 当用漢字表の補正案で加えられるもの。
- × 当用漢字表の補正案で除かれるもの。
- 人名用漢字別表にあるもの。

第2a表 度数の多い漢字 (度数 201 以上, 154 字)

順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)
1	一	2268 101	34	下	537 53	67	物	341 —	100	発	265 —
2	人	1561 13	35	後	536 11	68	社	330 —			
3	二	1213 56	36	四	523 30	69	通	324 8	101	野	265 174
4	大	1152 240	37	会	517 4	70	実	322 8	102	外	262 4
5	日	1075 340	38	入	514 1				103	性	260 —
6	出	1043 13	39	山	511 308	71	度	321 2	104	名	259 20
7	三	941 179	40	自	505 —	72	原	319 151	105	少	258 —
8	子	917 460				73	言	316 —	106	意	258 —
9	十	915 33	41	的	496 —	74	知	314 12	107	最	257 —
10	中	912 150	42	場	486 4	75	高	309 96	108	男	257 27
			43	当	465 5	76	所	301 9	109	第	257 —
11	年	863 1	44	作	457 22	77	東	300 204	110	問	256 —
12	本	835 410	45	月	452 21	78	理	298 5			
13	上	800 77	46	家	436 10	79	業	294 —	111	多	256 32
14	方	790 7	47	学	418 1	80	主	292 —	112	休	255 —
15	手	738 9	48	立	418 15				113	切	253 —
16	見	736 18	49	小	417 98	81	持	291 1	114	結	251 —
17	生	719 10	50	彼°	410 —	82	内	290 51	115	不	248 7
18	分	715 6				83	対	289 1	116	七	247 16
19	五	710 48	51	今	408 13	84	千	285 106	117	相	246 5
20	前	687 37	52	何	390 —	85	近	284 51	118	表	246 1
			53	田	389 357	86	九	283 28	119	感	244 —
21	合	673 11	54	長	389 63	87	法	283 3	120	明	239 24
22	行	666 17	55	六	380 9	88	面	280 —			
23	時	637 11	56	部	377 34	89	戦	278 —	121	木	236 169
24	思	634 —	57	地	374 17	90	百	277 12	122	水	233 48
25	間	605 22	58	円	366 5				123	関	231 37
26	目	600 13	59	同	362 —	91	全	275 1	124	川	226 197
27	女	579 —	60	力	361 8	92	現	275 —	125	期	225 —
28	気	573 2				93	話	273 —	126	口	221 34
29	事	570 —	61	心	360 1	94	考	272 —	127	要	220 1
30	国	563 86	62	金	356 32	95	身	270 —	128	道	220 45
			63	新	351 56	96	動	269 1	129	化	219 —
31	来	561 5	64	代	346 74	97	画	268 —	130	海	219 58
32	者	549 1	65	八	345 51	98	白	267 36			
33	私	548 —	66	用	344 —	99	先	266 1	131	万	218 10

順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)	順位	漢字	度数(人・地)
132	味	217 2	139	書	210 —	145	数	205 2	151	段 ^o	203 —
133	産	216 1	140	向	209 4	146	活	205 —	152	京	202 188
134	題	216 —				147	世	204 7	153	品	202 5
135	利	214 20	141	定	209 2	148	経	204 4	154	屋	202 27
136	次	213 38	142	強	209 —	149	回	203 —			
137	線	213 —	143	無	209 2	150	平	203 81			
138	文	210 18	144	資	206 —						

第2b表 度数の多い教育外当用漢字（度数71以上、36字）

漢字	度数(人・地)	漢字	度数(人・地)	漢字	度数(人・地)	漢字	度数(人・地)
彼	410 —	笑	136 —	丈	97 5	座	76 10
段	203 —	御	133 8	枚	94 1	督	76 —
郎	180 178	松	133 104	影	87 2	将	75 2
若	176 36	裏	133 —	優	84 —	丸	73 15
映	175 1	込	133 —	沢	84 74	江	73 68
割	149 —	婚	106 —	監	82 —	肩	73 —
好	145 7	違	103 —	縫	79 2	劇	71 —
吉	141 138	佐	102 93	娘	77 —	渡	71 18
井	139 125	裁	99 —	針	77 —	舞	71 1

第2c表 度数の多い表外漢字（度数11以上、116字）

使用度数20以上の45字については、音訓別、用語別、部門別の度数を示した。

- この表の漢字の配列は、字の度数順とし、度数の等しいものの間では、康熙字典の順によった。
- 同じ字を用いた語の配列は、その字の音を用いたものを先に、訓を用いたものをあとにし、さらに、一字めに用いたもの、二字めに用いたもの……に分け、それぞれ五十音順とした。なお、送りがなその他の語表記は、原文のままとした。
- 人名、地名に用いられたものについては、音訓の左肩に*をつけて別に示し、個々の語例については脚注に示した。
- その語が、その表外漢字を用いなくても書かれている時は、「その語の他の表記の度数」の欄に、その種類と度数を示した。その表外字にあたる部分が他の漢字である時はその漢字を示し、ひらがな書きはひ、かたかな書きは力とした。たとえば「云」の字の項にある「いう」という語の表記は、「云う」149回、「言う」167回、「いう」1758回、計2074回というわけである。

漢字 音訓	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
1 頃	187		20	14	5	114	34			
こ	ろ	頃	18	12	3	7	20	60	107	ひ47
		今 頃	—	—	1	—	—	1	3	ひ 2
		この頃	1	—	1	2	7	11	21	ひ10
		先 頃	—	—	—	—	1	1	5	ひ 4
		近 頃	—	1	—	2	3	6	20	ひ14
		手 頃	1	—	—	1	—	2	2	—
		年 頃	—	—	—	2	1	3	3	—
		中 頃	—	—	—	—	1	1	1	—
		日 頃	—	1	—	—	—	1	4	ひ 3
		昼 頃	—	—	—	—	1	1	1	—
		身 頃	—	—	—	100	—	100	100	—
2 云	161		30	21	2	10	98			
い	う	云いかける	—	—	—	—	1	1	1	—
		云い捨てる	—	—	—	—	2	2	2	—
		云い出す	—	—	—	—	1	1	5	言 1 ひ 3
		云い負かしこ	1	—	—	—	—	1	1	—
		云い訳	—	—	—	—	1	1	3	言 2
		云 う	27	21	2	10	89	149	2074	言167 ひ1758
ウ	ン	云 ャ	2	—	—	—	4	6	3	—
3 藤	145		21	33	12	18	61			
ト	ウ	葛 藤	—	1	—	—	—	1	1	—
ふ	じ	藤 (船名)	—	—	—	—	1	1	1	—
		下り藤	—	—	—	—	1	1	1	—
*ト	ウ	(人 名)注1)	16	27	8	13	33	97	97	—
*ふ	じ	(人 名)注2)	5	5	3	5	26	44	44	—
		(地 名)注3)	—	—	1	—	—	1	1	—

注1) 藤吉郎 3 藤四郎 1 藤次郎 2 藤式部 1 藤村 1 藤内 1 藤兵衛 2 安藤
7 伊藤 9 伊藤万 1 江藤 1 遠藤 1 加藤 8 工藤 1 後藤 8 近藤 25 佐
藤 16 斎藤 3 進藤 1 須藤 1 内藤 3 武藤 1

注2) 藤井 1 藤浦 1 藤枝 1 藤尾 1 藤岡 2 藤川 2 藤木 1 藤倉 1 藤里 1
藤沢 1 藤島 2 藤代 1 藤田 7 藤乃(姓) 1 藤巻 1 藤村 6 藤茂 1 藤本
4 藤原 7 岩藤 1

注3) 藤沢 1

漢字	度数	その音訓を用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
4袖	137		—	3	—	132	2			
そ	で	袖	—	—	—	43	—	43	45	ひ 1 力 1
		袖 裏	—	—	—	1	—	1	1	—
		袖 口	—	1	—	17	—	18	18	—
		袖ぐり	—	—	—	11	—	11	11	—
		袖 先	—	—	—	1	—	1	1	—
		袖 下	—	—	—	13	—	13	13	—
		袖 丈	—	—	—	18	—	18	18	—
		袖 付	—	—	—	4	—	4	4	—
		袖 幅	—	—	—	1	—	1	1	—
		袖 山	—	—	—	8	—	8	8	—
		内 袖	—	—	—	3	—	3	3	—
		裏 袖	—	—	—	3	—	3	3	—
		表 袖	—	—	—	3	—	3	3	—
		小 袖	—	—	—	—	1	1	1	—
		外 袖	—	—	—	3	—	3	3	—
		誰袖 (茶店名)	—	1	—	—	—	1	1	—
		長 袖	—	—	—	1	—	1	1	—
		広 袖	—	—	—	—	1	1	1	—
		前 袖	—	—	—	2	—	2	2	—
*そ	で	袖 (人名)	—	1	—	—	—	1	1	—
5衿	107		—	1	1	105	—			
キ	ン	開 衿	—	—	1	—	—	1	1	—
え	り	衿	—	—	—	31	—	31	33	力 2
		衿カヴァー	—	—	—	2	—	2	2	—
		衿ぐり	—	—	—	23	—	23	23	—
		衿 腰	—	—	—	1	—	1	1	—
		衿 先	—	—	—	3	—	3	3	—
		衿 下	—	—	—	2	—	2	2	—
		衿 付	—	—	—	15	—	15	15	—
		衿 幅	—	—	—	1	—	1	1	—
		衿 巻	—	1	—	—	—	1	1	—
		衿 元	—	—	—	4	—	4	4	—
		後 衿	—	—	—	1	—	1	1	—
		裏 衿	—	—	—	8	—	8	8	—

漢字 音訓	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
ネック カラー		上 衿	—	—	—	1	—	1	1	—
		表 衿	—	—	—	8	—	8	8	—
		下 衿	—	—	—	1	—	1	1	—
		共 衿	—	—	—	1	—	1	1	—
		前 衿	—	—	—	1	—	1	1	—
		角 衿 ^{スグニアネクツ}	—	—	—	1	—	1	1	—
		ウイング 衿 ^{カラー}	—	—	—	1	—	1	1	—
6 僕 [△]	106		22	11	3	13	57			
ボ ク		僕	22	9	3	13	56	103	150	ひ44 カ 3
		公 僕	—	1	—	—	—	1	1	—
		私 僕	—	1	—	—	—	1	1	—
*ボ ク		僕〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
7 岡	91		8	12	7	8	56			
お か		特岡〔浴衣の種類〕	—	—	1	—	—	1	1	—
*お か		〔人 名〕注1)	7	6	1	2	40	56	56	—
		〔地 名〕注2)	1	6	5	6	16	34	34	—
8 誰	83		13	11	4	11	44			
だ れ		誰	11	6	4	7	42	70	97	ひ27
		誰 が	—	—	—	1	—	1	1	—
		誰 れ	—	1	—	3	2	6	6	—
		誰 それ	2	1	—	—	—	3	3	—
		誰 々	—	2	—	—	—	2	1	—
た が		誰 袖〔茶店名〕	—	1	—	—	—	1	1	—
9 阪	80		5	13	10	8	44			
ハ ソ		阪 急	1	—	2	—	8	11	11	—
*ハ ソ		阪 神〔地名〕	—	1	—	—	11	12	12	—
*バ ソ		阪 東〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
*さ か		神 阪〔人名〕	—	1	—	—	—	1	1	—

注1) 岡 5 岡源 1 岡田 1 岡野 1 岡ノ山 2 岡部 1 岡村 1 岡本 9 石岡 2
大岡 8 片岡 3 重岡 1 高岡 1 月岡 1 徳岡 1 長岡 1 広岡 1 福岡 1
藤岡 2 前岡 6 松岡 4 安岡 1 吉岡 2

注2) 岡山 8 石岡 1 市岡 1 静岡 6 長岡 4 枚岡^{ひらおか} 1 福岡 13

漢字 音訓	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
		〔地 名〕注1)	4	11	8	8	24	55	55	—
10崎	78		2	11	11	14	40			
*さ	き	〔人 名〕注2)	2	7	3	5	24	41	41	—
		〔地 名〕注3)	—	4	8	9	16	37	37	—
11伊 [□]	67		6	7	—	9	45			
だ	て	伊 達	—	—	—	—	1	1		
*イ		〔人 名〕注4)	6	5	—	4	32	47	47	—
		〔地 名〕注5)	—	2	—	4	8	14	14	—
*イ	タリー	伊太利	—	—	—	—	2	2	13	カ11
*だ	て	〔人 名〕注6)	—	—	—	1	2	3	3	—
12脇	64		5	2	2	51	4			
わ	き	脇	—	—	1	19	1	21	27	ひ 6
		脇あき	—	—	—	1	—	1	1	—
		脇 側	—	—	—	2	—	2	2	—
		脇 差	—	—	—	—	2	2	2	—
		脇 線	—	—	—	9	—	9	9	—
		脇 ^{ダーツ}	—	—	—	1	—	1	1	—
		脇 ^{たけ} 丈	—	—	—	9	—	9	9	—
		脇 縫	—	—	—	3	—	3	3	—
		脇 布	—	—	—	1	—	1	1	—
		脇 腹	—	—	—	—	1	1	1	—
		脇 ^{ブリーツ}	—	—	—	1	—	1	1	—

注1) 大阪53 松阪 2

注2) 井崎 3 石崎 1 岩崎 2 尾崎 3 大崎 1 大戸崎 1 唐崎 1 川崎 3 河原崎 1 木崎 3 北崎 1 見崎 1 坂崎 1 島崎 2 白崎 2 先崎 1 田崎 1 谷崎 2 出羽ヶ崎 1 西崎 1 沼崎 1 宮崎 2 山崎 5 吉崎 1

注3) 尼崎 1 伊勢崎 1 糸崎 1 磐崎 1 大崎 1 柏崎 1 川崎 6 河崎 1 高崎 2 長崎 13 長崎町 1 野崎 1 宮崎 6 谷中三崎町 1

注4) 伊織 1 伊玖磨 1 伊三蔵 3 伊三美 1 伊沢 2 伊集院 4 伊勢 2 伊勢錦 4 伊勢ノ海 1 伊勢守 1 伊太八 1 伊丹 1 伊太郎 2 伊知地 1 伊東 6 伊藤 9 伊藤万 1 伊奈 2 伊野 1 伊原 1 伊吹 1 伊兵衛 1

注5) 伊 2 伊豆 3 伊勢 1 伊勢崎 1 伊東 1 伊那 1 駐伊 1 日伊 2 仏伊 2

注6) 伊達 1 伊達ノ花 2

漢字 音訓	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
		尾 脇	—	—	—	1	—	1	1	—
		関 脇	—	1	—	—	—	1	1	—
		前 脇	—	—	—	3	—	3	3	—
		両 脇	—	—	1	1	—	2	2	—
		*わ き [人 名]注1)	5	1	—	—	—	6	6	—
13巾	63		1	—	2	57	3			
キ	ン	頭 巾	1	—	—	—	1	2	2	—
		雑 巾	—	—	—	1	—	1	1	—
		布 巾	—	—	—	3	—	3	3	—
は	ば	巾	—	—	—	21	1	22	45	幅22 カ 1
		巾 広	—	—	1	—	—	1	1	—
		後 巾	—	—	—	2	—	2	2	—
		肩 巾	—	—	—	4	1	5	5	—
		シングル巾	—	—	—	4	—	4	4	—
		裾 巾	—	—	—	3	—	3	4	幅 1
		背 巾	—	—	—	2	—	2	2	—
		W 巾	—	—	—	4	—	4	6	幅 2
		ネクタイ巾	—	—	1	—	—	1	1	—
		バンド巾	—	—	—	2	—	2	2	—
		身 巾	—	—	—	1	—	1	2	幅 1
		胸 巾	—	—	—	2	—	2	4	幅 2
		ヤール巾	—	—	—	7	—	7	12	幅 5
		レース巾	—	—	—	1	—	1	1	—
14廻	51		4	4	3	21	19			
カ	イ	廻 状	—	—	—	—	2	2	2	—
		廻 転	1	—	—	—	—	1	4	回 3
ま	わす	廻 す	—	—	2	2	2	6	18	回 5 ひ 7
		あと廻し	—	—	—	—	1	1	1	—
		きり廻す	—	—	—	—	1	1	1	—
		乗り廻す	—	1	—	—	—	1	1	—
		吹き廻し	—	1	—	—	—	1	2	か 1
		節廻し	—	—	—	—	1	1	1	—
		振り廻す	1	—	—	—	—	1	2	か 1

注1) 脇坂 1 脇村 1 脇本 2 脇山 1 網脇 1

漢字 音訓	度数 音訓	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
まわる	見廻す		1	—	—	—	—	1	3	回 1 か 1
	廻り		—	—	—	1	1	2	14	巡 2 か10
	廻る		1	1	—	3	5	10	26	回 7 か 9
	廻れ右		—	—	—	—	1	1	1	—
	腕廻り		—	—	—	3	—	3	3	—
	上廻る		—	—	—	—	1	1	4	回 2 か 1
	駈け廻る		—	—	1	—	—	1	1	—
	空廻り		—	1	—	—	—	1	1	—
	北廻り		—	—	—	—	1	1	1	—
	腰廻り		—	—	—	1	—	1	3	罝 2
	頭廻り		—	—	—	1	—	1	2	か 1
	外廻り		—	—	—	3	—	3	10	罝 1 か 6
	旅廻り		—	—	—	1	—	1	1	—
	掌 てのひら 廻り		—	—	—	1	—	1	1	—
	西廻り		—	—	—	—	1	1	1	—
	東廻り		—	—	—	—	1	1	1	—
	ヒップ廻り		—	—	—	1	—	1	1	—
	ポケット廻り		—	—	—	1	—	1	1	—
	南廻り		—	—	—	—	1	1	1	—
	胸廻り		—	—	—	3	—	3	4	か 1
15之 [□]	50		3	22	2	1	22		[助詞の用法は29ページ参照]	
*の		[人 名]注1)	2	21	2	—	19	44	44	
*ゆき		[人 名]注2)	1	1	—	1	3	6	6	
16糎	47		—	—	—	47	—			
	センチメートル	糎	—	—	—	47	—	47	122	cm74 力 1
17錦 [□]	46		—	2	—	—	44			
キン		錦輝[神田〜館]	—	—	—	—	1	1	1	

注1) 丑之助 7 猿之助 1 菊之助 1 吉之助 1 錦之助 3 繼之助 1 幸之助 1
 耿之助 1 康之助 1 作之助 1 左近之助 1 左馬之助 1 淳之助 1 庄之助 2
 昇之助 1 章之助 3 善之丞 2 辰之助 1 竜たつ之助 1 頼母之助 1 千代之介 2
 千代之助 1 貞之助 1 八之助 1 文之丞 1 松之助 1 山之内 1 要之助 1
 竜之助 3
 注2) 信之 2 弘之 1 雅之 3

漢字 音訓	度数 その音訓を用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
		I	II	III	IV	V	全体		
	錦 繡	—	—	—	—	1	1	1	—
	にしき 錦	—	1	—	—	—	1	1	—
	*キ シン [人 名]注1)	—	1	—	—	4	5	5	—
	*にしき [人 名]注2)	—	—	—	—	38	38	38	—
18竜 [△]	42 [龍も含む]	2	9	—	4	27			
	リュウ 竜星 [〜関]	1	—	—	—	—	1	1	—
	竜尾 [〜に構える]	—	—	—	—	1	1	1	—
	た つ 竜 巻	—	—	—	—	2	2	2	—
	*リュウ [人 名]注3)	1	4	—	4	21	30	30	—
	[地 名]注4)	—	1	—	—	2	3	3	—
	*た つ [人 名]注5)	—	4	—	—	1	5	5	—
19杉 [△]	35	7	4	2	4	18			
	す ぎ 杉	—	1	1	1	2	5	5	—
	杉 綾	—	—	—	—	1	1	1	—
	*す ぎ [人 名]注6)	7	2	1	3	14	27	27	—
	[地 名]注7)	—	1	—	—	1	2	2	—
20唄	34	4	6	5	—	19			
	う た 唄	2	3	—	—	12	17	53	歌 ³⁶ 歌 ¹⁹ ひ ¹² 詠 ² 謡 ¹
	唄 う	—	2	2	—	3	7	41	
	小 唄	1	—	—	—	2	3	3	
	戯れ唄	—	1	—	—	—	1	1	
	長 唄	1	—	—	—	2	3	3	

注1) 錦[錦之助の略] 1 錦[お〜] 1 錦之助 3

注2) 朝錦 2 伊勢錦 4 小野錦 2 神錦 1 唐錦 1 木曾錦 2 琴錦 2 佐々錦 1
島錦 1 高錦 1 常錦 3 鶴錦 2 出羽錦 2 栃錦 2 秀錦 6 房錦 3 松錦
3

注3) 竜吉 2 竜子 1 竜作 1 竜司 3 竜之助 3 竜妙 1 竜馬^{りゅうま} 1 鬼竜川 3 剣
竜 5 里竜^{さと} 1 青竜 2 天竜 1 白竜山 2 双ッ竜 4

注4) 九竜 1 黒竜[〜飯店] 1 天竜[〜川] 1

注5) 竜哉 2 竜雄 2 竜之助 1

注6) 杉浦 2 杉作 2 杉下 1 杉田 2 杉原 2 杉村 6 杉本 4 杉山 4 上杉 1
大杉 1 小杉 2 高杉 3

注7) 杉並 1 杉の森 1

漢字 音訓	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
*う	た	唄〔人名, 姓〕	—	—	3	—	—	3	3	—
21那	34		1	7	3	—	23			
ナ		旦 那	—	3	2	—	8	13	15	力 2
		利 那	1	—	—	—	1	2	2	—
*ナ		〔人 名〕注1)	—	—	—	—	11	11	11	—
		〔地 名〕注2)	—	4	1	—	3	8	8	—
22頁	34		3	2	3	23	3			
ページ		頁	2	2	3	22	2	31	37	力 6
		欠 頁	1	—	—	—	—	1	1	—
		前 頁	—	—	—	1	—	1	1	—
		右 頁	—	—	—	—	1	1	1	—
23或	33		8	8	2	4	11			
あ	る	或 る	6	3	1	3	8	21	74	ひ53
あ	る	い は 或 は	2	5	1	1	3	12	42	ひ30
24鹿	33		3	5	3	6	16			
ロ	ク	鹿 鳴	—	1	—	—	—	1	1	—
し	か	河 鹿〔～荘〕	—	1	—	—	—	1	1	—
か		馬 鹿	2	—	—	2	2	6	15	ひ 2 力 7
		馬鹿くさい	—	—	—	—	1	1	1	—
		馬鹿げる	—	—	—	—	1	1	2	力 1
		馬鹿々々しい	—	—	—	—	4	4	3	ひ 1
*し	か	〔人 名〕注3)	—	—	—	1	2	3	3	—
*か		〔人 名〕注4)	1	—	—	1	2	4	4	—
		〔地 名〕注5)	—	3	3	2	3	11	11	—
*おんだ		小鹿田〔地名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
25裾	31		2	—	1	25	3			

注1) 那須 1 那智ノ山 2 那津子 4 那美 1 与那嶺 1

注2) 那古 1 那須野〔～ヶ原〕 1 伊那 1 支那 5

注3) 鹿子 1 鹿田 2

注4) 鹿野 1 鹿乃子 1 鹿門 1 山鹿 1

注5) 鹿兒島 5 鹿籠 1 鹿島 2 鹿沼 1 鹿屋 1 鈴鹿 1

数字 音訓	度数 音訓	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
	す	裾	—	—	—	16	—	16	17	力 1
		裾 口	—	—	1	—	—	1	—	
		裾 線	—	—	—	4	—	4	4	—
		裾 野	1	—	—	—	—	1	1	—
		裾 幅	—	—	—	4	—	4	4	—
		裾 山	—	—	—	1	—	1	1	—
		裳 裾	—	—	—	—	1	1	1	—
		山 裾	1	—	—	—	2	3	3	—
26	駄	31	5	5	3	6	12			
	タ	下 駄	—	1	—	—	1	2	2	—
		下駄ばき	—	—	—	1	1	2	2	—
		下駄箱	—	—	—	1	—	1	1	—
		駒下駄	—	—	—	—	1	1	1	—
	ダ	駄	—	2	—	—	—	2	2	—
		駄 目	3	2	2	3	6	16	31	ひ 9 力 6
		無 駄	2	—	1	1	1	5	10	力 5
		無駄口 ^マ	—	—	—	—	1	1	1	—
	*ダ	多駄志〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
27	彦 ^ロ	30	4	1	2	9	14			
	*ひ	こ〔人 名〕注1)	4	1	2	9	13	29	29	—
		彦根〔地名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
28	吾 ^ロ	29	7	7	1	4	10			
	わ	れ 吾	1	1	—	1	2	5	24	我 8 ひ11
		吾 々	2	4	1	—	1	8	51	我 8 ひ39
	わ	吾 が	1	—	—	1	1	3	78	我15 ひ60
	あ	吾 子	1	—	—	2	—	3	3	—
	*ゴ	〔人 名〕注2)	2	2	—	—	6	10	10	—
29	智 ^ロ	29	3	4	1	3	18			

注1) 彦一 2 彦左衛門 4 彦兵衛 1 昭彦 1 一彦 1 勝彦 1 桐彦 1 重彦 2
武彦 1 穀彦 1 哲彦 1 利彦 1 豊彦 1 虎彦 1 儒彦 3 英彦 1 道彦 6
注2) 吾一 2 安吾 1 十吾 1 俊吾 1 省吾 1 正吾 1 伸吾 1 慎吾 1 省吾
1

数字	度数	その音訓を用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の総度数	その語の他の表記の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
チ		智	1	—	—	1	—	2	2	—
		智 恵	—	—	—	—	2	2	3	知 1
		世 智	1	—	—	—	—	1	1	—
		無 智	1	—	—	—	—	1	3	知 2
*チ		〔人 名〕注1)	—	3	—	2	15	20	20	—
		智頭〔地名〕	—	—	1	—	—	1	1	—
*さ	と	智子〔人名〕	—	1	—	—	—	1	1	—
*と	も	智雄〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
30筈	29		6	3	—	6	14			
は	ず	筈	6	3	—	6	13	28	56	ひ28
*は	ず	筈見〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
31貫	29		3	9	—	3	14			
もらう		貫いさげ	—	—	—	—	1	1	1	—
		貫 う	3	9	—	3	13	28	76	ひ48
32呂	27		4	5	—	7	11			
ロ		呂 律	—	—	—	—	1	1	1	—
		岩風呂	—	—	—	—	1	1	1	—
		語 呂	—	—	—	—	1	1	1	—
		据風呂	1	1	—	—	—	2	2	—
		風 呂	1	3	—	1	4	9	9	—
		風呂好き	—	1	—	—	—	1	1	—
		風呂場	1	—	—	—	1	2	2	—
		湯風呂	—	—	—	—	1	1	1	—
*ロ		〔人 名〕注2)	1	—	—	6	2	9	9	—
33仙	26		2	5	1	1	17			
セ	ン	仙 貨	1	—	—	—	—	1	1	—
		仙 骨	—	1	—	—	—	1	1	—
		歌 仙	—	—	—	—	1	1	1	—
		銘 仙	—	1	—	1	—	2	2	—

注1) 智恵子1 智山1 智衆1 明智1 佐智子1 武智3 那智子2 那智ノ山
2 美智子6 美智也2

注2) 呂1(韓国人姓) 野呂1 比呂美6 茂呂1

数字	度数	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 叙度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
*セ	ン	[人 名]注1) [地 名]注2)	1	1	—	—	14	16	16	—
			—	2	1	—	2	5	5	—
34戻△	25		7	4	2	7	5			
もどす	戻 す		—	—	—	2	—	2	2	—
	押し戻す		—	—	—	1	—	1	1	—
	連れ戻す		—	—	—	—	1	1	1	—
	取戻す		1	2	—	—	1	4	6	ひ 2
もどる	戻 り		—	—	2	—	—	2	2	—
	戻り駕		—	1	—	—	—	1	1	—
	戻 る		4	—	—	2	3	9	12	ひ 3
	後戻り		1	—	—	—	—	1	1	—
	編み戻る		—	—	—	2	—	2	2	—
	出戻り		—	1	—	—	—	1	1	—
	舞い戻る		1	—	—	—	—	1	1	—
35阿	24		2	10	—	4	8			
ア	阿 呆		—	3	—	—	—	3	3	—
	阿 房〔～宮〕		—	—	—	—	3	3	3	—
	阿呆鳴き		—	—	—	—	1	1	1	—
*ア	[人 名]注3)		1	5	—	4	4	14	14	—
	[地 名]注4)		1	2	—	—	—	3	3	—
36頬	24		2	3	—	5	14			
キョウ	豊 頬		—	—	—	1	—	1	1	—
ほ お	頬		1	3	—	4	12	20	20	—
	頬かむり		1	—	—	—	—	1	1	—
	頬ずり		—	—	—	—	1	1	2	ひ 1
	頬 杖		—	—	—	—	1	1	1	—
37於	23		10	3	5	—	5			
おいて	於いて		10	3	4	—	5	22	76	ひ54

注1) 仙吉 2 仙子 5 仙十郎 2 仙介 1 仙太 4 逸仙 1 華仙 1

注2) 仙石原 4 仙台 4

注3) 阿部13 阿弥陀 1

注4) 阿波 2 北阿 1

数字	度数 音訓	その音訓を 用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の 総度数	その語の 他の表記 の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
*オ		おほ 於保〔人名〕	—	—	1	—	—	1	1	—
38嫌	22		3	7	—	6	6			
	ケ	嫌 惡	—	—	—	—	2	2	2	—
		嫌 疑	—	—	—	—	1	1	1	—
		気 嫌	2	3	—	3	1	9	10	ひ 1
	い	嫌	—	1	—	—	—	1	28	{ 厭 8 力 3 } ひ 16
		嫌がる	1	—	—	—	1	2	2	—
	きらい	嫌 い	—	—	—	2	—	2	6	ひ 3 力 1
		女嫌い	—	1	—	—	1	2	2	—
		負けず嫌い	—	—	—	1	—	1	1	—
	きらう	嫌 う	—	2	—	—	—	2	5	ひ 3
39堀 [△]	21		1	5	1	1	13			
	ほ	堀	—	—	—	—	1	1	3	壕 1 濠 1
	ほ	堀り返えす	—	—	1	—	—	1	1	—
		堀 る	—	3	—	—	3	6	7	彫 1
	*ほ	り〔人名〕注	1	2	—	1	9	13	13	—
40拭	21		1	4	2	6	8			
	シヨク	払 拭	—	—	1	—	—	1	1	—
	ぬぐう	拭 う	—	—	—	2	3	5	6	ひ 1
		手 拭	—	2	—	1	5	8	9	ひ 1
	ふ	拭 く	1	2	1	3	—	7	10	ひ 3
41綴	21		—	2	—	17	2			
	つづる	綴 ^{とじ} 方	—	2	—	—	2	4	4	—
	とじる	綴	—	—	—	1	—	1	1	—
		綴じる	—	—	—	1	—	1	2	ひ 1
		綴合す	—	—	—	1	—	1	1	—
		綴合せる	—	—	—	3	—	3	3	—
		綴 代	—	—	—	1	—	1	1	—
		綴じつける	—	—	—	2	—	2	3	ひ 1
		綴 針	—	—	—	7	—	7	7	—
		中綴じ	—	—	—	1	—	1	1	—

注1) 堀田 1 堀 5 堀内 1 堀江 1 赤堀 2 岩堀 2 小堀 1

数字	度数	その音訓を用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の総度数	その語の他の表記の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
42	狙 21		1	3	4	1	12			
	ソ	狙 撃	—	1	—	—	3	4	4	—
	ねらう	狙 い	—	1	3	1	3	8	12	ひ 4
		狙 う	1	1	1	—	5	8	15	ひ 7
		つけ狙われる	—	—	—	—	1	1	1	—
43	駈 21		4	5	1	1	10			
	かける	駈け足	—	—	—	—	1	1	2	ひ 1
		駈けおる	—	—	—	—	1	1	1	—
		駈け込み	—	1	—	—	—	1	2	ひ 1
		駈け込む	1	—	—	—	1	2	4	駈 1 ひ 1
		駈けつける	—	2	—	—	1	3	11	駈 1 ひ 7
		駈け抜ける	—	—	—	—	1	1	1	—
		駈 引	—	—	—	—	1	1	1	—
		駈け廻る	—	—	1	—	—	1	1	—
		駈ける	2	2	—	1	4	9	11	駈 1 ひ 1
	か る	駈 る	1	—	—	—	—	1	4	駈 2 ひ 1
44	灯 [△] 20		2	4	2	1	11			
	ト ウ	灯	—	—	—	1	1	2	5	燈 3
		灯 台	—	1	—	—	1	2	5	燈 3
		電 灯	—	—	2	—	—	2	5	燈 3
	ともしび	灯	—	2	—	—	2	4	5	ひ 1
	ひ	灯	2	1	—	—	5	8	9	燈 1
		灯明り	—	—	—	—	1	1	1	—
	ほ	灯 影	—	—	—	—	1	1	1	—
45	籠 20		4	—	—	4	12			
	ロ ウ	籠 居	—	—	—	—	1	1	1	—
		籠 城	—	—	—	—	1	1	1	—
		印 籠	—	—	—	—	1	1	1	—
		参 籠	1	—	—	—	—	1	1	—
		蒸 ^せ 籠	1	—	—	—	—	1	1	—
	か こ	籠	—	—	—	—	1	1	1	—
		籠 中	—	—	—	1	—	1	1	—
		花 籠	—	—	—	1	—	1	1	—

数字	度数	その音訓を用いた語	その語の度数(部門別・全体)						その語の総度数	その語の他の表記の度数
			I	II	III	IV	V	全体		
	こめる	籠める	—	—	—	—	1	1	12	ひ ¹¹
	こもる	籠る	2	—	—	1	—	3	5	ひ ²
	かご	駕籠	—	—	—	—	5	5	5	—
	はたご	旅籠	—	—	—	—	1	1	1	—
	*かご	花籠〔人名〕	—	—	—	—	1	1	1	—
	*こめ	鹿籠〔地名〕	—	—	—	1	—	1	1	—

度数 19~11 の表外漢字については、内訳を省く。ただし、左側の数字に全体の度数、右側の数字に人名・地名に用いられた度数を示す。

俺	19	—	稼	15	—	呆	12	—	猿	11	3
叩	19	—	竊	15	—	喰	12	—	甚 [□]	11	3
虎 [□]	19	17	釣 [△]	15	—	揃	12	—	稽	11	—
奈 [□]	18	17	鍋	15	6	椅	12	—	紐	11	—
殆	18	—	鶴 [□]	15	15	此	12	—	膳	11	6
逢	18	1	坐	14	—	熊 [□]	12	2	菱	11	11
須 [□]	18	18	弥 [□]	14	14	狼	12	—	訊	11	—
鳩	18	16	拶	14	—	甌	12	—	駒 [□]	11	6
也 [□]	17	17	挨	14	—	芯	12	—			
塚	17	17	會	14	13	蝶 [□]	12	11			
旦	17	—	汁 [△]	14	—	卸	12	—			
靴	17	—	泥 [△]	14	—	亭 [△]	11	—			
斬	16	—	匂	13	—	厭	11	—			
桂 [□]	16	9	尚 ^{△□}	13	2	吞	11	—			
渦	16	16	淵	13	11	嘉 [□]	11	10			
眺	16	—	漬	13	—	嬉	11	1			
笠	16	11	肌	13	—	撒	11	—			
霧	16	—	蓋	13	—	斐	11	1			
伎	15	—	偵 [△]	12	—	昂	11	—			
庄 [□]	15	15	勿	12	—	濯	11	—			
廿	15	—	叱	12	—	狗	11	1			

第2d表 度数の少ない教育外用漢字（度数5～1, 214字）

度數 5 (40字)	4 (45字)	3 (46字)	2 (35字)	1 (48字)				
侵 偽 克(1) 剛(2) 阜 吟 妃 嬌 幻 幽 征 恭(4) 愁 拂 暫 毆 沸 灣(3) 狩(3) 獸 疾 硝 禪 窒 笛(2) 糧 緩 胞 葬 虐 衡 賄 軟 軸 酷	鑑 閔 陶 雅(5) 雌	且 ^x 伐 煦 厘 唇 喚 墮 獎 娛 尿 帥 幣(1) 廷 弓(2) 彰(1) 循 憂 懇 搾 擬 曇 枢 欺 涼 煩 ^x 牲 畜 痢 盲 碑 祥(3) 禍 箇(1) 膚 詠	許 詔 赴 醉 醜 銃 閑 震 霜 顯(4)	享 倫 喪 噴 嫡 宰(2) 尉(1) 映 崇 帆 廉 弦 彫 徐 慈(1) 愉 慨 抄 挾(1) 扶 排 曉(1) 晶(3) 沒 淨 淑(2) 滴 斑 窈 粘 繕 翁 翻 肪 膨	芋 蚊(1) 衡 哀 諾 通 ^x 鑄 鍛 零 韻 飽	侯 剖 勅 匿 升 塊 媒 尼(2) 庶 弊 恨 情 撰(1) 斤 旋 曆 桑(2) 棺 沁 燥 爵 ^x 猶 穩 紛 累 肖 肯 胎 訟 賓 踐 逐 郭 阻 飢	儉 傲 准 劾 ^x 叙 吏 嘯 ^x 塑 奔 姻 庸(1) 悅 ^x 悼 憩 憾 捺 朽 樓(1) 款 濁 濫 ^x 畔 畝(1) 窯 緯 耗 脹 ^x 薪 虞 ^x 虜 蠻 論 謹 膳 賜	赦 轄 迅 ^x (1) 遯 ^x 遷 釀 鈍 鍊 ^x 鎮 陵(1) 頒 ^x 餓 髓

() 内の数字は、人名・地名に使われたもの。

第2e表 度数の少ない教育漢字（度数 10～1, 30 字）

度数 10	9	8	7	6	5	1
俵 兼(2) 冬(2) 旗(2) 聖(2) 誠(6) 質	刷 勸 序 拝 胃 芽 貝(4) 銅 預	是 湖(2) 秒 脈	孝(1) 舌 贅	耕(3) 陸	暑 臨	后 耄(1) 穀

第2f表 標本には一度も現われない当用漢字

(a) 教育漢字（2 字） 蚕 式

(b) 教育外当用漢字（38 字）

丙 儒 兆 凶 嗣 嘱 墜 墳 壘 寡× 弔 弧 拷 斥 朕× 殉 渴 漆
璽× 疫 痘 礁 篤 糾 繭 罷× 艇 薦 詔 謁× 貢 迭 酪 錘 錠 閔
陪 隸×

第2g表 当用漢字表の補正案の漢字

(a) 加えられる漢字

(b) 除かれる漢字

漢字	度数（人地）	漢字	度数（人地）	漢字	度数（人地）	漢字	度数（人地）
亭	11 一	杉	35 29	且	4 一	爵	2 一
俸	一 一	棧	4 一	丹	15 13	璽	一 一
偵	12 一	殼	5 1	但	6 1	箇	13 一
僕	106 1	汁	14 一	効	1 一	罷	一 一
厄	5 一	泥	14 一	又	56 3	脹	1 一
堀	21 13	洪	1 一	唐	6 4	虞	1 一
壤	1 一	涯	6 一	嚇	1 一	謁	一 一
宵	6 一	渦	6 一	堪	12 一	迅	1 1
尚	13 2	溪	一 一	奴	26 一	遁	3 一
戾	25 一	矯	3 一	寡	一 一	遵	1 一
披	7 一	酌	一 一	悅	1 一	鍊	1 一
挑	5 一	釣	15 一	朕	一 一	附	38 一
据	8 一	齊	2 2	濫	1 一	隸	一 一
朴	6 一	竜	42 38	煩	4 一	頒	1 1
		計	373 86			計	195 22

〔付〕 助詞・助動詞に使われた漢字

漢字	度数	語	その語の漢字の度数	その語の総度数	漢字	度数	語	その語の漢字の度数	その語の総度数
迄 [×]	12	まで	12	437	知	2	かしら	2	23
乍 [×]	10	ながら ¹ 注1)	9	176	非	2	あらず 注2)	2	1410
		ながら ²	1	19	不	1	ず〔～可侮〕	1	233
候	8	そうろう 注2)	8	8	切	1	きり	1	9
等	5	など	5	340	可	1	べし	1	113
無	4	ない ¹ 注3)	2	1483	嗜 [×]	1	のう(終助詞)	1	4
		ない ²	2	573	座 [○]	1	ござる 注2)	1	37
也 ^{×○}	3	なり	3	1719	御 [○]	1	ござる 注2)	1	37
丈	2	だけ	2	327	許	1	ばかり	1	113
之 ^{×○}	2	の	2	12068					

(注1) <ながら¹>は、動詞連用形につくもの。<ながら²>は、それ以外の形につくもの。

(注2) <そうろう><あらず><ござる>等は、普通には動詞として扱われるものであるが、この調査では陳述の意を表わす場合は助動詞として扱った。

(注3) <ない¹>は、打消の助動詞。<ない²>は、普通に形容詞として扱われるもののうちで形式的用法をもったもの。(斎賀)

B. 漢字含有率の推定

漢字の使用情況の調査は、対象をただ漢字だけに限っていたのでは、まだ十分とは言えない。調査対象は漢字かな混じり文であり、数字やローマ字なども合わせて使っている。そこで、漢字が使われた割合というものもまた、漢字の使用情況を押える一つの目安となる。

ただしわれわれは、雑誌一般の用語調査のために抜いた標本についての総字数は、測らなかった。これを測る労力は相当のものであるし、また上記の割合を推定する目的ではそれほど多くの延べ字数について調べる必要もないと考えられる。それでこの推定のために新たな標本を抜くことにした。その方法は次の通りである。用語調査の標本は、部門別に雑誌の八分の一ページ相当の本文を単位とし、これをランダムに160個組み合わせた集落(つまり二十ページ分の本文)を作り、この集落を抽出単位にしてある。更に採集用カードはおおむね、その八分の一ページ分の単位二つを収めて、タイプ印刷してある。そこで

既に作ってある採集用カードから各部門50枚ずつを再びランダムに抜いて、この推定のための標本とした。こうして得た標本は實際上、調査対象を四分の一ページに相当する分量に仕切り、そこから各部門50個ずつをランダムに選んだものと、見なして大過ない。

以上の抜き方では、抽出比が最大の層でも約二千二百分の一を抜いたに過ぎないから、推定精度の算出に当っては有限修正項を省略した。推定方式は比推定である。信頼区間は、安全を期して水野の不等式（95パーセントの信頼度を持たせるための係数は約2.6）によって求めた。

推定結果は次の第3表、第4表に示す通りである。第3表の(1)ないし(6)は次のものをさす；(1)は漢字(漢数字を含む)、(2)は平がな、(3)は片かな、(4)は洋数字、(5)はローマ字、(6)は言語表現に相当する記号で文字以外のもの（ただし句読点を含まない）。「総字数」というのは(1)から(6)までの個数の和である。

第3表 観測値など

区分	標本比率 (%)						一ページ 平均字数	標本の 総字数	調査対象 の構成比
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)			
一層	34.38	60.41	4.75	.04	.31	.01	1278	15980	.1205
二層	37.78	56.24	5.87	.06	.05	.00	1348	16766	.1737
三層	42.50	45.15	4.55	7.36	.26	.18	1435	17941	.1383
四層	32.44	55.58	9.51	2.11	.34	.02	1334	16678	.1839
五層	34.36	59.07	6.20	.30	.07	.00	1325	16558	.3836
全般	35.82	56.03	6.34	1.61	.17	.03	1336	—	1.0000

第4表の(a)欄は漢字含有率の推定値で、95パーセントの信頼度の幅をつけた

第4表 漢字含有率の推定

区 分	(a)	(b)	(c)
一層（評論・芸文）	31.69～37.27	1.08	3.13
二層（庶民）	34.58～40.98	1.23	3.27
三層（実用・通俗科学）	37.99～47.01	1.74	4.09
四層（生活・婦人）	29.71～35.16	1.11	3.42
五層（娯楽・趣味）	32.11～36.61	.87	2.58
全般	34.54～37.11	.50	1.40

もの、(b)欄は推定量の平均二乗誤差の平方根、(c)はそれを第3表(1)欄の値で割って百分率で表わしたものである。(b)と(c)とは推定精度を知る上の参考として添えた。

(水谷)

日本言語地図作成のための調査（第3年度）

- A. はじめに
- B. 調査にたずさわった人々
- C. 調査のあらまし
 - 1. 調査に先立って現地との打ち合わせ
 - 2. 質問にあたって
- D. 調査の進行状況
 - 1. 調査地点
 - 2. 調査の実際
- E. 調査者の言語の調査
- F. 来年度以降の見通し

A. はじめに

7か年計画の「日本言語地図作成のための調査」は、昭和34年度の調査が完了して、その第3年度が終わった。臨地面接調査した地点は、第1年度323、第2年度343、第3年度308、合計974地点となった。

B. 調査にたずさわった人々

この調査は、国立国語研究所地方言語研究室がセンターとなって、調査全般の企画・運営および結果の整理に当たる。臨地面接調査は、主として地方研究員が地域を分担して行ない、地方言語研究室の室員も随時これに加わった。

昭和34年度の調査にたずさわった人々は、次の通り。

調査者番号	担当地域	氏名	勤務先（1960年4月現在）	住所（同左）
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部（助教授）	北海道札幌郡豊平町月寒西3条5丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学札幌分校（助教授）	札幌市北24条西9丁目札幌北住宅201
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	道立札幌北高校（教諭）	札幌市北2条西12丁目
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部（教授）	弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校（教頭）	盛岡市下小路63

48	宮城	加藤 正信	東北大学大学院(学生)	仙台市南小泉伊藤屋敷48
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町 1
08	山形	後藤 利雄	山形大学文理学部(講師)	山形市緑町 2 丁目 4 の 4
53	福島	須佐 善信	県立会津高校通信教育部(教諭)	会津若松市町北町中地 873
—	茨城	—————	—————	—————
11	栃木	多々良 鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一の沢町196
12	群馬	上野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	沼田市810
52	埼玉	江原 襄	市立城南中学校(教諭)	川越市大仙波11
14	千葉	加藤 信昭	都立大学大学院(研究生)	東京都渋谷区代々木上原町1172
49	東京・神奈川	日野 資純	静岡大学文理学部(助教授)	静岡市大岩町363の1
16	新潟	剣持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	柏崎市北園町若葉荘
17	富山・石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部(助教授)	石川県河北郡津幡町字清水313
18	福井	佐藤 茂	福井大学(教授)	福井市湊新町66
19	山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町百々々3062
20	長野	青木千代吉	篠ノ井市立通明中学校(教諭)	長野県更級郡更北村中氷鉤1089
21	岐阜	谷開 石雄	県立中津高校(教諭)	中津川市淀川町伊藤駿方
22	静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市小鹿 1 静大公務員宿舎
23	愛知	山田 遼也	日本福祉大学(講師)	名古屋市中村区大秋町 3 の 24
47	三重	杉浦 茂夫	県立神戸高校(教諭)	津市乙部730
50	滋賀	寛 大城	県立虎姫高校(教諭)	長浜市分木町1260佐脇一義方
25	京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部(助教授)	岐阜市長良六本松岐大公務員宿舎
26	大阪	前田 勇	大阪学芸大学(教授)	大阪市東住吉区田辺西ノ町 6 の 34
27	兵庫Ⅰ	和田 実	神戸大学文学部(講師)	神戸市垂水区西垂水町神田122
28	兵庫Ⅱ	岡田 荘之輔	町立温泉小学校(校長)	兵庫県美方郡温泉町湯1293
29	奈良	西宮 一民	帝塚山学院短期大学(助教授)	枚岡市河内町920

30	和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市真砂町1大学住宅
31	鳥取	広戸 惇	島根大学文理学部(教授)	出雲市元宮町
32	島根	岡 義重		島根県簸川郡斐川村大字富村
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市高島新屋敷354
34	広島	村岡 浅夫	村立吉和中学校(校長)	広島県佐伯郡五日市町屋代
35	山口	阿波 陽	県立大津高校(教諭)	山口県大津郡日置村古市
36	徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部(助教授)	徳島県那賀郡那賀川町島尻932の2
37	香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部(教授)	高松市九番丁八番地九番丁公務員宿舎41
38	愛媛	杉山 正世	新田高校(講師)	今治市松本通2丁目
39	高知	土居 重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市弥生町44
40	福岡	都築 頼助	福岡学芸大学福岡分校(教授)	福岡市高宮玉川町93
41	佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部(学部長)	佐賀市赤松町中館
42	長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部(助教授)	長崎市西北町291の37
43	熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部(助教授)	熊本市健軍若葉町36
44	大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部(助教授)	臼杵市海添190
45	宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部(助教授)	宮崎市下水流町190の1
46	鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文理学部(教授)	鹿児島市武町965
51	沖縄	仲宗根政善	琉球大学(教授)	那覇市宇大道262
				以上地方研究員47名
99		柴田 武(室長)		
98		野元 菊雄		
97		上村 幸雄		
96		徳川 宗賢		以上研究室員4名

なお、地方言語研究室では、この調査について言語地理学の専門家W・A・グロータース神父の協力を受け、また、研究補助員白沢宏枝が、室員の調査研究を助けた。

C. 調査のあらまし

年報9で調査のあらま시를説明したが、補うべき点が若干ある。

1. 調査に先立っての現地との打ち合わせ あらかじめ連絡なしに調査地点に出

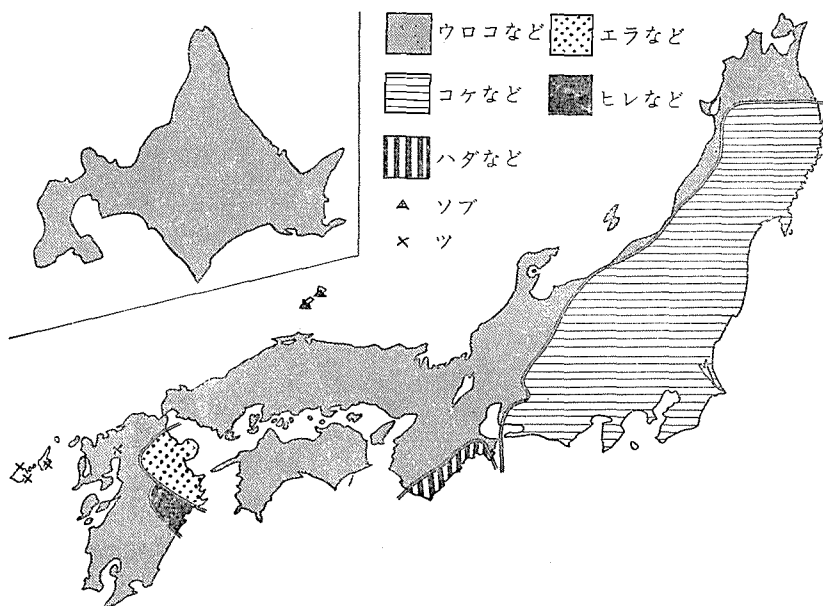
向くと、その場で調査の趣旨を説明したり、被調査者の紹介を依頼したりで時間をとられる。現地に到着するに先立って、文書での打ち合わせがあれば、調査が能率的に進むことが多い。地方研究員からの要求もあったので、地方言語研究室では、昭和33年度から、a. この調査の趣旨を解説した配布用の印刷物とb. 被調査者の紹介を依頼する時に利用する被調査者の条件を説明した印刷物の2種を作った。昭和34年度には、その内容を改訂したので、ここにその全文を引用しておこう。

a. 「日本言語地図」を作る調査について（調査の趣旨の解説）

国立国語研究所では、昭和32年度を第1年度として、7か年計画で日本言語地図（方言地図）を作るための調査を行なっております。ただいま、北は北海道宗谷岬の北端から、南は沖縄の島々まで、全国ではぼ2,500地点を、50人の調査員が緊密な連絡をとりながら、現地調査をしております。

日本では古くから方言の研究はありますが、それは各地の研究者がそれぞれの立場で互に無関係に調べていたと言ってもいい状態で、日本全国を完全に統

第1図 ウロコ（鱗）



一のある企画で、同じ時期に厳密に調べたということは、今まで例がありません。

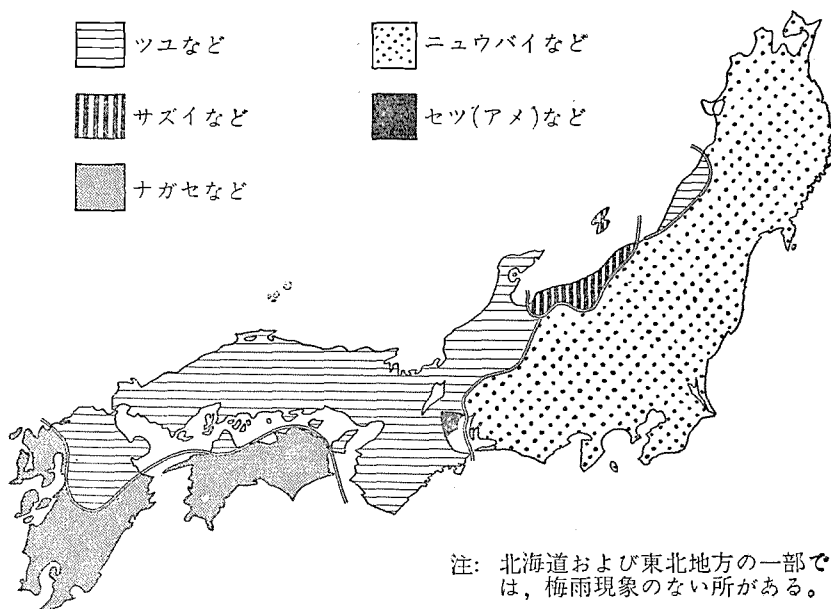
外国では、古くはフランス、ドイツ、最近ではアメリカ、ソ連など、世界の多くの国々で、こういう方法で調べた方言地図ができていて、その国の言語の歴史と、これからの変化の方向を探る手がかりが与えられています。日本にはこれらに比較できるものがありません。

この調査をやりとげて日本の方言地図が完成すれば、まず、現代共通語の基盤になっている東京のことばが、どういう性格のものが明らかになります。東京のことばの勢力は現在どの範囲に広がっているか、そしてどのように地方の方言の中に浸透していつているか、また、東京のことばに対立した勢力を持つ方言はどの地方の方言かが、手に取るようにわかります。

このことは、将来、標準語を確立する際の有力な資料を提供することになり、また、国語教育に役立つ資料を備えることにもなります。

幸に、各地の協力を得て、計画どおり、りっぱな日本語地図を作りたいと

第2図 つゆ（梅雨）



思います。

参考までに、第2年度までの調査結果の一部をあげておきます。

第1図によって、共通語のウロコは、元来は東京のことばではなく、関西系のことばであることがわかります。北海道のウロコは、共通語が新しく広がったものと思われます。

第2図によっても、同様に、共通語ツユは、東京固有のことばでないことがわかります。しかし、ウロコのときよりもその勢力は強くありません。ウロコに比べると西の方に大きな第3勢力のある点が注目されます。なお、ツユもウロコも、両方とも、共通語形はその他の地域にだんだん勢力を広げています。

b. 方言を話す人を御紹介下さい（被調査者紹介についての依頼）

国立国語研究所（文部省）では、「日本言語地図」を作るために、いま日本全国で方言調査を行なっています。この調査が成功するかどうかは、調査対象としていい人が得られるかどうかにかかっています。また全国各地で同じ条件の人を調べなければ、結果を一枚の地図にあらわすことはできません。たとえば、男の人と女の人とはことばが違いますから、甲地では男、乙地では女を調べてきたのでは、地図は書けません。年齢などについても、大体同じような人を全国で調べる必要があるわけです。

こんど御地が調査地になりましたので、次の条件に合う人を御紹介願いたいと思います。ごめんだうなことで恐縮ですが、よろしくおとりはからいのほど願ひあげます。

(1) どういう人を調べるか

次のような条件をすべて満たしているおじいさんをひとり調べたいのです。

- (i) 明治36年以前に生まれたおじいさん（満56歳以上。ただしあまり年をとっているかたは避けたい。せいぜい満70歳ぐらゐまで）。
- (ii) 生まれてから満15歳まではよその土地（他の市町村や、よその字）で生活したことのない人。
- (iii) それ以後、よそ（他の市町村）で生活したとしても、その期間が3か年までの人（もちろん、兵隊生活も、よそでの生活にはいります）。

必要な条件は以上の三つです。その人の職業・学歴・階層などは特に決めま

せんが、御地の平均からいって、あまり特殊でない人がいいのです。いうまでもありませんが、老いこんでしまつてわけのわからない人・耳の遠い人・齒が抜けて発音のはっきりしない人・目の見えない人などは調査には向きません。日常の生活に方言を多く使うかたで、以上の条件になつた人なら、どなたでも結構です。特に方言について研究している人、興味を持っている人である必要はありません。

調べるのは以上のようにひとりでいいのですが、その人がどつごうの悪い場合などのために、同じような人を、あと2、3人考えておいていただくと、大変結構です。最初のひとりで調査が終つてしまえば、あらためておたずねいたしませんから、この予備の人人にはあらかじめお話しいただかない方がよろしいかと存じます。

(2) どういうことを調べるか

研究所から、または研究所から委嘱されて、出向いた者が、直接お目にかかつて、口頭で質問します。これに対して、同じく口頭で答えていただきます。内容は、動物・植物の名や、人事・自然に関する簡単な単語で、それを方言で何と言うか、というようなことです。たとえば、

(例1) 〔とんぼの絵を見せて〕これを何と言いますか。いろいろ種類がありますが、ひっくりめて何と言いますか。

(例2) 〔いたどりの絵を見せて〕これを何と言いますか。春先の山道などに生えます。竹のように節があつて、折つてかじると酸味があります。

(例3) 自分の妹のことを、私のオバと言いますか。

といったものです。この例でもわかるように、むずかしいことはありませんから、高い学歴の人である必要はないわけですし、読み書きできない人でも、さしつかえありません。ふつうの生活をなさっている人なら、どなたにも答えられるものです。

調査にかかる時間は、人によって違いますが、1時間から2時間ぐらい。

(3) どこで調べるか

どこでも結構です。御指定のところに参ります。役場なり学校なりへ特にお

呼び出しになる必要はありません。

なお、必要のある場合は、研究所長名の依頼状を現地に発送し、また調査が終わった場合の礼状も、同じく所長名で出している。

2. 質問に当たって 調査をどのように進めるかについては、各調査者に「調査の手引き」を配って説明してあるが（内容は、年報9「調査のあらまし」で解説した）、特定の問題について、さらに詳しく説明する方がよいと認められたので、昭和34年度にあたって「手引の補い」を作った。おもな点を次に引用しよう。

2・1 ふたつ以上の答えが得られたときの問題 被調査者の答えがふたつ以上出た場合、その区別を確かめておく必要のあることは、手引きですでに御承知の通りです。これは大切なことですから、ぜひ励行していただきたいと思います。それについて

(1) まず、二つ以上の形のうちどれが「調査することば」として、最も適切かを確かめることが大切です。共通語的か方言的かを、まずふりわけたいものです。「となりの幼なじみのおじいさんには、どう言うか」などと、場面を与えて聞いてみるのも、ひとつの方法でしょう。はっきりしない場合は、必要があれば細心の注意のもとにヒントを与えることも、さしつかえありません。たとえば、「昔使ったのはどちらですか……」というように。

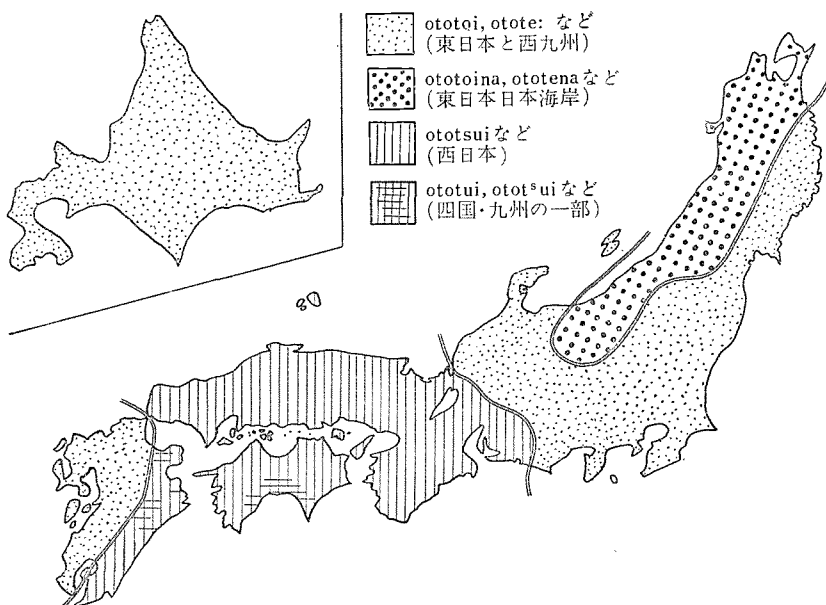
(2) 被調査者の発言が、調査員の承服しがたいものである場合もあるでしょう。個人的な見解で、その地域に普遍的な事実とかけはなれていると考えられるものもあるでしょう。しかしその場合もぜひ記録しておいてください。

(3) なお、1地点で数多くの珍しい語形を聞いてくることは、かならずしも大切なことではありません。なにより必要なのは「調査することば」を求めてくることと考えます。共通語形と一致するものを答えたとしても、それがわれわれの求めている「調査することば」であることがハッキリと確認できればいっこうさしつかえありません。その地方で使われていても、被調査者が使わない、あるいは使ったことのない言語は、参考の段階にとどまります。

(4) 2形併用の場合に、それぞれの語形の使いわけの説明が、地図理解に役立っている事例をあげることになしましょう。

第3図はオトトイ（一昨日）の分布略図です。概略的に言えば、東日本はオトトイあるいはオトテーなど（日本海岸にはオトトイナ・オトテナなどもある）西日本はオトツイ，そして九州の西側でまたオトトイ・オトテーなどが使われています。日本全国には，オトトイ類・オトテナ類・オトツイ類の三つの語形が使われているといってもよいでしょう。

第3図 オトトイ



ところが，各語形の分布をさらに詳しく言えば（図には示しませんでした）オトテナ地域には，少なからずオトトイ・オトテーなどが混在し，またオトトイ地域にはオトツイが混ざっています。同様にオトツイ地域にもオトトイ・オトテーなどを使う地点が見出されます。ところで，現在オトトイ類オトテナ類オトツイ類のうち，どれが最も強力な勢力なのでしょう。そしてどれが衰微していく形なのでしょう。それを知るひとつの手掛りが，この2形併用の場合の説明から得られるわけです。

長野県の北部（オトテナ地域）を例にとってみましょう。ここでは，*ottena* という形が強い地盤を持っていますが，一方 *ototai*, *ottoi* という形も点々と

見られます。これらの ototoi, ottoi は、古い勢力が ottena に侵略された時の、最後の抵抗つまり残存形なのでしょうか。それとも、ottena の地盤に侵入してきた新しい勢力の足がかりなのでしょうか。この問題を解決する場合、次のような同地域で聞いて来た、2形併用の場合の注記が参考になるわけです。

ottena <古>, ottoi <新・上品>

次のような例もありました。

ottena <古>, ototoi <共通語>

この地域では、逆の例、すなわち ottena を新としたり共通語としたりする例はひとつもありませんでした。したがって、ottoi あるいは ototoi が新しい勢力らしいという見通しが立ちます。どうもオトテナ類は衰微していく勢力らしい。<新らしい上品な共通語> ototoi, ottoi の勢力に犯されつつあります。

それでは、オトツイとオトトイの関係はどうでしょうか。オトトイの本場と目される東京付近で、両形を併用する地点をみてみましょう。

ototoi <ふだんの言い方>, ototsui <やや上品な言い方>

静岡県下でも、次のような例がありました。

ototoi <古>, ototsui <新>

どうもオトトイは、<上品で新しい> ototsui の侵略を受けているらしい。オトトイ地域の中で、オトツイが古い方言的な言い方だという例は、今のところ見当りません。では、現在日本全域で、オトツイが最も強い勢力を持っていると考えていいのでしょうか。ところが、どうもそうでもないらしいふしがある。兵庫県に

ototsui <古>, ototoi <共通語>

という地点がありました。また別に <オトトイと言えど多少あらたまった言い方、オトツイは家庭内での言い方> という説明を得た地点もあります。愛媛県の東の端でも

ototsui <ふだんはこれを多く使う>, ototoi <上品な感じ>

という例があります。オトツイ類は、東日本では新しい勢力のように見えたのですが、西日本へ来ると逆に <上品な共通語> オトトイ類の侵略を受けているものと見受けられます。不思議なことですが、事実は事実です。そこで、オト

ツイ類とオトツイ類との関係は、（もちろん第2年度までの調査結果だけを材料とした推定ですが）相互侵略という珍らしい形態をとっているらしいという見通しが立ちます。オトツイ類とオトツイ類とは、現在ほぼ同じ力を持っていて、お互に相手の勢力圏に「上品な共通語」として侵入しつつあると認めています。

このことを推定する資料は、2形併用の場合の注記でした。静態的な方言分布図を、動態的なものにおきかえるひとつの材料とっていいかもしれません。以上で、使いわけの説明を求めることが、地図解釈にとって無意味どころでなく、本当に役に立つということがわかっていただけたと思います。雑誌「言語生活」（昭和33年8月号）にのった柴田の「方言の古い層と新らしい層」という論文なども、参考になろうかと思います。2形併用の場合は、ぜひその区別を聞きとっていただきたいと思います。

2.2 第3者の同席する場合の問題 被調査者は1地点について1名、つまり調査は1対1で行なうことを条件としています。しかし、しばしば被調査者でない第3者（紹介者や被調査者の家族など）が、調査の場に立ち合うことがあります。これは特に避ける必要はありませんが、その際いろいろ注意すべきことがあります。次に列記しましょう。

(1) 調査の相手は、あくまで被調査者個人であって、報告は被調査者と第3者とが納得ずくで相談の上で決めるべきものではありません。第3者が認めるか認めないかは、注記するしないは別として、答の採否には無関係です。

(2) 第3者が立ち合うことで被調査者の心にゆとりができる、自然な気持ちで答えてくれるようになる…、それは大いに喜ばしいことで、調査者もそういうふんいきを作るように調査を運ぶべきですが、しかし、それでも第3者の発言が参考の段階にとどまることは、(1)でのべた通りです。

(3) もし、第3者の立ち合うことが調査のさまたげになるならば、これは大変困ります。第3者が、被調査者の答えをさえぎったり否定したりして、被調査者が自然な自由な気持ちで答えることのできないような事態は、極力避ける必要があります。これは、被調査者の目上の人でしかも方言に興味を持っている人が立ち合う時などに、起こりがちです。

第3者が、被調査者より先に発言することも、被調査者の自然な答えに大いに動揺を与えますから、絶対に許せません。だれかが調査に立ち合うことが事前にわかっている場合は、あらかじめ調査の進め方を了承してもらっておく方が好都合でしょう。

(4) 第3者の発言を記録する必要があるかどうかの判定は、調査者にまかされています。つまり不必要とお考えのものは、捨ててさしつかえありません。採用する場合は、被調査者が、それを自分の答えの補いとして認めたか認めないかを記録しておいてください。

(5) 被調査者が、第3者の発言を認めたか認めないかの判定は、実際の場合ではなかなかむずかしいことです。調査者の腕のふるいどころと言えましょうか。第3者の顔を立てるためにしぶしぶ認めるのと、ど忘れしていたのを教えてもらって大喜びなのとでは、同じ認めるにしても全く趣きをことにします。確かでないものは、めんどうでもいちいち被調査者自身が確実に使うか、使ったかどうかを確かめる必要があります。

(6) なお、参考とすべき発言をした第3者があった場合は、その第3者の経歴を被調査者に準じて聞いておく必要があります。

D. 調査の進行状況

1. 調査地点 昭和34年度、すなわちこの調査の第3年度には、308か所での臨地面接調査を行なった。調査を開始してから3か年で974地点の調査が終わったことになる。以下に、昭和34年度に調査した地点の地名と、その調査者(番号)とを示そう。

調査地点	調査者番号	調査地点	調査者番号
北海道		厚岸郡厚岸町字奔渡町	02
苫小牧市表町	01	川上郡標茶町字標茶	02
根室市平内町2丁目	02	夕張郡栗山町栄町	01
松前郡松前町字大磯	03	樺戸郡新十津川町菊水町	01
松前郡福島町字福島	03	空知郡富良野町学田1区	02
上磯郡知内村字本町	03	青森県	
山越郡八雲町字建岩	03	青森市松原町	04
増毛郡増毛町字箸別	01	青森市大字清水	96

十和田市上切田字関口	97	山形県	
東津軽郡野内村大字久栗坂	96	鶴岡市五日町	08
南津軽郡大鰐町大字三ツ目内	96	鶴岡市大字三瀬字水無	08
南津軽郡浪岡町大字浪岡字岡田	04	酒田市大字浜田字堀北	08
北津軽郡板柳町大字板柳字土井	04	上の山市大字金瓶字原	08
上北郡甲地村中村	97	上の山市檐下	08
三戸郡南部町大向下樺	97	西村山郡西川町大字間沢	08
岩手県		西村山郡朝日町大字宮宿字前田沢	08
宮古市重茂大字重茂第2地割	05	東田川郡朝日村大字本郷字上の平	08
上閉伊郡大槌町大槌	05	最上郡最上町堺田	48
下閉伊郡山田町豊間根字新田	05	福島県	
下閉伊郡山田町船越	05	喜多方市塗物町	53
下閉伊郡岩泉町11地割	05	会津若松市町北町中地	99
下閉伊郡岩泉町大字門	05	東白川郡鮫川村大字赤坂中野字新宿	96
岩手郡葛巻町第12地割	05	南会津郡南郷村大字鶴巣字村中	53
岩手郡岩手町沼宮内	05	耶麻郡北塩原村大字檜原字金山	53
岩手郡西根村平館東26地割	05	耶麻郡熱塩加納村大字熱塩字前田	53
紫波郡紫波町南日詰箱清水第9地割	05	耶麻郡西会津町野沢堀越	53
紫波郡都南村見前15地割	05	耶麻郡猪苗代町字中町	53
二戸郡安代町字田山	07	大沼郡三島村大字宮下	53
宮城県		田村郡船引町船引南町通1	99
気仙沼市内の脇	48	双葉郡広野町大字上北迫字二本柵	97
伊具郡丸森町字金山	48	茨城県	
加美郡小野田町字津野字漆沢	48	水戸市七軒町	99
玉造郡鳴子町川渡	48	那珂湊市六町目	99
遠田郡涌谷町字新町	48	北茨城市大津町五浦	97
桃生郡鳴瀬町小野	48	那珂郡大宮町北三丁目	96
牡鹿郡女川町鷺の神	48	真壁郡真壁町大字白井	98
本吉郡志津川町志津川	48	栃木県	
本吉郡本吉町津谷	48	今市市大沢町	11
秋田県		那須郡馬頭町大字馬頭	11
能代市柳町	07	塩谷郡喜連川町大字喜連川	11
大館市十二所別所(合津)	07	安蘇郡葛生町大字葛生	11
南秋田郡琴浜村鶴木松木沢境	07	群馬県	
鹿角郡小坂町濁川	07	前橋市連雀町	12
山本郡八竜村浜田字一本柳	07	太田市太田	12
由利郡大内村新田	07	館林市谷越	11
由利郡矢島町館町	07	勢多郡東村沢入	12
仙北郡田沢湖町生保内字水尻	07	碓氷郡松井田町行田	12
平鹿郡平鹿町浅舞	07	吾妻郡中之条町西中之条	12

埼玉県		七尾市庵町	17
東松山市大字上野本字金谷	52	江沼郡山中町薬師町	17
入間郡毛呂山町大字毛呂本郷字宿	52	鹿島郡中島町字中島	17
入間郡名栗村大字上名栗字津辺會	52	鹿島郡能登島町字向田	17
千葉県		鹿島郡鹿西町字能登部上	17
千葉市東寺山町	14	福井県	
安房郡千倉町北朝夷小字寺庭	14	三方郡三方町三方	18
安房郡富山町久枝	14	遠敷郡上中町三宅	18
夷隅郡勝浦町部原	14	大飯郡高浜町若宮	18
長生郡本納町本納	14	山梨県	
山武郡成東町殿台	14	富士吉田市浅間町	19
千葉郡泉町高根	14	大月市上町	19
香取郡神崎町松崎	98	南巨摩郡南部町南部	19
香取郡小見川町小見川	98	長野県	
東京都		長野市東後町	20
練馬区下石神井	49	岡谷市小井川	20
立川市柴崎町	49	諏訪市上諏訪桑原町	20
三鷹市大沢	99	茅野市金沢大沢	20
北多摩郡清瀬町上清戸	49	東筑摩郡麻績村本町	20
(大島支庁) 大島町元町	49	南安曇郡堀金村田多井	20
神奈川県		北佐久郡東村志賀本郷	20
小田原市緑町	49	上水内郡中条村中条	20
逗子市逗子	49	小県郡丸子町上丸子	20
厚木市厚木	49	小県郡和田村原	20
新潟県		岐阜県	
新潟市関屋下川原	16	高山市花川町	21
三条市西四日町	16	多治見市生田町	23
小千谷市横町	16	中津川市中津川子野	21
両津市大字夷浜田一	16	加茂郡白川町黒川大字中之平	21
両津市大字水津	16	恵那郡加子母村上梁原	21
白根市茨魯根	16	益田郡下呂町宮地	21
西蒲原郡巻町	16	益田郡萩原町萩原	21
西蒲原郡内野町字内野 6 番町	16	大野郡清見村大字牧ヶ洞字徳野	21
佐渡郡相川町大字大間町	16	吉城郡宮川村字戸谷	17
佐渡郡小木町字宿根本	16	静岡県	
富山県		熱海市上多賀	22
氷見市朝日北部	17	伊東市鎌田	22
西礪波郡石動町上野本	17	伊東市八幡野	22
上新川郡大沢野町八木山	17	賀茂郡松崎町松崎	22
石川県		賀茂郡下田町中	22

賀茂郡南伊豆町下流	22	鳥取県	
賀茂郡稲取町	22	米子市和田町大字上和田	31
田方郡中狩野村本柿木小字下柿木	22	倉吉市大字海田	31
愛知県		日野郡日野町大字黒坂	31
名古屋市中区南伊勢町	23	日野郡江府町大字貝田	31
一宮市本町八丁目	23	島根県	
春日井市坂下町	23	松江市殿町（通称北殿町）	32
豊田市東梅坪町	23	益田市飯浦	32
三重県		益田市遠田	32
上野市愛宕町	47	八束郡夫道町大字佐々布	32
鳥羽市鳥羽町大里	47	仁多郡横田町大字横田字角	32
員弁郡員弁町楚原	47	簸川郡多伎村大字小田字山之空	32
安芸郡美里村足坂	47	邑智郡桜江町川戸	32
一志郡一志町川合（八太）	47	鹿足郡津和野町大字後田	32
一志郡久居町木造	47	岡山県	
滋賀県		玉野市玉	33
彦根市連着町	50	玉島市玉島	33
甲賀郡信楽町字長野	50	高梁市松山	33
甲賀郡土山町大字北土山	50	赤磐郡熊山町沢原	33
甲賀郡水口町大字北内貴	50	赤磐郡吉井町周匝	33
京都府		小田郡矢掛町矢掛	33
亀岡市宮前町字東神前	25	川上郡成羽町吹屋	33
北桑田郡美山町字佐々里	25	久米郡久米南町下二ヶ	33
相楽郡笠置町大字笠置小字栗栖	29	広島県	
中郡峰山町字吉原	25	因島市田熊町東浜	34
竹野郡丹後町間人小泊	25	竹原市吉名町港区柏下	34
大阪府		安芸郡江田島町本浦向川	34
岸和田市春木町南浜	26	安芸郡倉橋町倉橋	34
兵庫県		佐伯郡大柿町大原	34
赤穂市塩屋向	27	山県郡加計町道の口	34
高砂市高砂町田町	27	豊田郡木之江町五丁目	34
津名郡北淡町富島西之丁	27	豊田郡瀬戸田町福田	34
奈良県		豊田郡安清町内海平本	34
北葛城郡王寺町字王寺	26	山口県	
宇陀郡室生村大字三本松	29	長門市仙崎鍛冶屋町	35
和歌山県		豊浦郡豊田町大字西市下市	35
那賀郡岩出町宮	30	豊浦郡豊浦町黒井地区原	35
伊都郡高野口町名倉	30	豊浦郡豊北町大字滝部字高根	35
日高郡由良町横浜	30	美福郡美東町大田地区下新町	35
日高郡印南町印南	30	阿武郡須佐町大字須佐字水海	35

大津郡油谷町大字向津久下本郷	35
徳島県	
徳島市河内町富久	36
徳島市伊月町2丁目	36
名西郡神山町神領字中津	36
勝浦郡上勝町大字正木字硯地	36
美馬郡穴吹町古宮字葛生	36
香川県	
坂出市松ヶ枝町	37
大川郡大内町三本松北町	37
仲多度郡琴平町通町	37
愛媛県	
今治市大浜字松本	38
宇和島市大工町	38
八幡浜市旭町	38
北条市大字辻字朝日町	38
東宇和郡明浜町大字高山	38
北宇和郡津島町岩松	38
北宇和郡松野町大字吉野字豊森	38
越智郡菊間町大字佐方	38
高知県	
高知市福井町	39
安芸市伊尾木	39
土佐市宇佐西の丁	39
安芸郡芸西村和食	39
長岡郡大豊村岩原	39
長岡郡本山町本山町	39
土佐郡本川村長沢	39
高岡郡越知町	39
高岡郡窪川町窪川	39
福岡県	
若松市藤ノ木赤島町	40
甘木市大字甘木恵比須町	40
甘木市大字高木町黒川	40
粕屋郡古賀町古賀栄町2丁目	40
筑紫郡那珂川町不入道字中木戸	40
三潞郡城島町字城島	41
佐賀県	
佐賀市兵庫町下村	41
藤津郡塩田町字本谷	41

長崎県	
松浦市御厨町駅通り	42
東彼杵郡川棚町中組郷	42
西彼杵郡外海村多以良郷	42
西彼杵郡大島町幸町	42
北高来郡小長井村川原浦	42
南松浦郡新魚目町立串	42
南松浦郡久賀島村久賀	42
南松浦郡奈留島村	42
熊本県	
山鹿市日吉町	43
宇土市新一丁目	43
下益城郡小川町大字小川	43
鹿本郡植木町植木三丁目	43
菊池郡大津町陣内	43
八代郡泉村大字栗木字南川内	43
芦北郡芦北町大字計石東区	43
大分県	
佐伯市西中区中央通	44
臼杵市大字福良	44
津久見市大字津久見字西の内	44
南海部郡直川村大字上直見字竹ノ下	44
南海部郡蒲江町大字蒲江字熊野	44
南海部郡宇目村大字千束字豊藤	44
北海部郡佐賀関町大字関字西町	44
宮崎県	
宮崎市大字田吉	45
小林市大字北西方字永久津	45
串間市大字市木字石原	45
西諸県郡加久藤町永山	45
西諸県郡須木村小字永田	45
南那珂郡南郷町	45
宮崎郡佐土原町下田島	45
鹿児島県	
阿久根市琴平町	46
大口市大字山野小字下ノ馬場	46
垂水市大字柊原	46
鹿児島郡西桜島村藤野	46
川辺郡川辺町大字田部田	46
川辺郡笠沙町大字赤生木	46

日置郡吹上町大字中原	46	(宮古)平良市字東仲宗根	51
日置郡上伊集院村大字入佐	46	(宮古)平良市字久松松原	51
薩摩郡宮之城町屋地	46	(宮古)伊良部村字長浜	51
薩摩郡入来町麓	46	(宮古)伊良部村字国仲	51
始良郡隼人町大字内山田	46	(宮古)伊良部村字仲地	51
沖縄		(宮古)伊良部村字伊良部	51
南部地区(島尻郡)渡嘉敷村字渡嘉敷	51	(宮古)下地町字上地	51
(宮古)平良市字池間	51	(宮古)城辺町字友利	51
(宮古)平良市字狩俣	51	(宮古)城辺町字保良	51
(宮古)平良市字島尻	51		

(以上 308 地点)

このうち次の地点では、地方研究員と、調査センターである地方言語研究室の室員が同行して調査し、調査現場で起こるいろいろな事態について打ち合わせをして、全国での調査が統一して行なわれるようにつとめた。昭和34年度に同行調査した18か所の地点は次の通り。

なお、この同行調査は、本昭和34年で（沖縄を除いて）いちおう全部終了した。

昭和34年度同行調査地点名	地方研究員氏名	同行室員氏名
福島県耶麻郡猪苗代町字中町	須佐 善信	徳川 宗賢
埼玉県東松山市大字上野本字金谷	江原 襄	上村 幸雄
三重県一志郡一志町川合（八太）	杉浦 茂夫	徳川 宗賢
滋賀県彦根市連着町	寛 大城	上村 幸雄
鳥取県日野郡江府町大字貝田	広戸 惇	野元 菊雄
島根県八束郡矢道町大字佐々布	岡 義重	〃
岡山県久米郡久米南町下二ヶ	虫明吉治郎	〃
広島県山県郡加計町道の口	村岡 浅夫	〃
徳島県徳島市伊月町2丁目	宮城 文雄	柴田 武
香川県仲多度郡琴平町通町	近石 泰秋	〃
愛媛県今治市大浜字松本	杉山 正世	〃
高知県高知市福井町	土居 重俊	〃
佐賀県佐賀市兵庫町下村	小野志真男	徳川 宗賢
長崎県西彼杵郡三重村多良良郷	西島 宏	〃
熊本県宇土市新丁目	秋山 正次	〃
大分県臼杵市大字福良	糸井 寛一	上村 幸雄
宮崎県宮崎市大字田吉	岩本 実	〃
鹿児島県日置郡上伊集院村大字入佐	上村 孝二	〃

(以上18か所)

2. 調査の実際 実際の調査がどのように行なわれたか、それを日記風にまとめて寄せた調査者があった。これは、特に報告するように求めたものではなかったが、現場のふんいきを伝えるものとして参考になる。いくつかを適宜選んで転載しよう。なお、各地点の概観（歴史・産業・交通など）・被調査者の特徴・調査の印象などについては、全地点についての報告が別にある。

2・1 順調な調査（香川県・大分県の例） a. 三豊郡三野村大見字岡崎の調査は同村の三野津中学校長を介し、同村教育委員宅で、佐藤林吾氏について行なった。高松市屋島西町（旧渦元村字西渦元）の調査は、同市屋島中学校長の紹介により、中村嘉次郎氏について行なった。いずれも適切な人選であったので、調査はきわめて能率的に快調であった。中村氏は、はじめ調査にふなれのため多少反応が遅いかとも思われたが、だんだん調子が出てきた。佐藤氏は判断も早く、かつ明晰で、答えは正確な要領を得たものであった。これら協力を惜しまれなかった人々に感謝しなければならなかった。

岡崎は、三豊郡東部の代表的な農村で、伝統も古く裕福な感じである。ことばも、三豊郡東部の純粋なものを伝えている所である。屋島西町は、いま市内になっているが、現在の高松市街より古い、古高松・牟礼などの村に続き、古くは屋島西麓に栄えた部落であったと思われる。

高松の在家に火を懸けて八島の城へぞ寄せられける（平家物語大坂越）。

源氏は陸に打上って、牟礼・高松の中なる野山に陣をぞ取ったりける（弓流し）。

したがって、高松地方のことばの共通語化していない古い姿をそのまま伝えている地域である。また海辺とはいえ塩田業者であってしかも農業を主としており、漁業者がいないから、西浜あたりのような特殊なことばもない。調査場所は、三豊では個人住宅の一室であったから、なんら不都合はなかった。屋島中学校では、校長室をあてがわれ、はじめ国語の先生がふたりばかり傍聴していたので、被調査者は多少緊張していたようであったが、だんだんくつろいで自由に判断し答えることができるようになったのはよかった。

b. 丹賀は、佐伯湾を南から抱く鶴見崎半島の東端に近い漁村部落。鶴見村役場の支所がある。昭和30年現在でこの大字丹賀の人口は381人。定期船が1

日2便の往復に寄港する。これがこのあたり一帯の部落の主要な交通機関である。風光は明媚であるが、村人の生活は概してわびしい。丹賀の生活は、漁を主として農を従とする。おもな産物はイワシと甘藷。水田はなく、牛馬もいない。

7月24日丹賀を訪れて、部落農協の事務所で調査を行なった。事務所といっても、小さな雑貨屋の店先と思えばよい。調査については、前もって支所に依頼しておいたので、そこの野村照さんが奔走して被調査者を決めてくれた。山崎理一さん。丹賀では最も古い家柄の人だそうである。ことし67歳だが、がんじょうなからだつきの、まさに朴直といった感じのする老人。店で働いている60歳ほどの老女がときどき笑いながら口を出す。調査は順調にはかどって約2時間半ほどで終了。珍しい方言形がだいぶん出た。

c. 現在の玖珠町は、玖珠郡の3分の2を占める非常に大きな(面積28,800 km², 人口16,420昭和30年調)であるが、旧玖珠町内に調査地点を求めることにした。玖珠川をへだてて北の地区は、もと久留島藩の城下町であるが、南の玖珠地区はもと幕府領、いわゆる天領であった。調査地点の大字山田字谷口は、典型的なメサ切株山の東のふもとの盆地にある。水田が開けて、米や麦もとれるが林産も多い。

8月11日、谷口の梅木忠臣さんについてその自宅で調査した。被調査者を選定し紹介してくれたのは、わたしの知人安部誠一さんである。梅木家はこの地方屈指の豪農であり、三百年来の旧家だという。忠臣さんは当主で71歳。まだすこぶる元気である。ただすこし遠慮したのか、方言形がひっこみそうになる。忠臣さんの長男や弟がそばで助言する。もちろん、本人の答え、第3者の言い出したものは本人の確認したもの、でなければ原則として採りあげない。調査の所要時間は2時間38分。

2・2 牧歌的(?)な調査(群馬県—昭和32・33年—) a. 赤城南麓の農村、養蚕中の忙しい時だった。最初の予定者にすげなく断わられた。理由は、この前NHKの録音があって、その時から喉を痛めたので、今度も言語調査というからには、体をこわすものになるというのだった。弁解のしようもなくひきさがった。仲介者は第2候補を用意しておいてくれたが、被調査者にとっては突然

の訪問だった。しかし、快く引き受けてくれた。特にふだん使っていない離れの間をあけてくれたのだが、いざ調査にかかると、調査票の上にも、鉛筆を持つ手にも足にものみが跳ねてくるのには閉口した。被調査者は平気な顔をしているが、こっちは調査を一時中止してのみとりに専念したのも、忘れがたい思い出である。

b. 今泉町は国鉄伊勢崎駅から40分ほど歩く。途中仲介者の蓼沼氏の所に寄るが、流感で臥床中のため、現地へはひとりで行く。雨もよいであったが次第に晴れて暑くなり、汗をかく。被調査者の山口氏はニワで作業中だったが、すぐ仕事をやめて相手になってくれる。地区の区長をやっている温厚な人である。日曜日なので、隣のへやで孫がラジオを聞いているのが少し気になる。おじいさんが答えられないと、隣りから助太刀をするが、かんじんのおじいさんはやや耳が遠いために聞えない。調査者の方があらかじめ答えを知っていて、出を待っているというわけ。

2・3 連日調査（島根県一昭和34年—） 8月5日 朝7時直江駅発、11時半飯浦駅着、仲介者中島正国先生（元美保神社宮司・民俗学者）の出迎えを受け、小学校応接室で被調査者小松綱夫氏と会う。小松氏は老父も健在とか。中島先生の適切な助言もあって、順調に応答が進められた。飯浦は石見のさい果て、山々は山口県との境で、益田市に合併しているが、市内へははなはだ遠い。男は多く遠洋へ漁に出て、後は老人や女がわずかな田畑を耕作している。

飯浦を辞し、益田駅で山口線に乗りかえ、午後5時半ごろ津和野町に着く。仲介者沖本常吉先生（町公民館長、民俗学者、令息は町教育長）の宅に一宿をこう。同夜、先生の案内で町はずれに山田庄次郎氏を訪れた。静かな住居で調査を行なう。津和野は、島根県の西端、次の駅は山口県。山口市へは約2時間で、昔から交渉が多かった。市内には旧藩時代の名残りをとどめているが、旧藩士家族はあまり残っておらぬよし。参勤交替などで、多くの人が江戸へ行った経験を持っていたというが、藩の財政は乏しかった。いまは観光の地である。

8月6日 午前中、津和野町内を一見、ただちに益田市へ引き返し、津田駅で下車。益田工高校長矢富熊一郎先生（郷土史家・国文学者・方言研究家）を訪う。先生とは初対面。多くの著書を拝見し、現在の御研究の進行状況など伺

う。昼食後、矢富豊一郎氏に来てもらって調査を行なう。益田市は最近急速に発展した都市であるが、この遠田は、その隣接の半農半漁の村である。石西のことばを代表するものと見受けられた。

2・4 思いがけない経験（埼玉県—昭和32年—） 調査地点大字八王子は国電与野駅から約3キロ、朝夕の通勤時間に近くを駅行きのバスが通るだけで、交通はかなり不便である。別に大宮市内行きのバスも近くを通るらしいが、被調査者も乗ったことがなく、利用度は低いらしい。共通語の影響の強すぎることを恐れたのだが、この辺になるとまったく純農村の感じで、数年来この町に住む調査者自身も、こんど人に案内されて来てみて、同町内にこんな所があるのかと驚いた次第だった。調査の結果はやはり共通語と同じものが多かったが、それでも予期したよりは古い方言を残していた。音韻も東北地方的なひびきがかすかながら認めれた。被調査者にある心理で、ことばのなまりを恥じる態度がうかがえたが、都合のよいことに(?)共通語をよく知らないらしく、共通語と全く同じなのに、いなかことばと考えているように見受けられた。「～だなんて言いますね」と、いかにも気がひけるような口ぶりで答えるのがおかしかった。「それは、東京でも同じですよ」と言ってやると、「ああそうかね」と、ほっとした表情を示すのだった。

2・5 境界地帯での調査（兵庫県—昭和33年—） 山口は南但馬の中央部にあり、南但の特質をとらえるのに最適の地である。鉄道播但線新井駅から南に1km、旧山口村の中心集落である。

山口とその付近の集落は、乙種アクセントから甲種のそれへと移った点においても興味のある地域である。昭和6年、大原孝道氏の調査では、旧山口村南端の岩津以南が甲種、山口・羽淵・田路等を連ねた以北が乙種地域で、ただ新井部落に播磨人が転住していて、その人々だけ甲種の離れ島を作っていたのだった。筆者がこの地域を調べたのは昭和30年前後で、大原氏の調査から20年たった。その時には、すでに新井部落以南はほとんど甲種地域になり、乙種はただ奥田路のみに残って、離れ島となるといった変化をとげていた。このことは、この地帯が上方ことばと山陰ことばの漸移地帯となっていて、しかも上方の影響が次第に北に及びつつあることを物語るのである。

山口をたずねてみたら時期の悪いことに気づいた。ちょうど田植が終わって一番草のころであった。被調査者第一候補としての荒川達五郎氏は、快く応じてくれたが、話をしているうちに不適格者であることがわかった。少年時代、京都の西陣に5年間奉公したというのである。やむなく第2・第3の候補者に当たったが、いずれも多忙のゆえをもって昼間の調査は断られた。そこで夜になるのを待って荒川義一氏を得たのであった。

山口ことばの問題点は、年齢差・地域差のはなはだしい点であろう。北からの流れと南の流れの交流の渦は、大きい直径を持つのであるが、その中心をこの付近に指定しても、大きい誤りはないと思われる。アクセント以外でも、たとえば ai 連母音の同化状況も、青少年は εi 、老人は ε^{a} となっているのである。

2・6 辺地調査（岩手県一昭和33年一） 今夏は、このような仕事でなければ二度と出かけることのないと思われる岩手のチベットを、全部回ってみようと春以来いろいろ考えていた。

何しろ面積がだだっぴろく、交通線がきわめて少なく悪く、しかもその大部分はバスの発着時刻や旅宿の有無もはっきりと調べることができないといった所なので、かなり長い間聞いたり考えたりしたのだが、結局は当たってくださるということになった。主として北上山脈の中央から東部沿岸に属する地方で、バス線から村の中心地の調査地点へ、それから他の地点に行くためのバス線まで十数キロの山坂道。その間人っこひとり通らない道や、薪と木炭を運ぶトラックだけがあえぎあえぎ通る波浪的・函数的(?)形の道路を、トラックを追い越して——結局徒歩の方が早い——、往復16キロ(旅宿なし)も歩かなければならない所もあった。もちろんそんな所には電話も電灯もない。まさに別世界(?)である。

個人的な理由で途中盛岡にもどったこともあったが——バスで9時間ぶっ通しで揺られた——、かれこれ10地点ばかりの地域を、前後18日もかかってしまった。辺地寒村をたずねると、風物も変化に乏しいし、話す人たちの語彙の少ないのに気がつく。貧しく、生活が単調で、文化の恵みを受けることが少ないためであろう。調査地点には知人がほとんどいないので、前年同様小学校長さ

んに被調査者の紹介を依頼したが、どの校長さんもすこぶる好意的で、誠意をもって世話をしてくださったのは非常にうれしく、感謝にたえないものがあった。

2・7 被調査者選定の困難（山形県・愛知県—昭和32年・昭和33年—） a. ……鶴岡市××小学校の校長に手紙で事情を説明し、プリントを送り被調査者の選定を依頼したのである。ところが、十日たっても二十日たっても何の返事も無い。追いかけてはがきをやっても、依然返事がないのである。教育者の良心といったものもあてにならないとわかったので、知りあいをたよって警察の力を借りようと考えた。そこで、もと高校の柔道教師であった人をたずねた。この人は、警察学校にも柔道を教えに行っていたことがあるからである。そこから警察署の次席をしている五十嵐氏を紹介してもらい、さらに五十嵐氏から調査地点吹浦の駐在所へ命じて探してもらったのである。駐在さんは、漁港で出かせぎの多い土地だけに、本職の警官である自分ですら、条件にあう人を見出すのは容易でなかったと述懐していた。ともあれ、ようやくこれで被調査者を探し出すことができたのは、うれしかった。

b. まず岡崎市。最初、打ち合わせておいた8月7日の午前におたずねすると、その方は約束の日を忘れられて不在。やむをえず、都合よき日をあらためて連絡していただくことにして、名古屋に帰った。ところがいっこう連絡がない。さらにもうお願いの手紙を出すと、病気になられた由の返事で、結局これはだめになってしまった。さっそく別のルートで紹介してもらったが、その方は、いわゆる標準語にこりかたまっているように見受けられたので、お話を聞き第1調査票だけで退散。本年度の岡崎の調査は、他の地点の予定もあるので、あきらめなければならなくなった。

熱田地区では、羽城町を予定していた。数年前にわたしの個人的な調査に御協力願った方が二三人おられるので安心していたところ、実際におたずねしてみると、すでに物故されたり転宅されたりで、適当な人の見つけられないままに、ことしはだめになった。それにしても、空襲で焼き払われた熱田地区で適当な人を得ようとするのは、無理なことかもしれぬ。名古屋南部の一地点としてぜひ取りたい所だが、なお手段をつくしても適当なインフォーマントが発見

できないなら、地点を変えなければならないかもしれない。

次に蟹江であるが、ここは4人目でやっと調査を成功させることができた。知人の紹介で最初におたずねした方は、典型的な農夫で理想的なインフォーマントと見えたが、聞いているうちに居住地の関係から不適格とわかった。非常に協力的な方であったが、わたし個人の調査だけで失礼した。次の方は、同町の中心部に住む方であったが、残念なことに盲人であった。郷土史の研究家で著書もあり、同町の漁港時代からの歴史、現在の産業形態、言語の性格など非常に教えられることがあったが、やはりあきらめねばならなかった。第3番目の方は、同町南部船人の方だった。80歳を越す方なので、第1調査票のみで敬遠した。ようやくにして同地の調査を成功させることのできた4番目の方は、町の中心部近くに住む農夫で、申し分のないインフォーマントと言える。質問に対する反応、自己の言語に対する反省など、老人（明治18年生まれ）には珍しい鋭さを持っておられた。手違いで失敗をくり返したあとだったので、実際うれしかった。

2・8 途中で打ち切った調査（群馬県一昭和34年一） 勢多郡東村××へ行った時である。例のごとく学校により、先生に案内してもらって30分ほど山道を登った。さて、調査を始めて、明治15年生まれ大山松之助（仮名）……というあたりまでは順調だったが、「小学校は何年でしたか」と聞くと、当時の小学校には石川クラゾウという先生がいて……と長い説明がはいる。それを適当に受け流してさて質問を始めたが、こんどはそばに老妻がいて口を出す。隣り村の産である。どうも気になるが、初めはまあ我慢していた。しかし、だんだんじいさんは答えなくなる。ばあさんは、じいさんの大事とばかりしゃべり出す。「わざわざだめだから、ばあさんに聞いてくれ」と降参する時には、こちらも降参してしまった。

E. 調査者の言語の調査

臨地面接調査による調査結果のほかに、調査者自身の使う言語を記録しておくことも、地図の解釈に役立つことがあると考えられる。いかに客観的に自己を無にして調査に当たっても、聞き出しに際して調査者の言語が被調査者の答

えに影響を与えることがありうる。そこで、本年度は臨地調査のほかに、各調査者自身の経歴と言語を報告するように求めた。

「調査者の言語」は「思い出せる限りの、自身が言語形成期に使っていたことば」と、いちおう規定した。思い出せないものは、現在ふつうに家庭内で使っていることばで補う。

昭和34年度までに調査に従事した調査員57名（地方言語研究室員を含む）から報告はすでに集まっているが、現在のところ十分にそれを活用する段階には至っていない。

F. 来年度以降の見通し

この日本言語地図作成のための調査は、今後ひきつづき4年間すなわち昭和38年度まで継続する予定になっている。調査の内容・方法については、多少弾力性をもたせるとしてもあまり変更しないで、ただ調査地点の網の目が細かくなっていく。全国にばらまかれる地点の数は、最終的にはほぼ2,300地点になるだろう。

（徳川）

北海道の言語についての調査（第2年度）

A. 研究の目的

東京語に近いといわれる「北海道共通語」が、どのようにして成立しつつあるかを明らかにして、日本全国の共通語化の方策と、共通語教育の方法をたてるのに有効な知識を得ることにある。

特に本年度は、北海道における共通語化は、年齢層と世代とどちらが要因としてきているか、北海道における共通語化は、植民の方法によって早い遅いの差があるか、特に、第3世の言語には植民の方法によって差があるか、などについて明らかにすることを目的とした。

B. 研究費

以上のような目的のもとに、「北海道の言語の実態と共通語化の過程」の題目で、昭和34年度科学研究費交付金（総合研究）を受けて、調査を実施した。

C. 研究担当者

代表者 岩淵悦太郎（国立国語研究所第1研究部長、のち所長）

分担者 柴田 武（国立国語研究所地方言語研究室室長）

野元 菊雄（国立国語研究所地方言語研究室室員）

上村 幸雄（ " " ）

徳川 宗賢（ " " ）

佐藤 誠（北海道学芸大学函館分校教授）

五十嵐三郎（北海道大学文学部助教授）

長谷川清喜（北海道学芸大学札幌分校助教授）

石垣 福雄（北海道立札幌北高等学校教諭）

D. 第1次調査

1. 目的 先に述べた「研究の目的」のうち、本年度の第1の目的、すなわち、北海道における共通語化は、年齢層と世代とどちらが要因としてきいているか、を知ることを主目的とし、あわせて、第1世・第2世・第3世とそろっている家族を探して、その言語変化を明らかにし、昨年度の第1次調査と関連させる。

共通語化に当たって、年齢層が要因としてきくか、世代が要因としてきくかということは次のようなことである。すなわち、第1年度の調査によって、第1世から第2世、第2世から第3世へ移るに従って共通語化が進むことが明らかとなった。では、同じ世代にあっては、年齢の差によって共通語化の程度が違うだろうか。違うとすれば、年齢の差と世代の差とどちらがその落差がはたはだしいか、である。

2. 調査の実施 以上の目的を達成するためには、調地査点として、次のような条件に合ったところを選ぶのが適当である。すなわち、①北海道の内陸部の農業地帯にあること。これは第1年度の調査結果と関連させる上でも重要である。②ある程度植民の歴史が古いこと。③人口動態のあまり激しくないこと。以上2点は、被調査者、特に第3世の被調査者をたやすく得るためである。④差を数量的に見るためには、被調査者を多く得られるところ。すなわち、少なくとも総人口2万程度の町であること。⑤多くの町民に協力してもらえそうところ。まず町当局の強力な援助が期待できるところでなければ話にならない。

以上のような条件を備えたところとしてあがった数地点のうちから、^{ソラチ}空知郡^{フラノマチ}富良野町^{カミカリ}(上川支庁)(人口28,747人——昭和33年。明治30年に初めて植民。位置は、北海道のほぼ中央である。)を調査地点として選んだ。

実際の調査は次のような段取りで行なわれた。

8月4日。富良野町に到着し、町別人口表によって、費用の点から15歳以上の人口が約1万人になるように、町内のある区域を指定し、調査票など関係書類の配布準備をする。

8月5、6日。その1万人に、国立国語研究所第1研究部長名および町長名の依頼状を添えて、「社会調査票」を配る。配布方法は、各町内にいる町の嘱託員に一括して概数を配布し、嘱託員から、該当する15歳以上の男女に配る、と

いう方法をとった。

8月7～10日。嘱託員が各戸から集めてとりまとめ、調査本部に届ける。

8月8～13日。集まった調査票を整理する。作業には北海道立富良野高等学校の生徒から援助を受けた。

8月13日。整理した調査票によって、面接調査の被調査者を200人選び出しこの被調査者に、国立国語研究所第1研究部長名の、訪問予定日を記入した依頼状を郵送した。

8月14～21日。研究所側の調査員は、この間に「言語調査票」によって200人について面接調査をする。同時に「社会調査票」によって得られた3世代そろった家族について北海道側の調査員が面接調査をする。

配布した「社会調査票」は、本人の性別・学歴・職業・現住所、本人・父母・父方の祖父母・母方の祖父母の姓名・生年・出生地・居住経歴などを記入するようになっていて、これによって本人が「北海道第何世」かを知ることができる。

回収状況を簡単に表示すれば次のようである。

	配布数	回収数	回収率
市街地	6,108	4,298	70.4
郊外	5,317	4,165	78.3
合計	11,425	8,463	74.1

この種の調査の回収率としては優秀な成績といえよう。

回収された調査票によって、次の条件を加味して、面接調査の被調査者200人を選んだ。すなわち、第何世か（できるだけ純粹の第2世・第3世とする）、年齢（10代・30代を中心とする）、性、居住地（市街地か郊外か）などである。この結果は次のようである。

○世代・年齢	10代第2世	50	30代第2世	50	第2世	100
	10代第3世	50	30代第3世	50	第3世	100
	10代	100	30代	100	計	200
○性	男	100	○居住地	市街地	114	
	女	100		郊外	86	

このほか、選択に当たっては考慮しなかった学歴・職業については次のよう

である。

○学歴	小学校卒（小）	21
	高小・新中（中）	82
	旧中・新高（高）	94
	旧高・新大（大）	12
	不明	1
○職業	事務的俸給生活者・自由公務	35
	商業的事業主	10
	商業的労務者（商店員など）	13
	工員・運転手・鉄道員	27
	その他の労務者・日雇	4
	農業	56
	学生	26
	主婦	25
	なし	4

次に、回収した「社会調査票」によって得られた、3世代そろった家族のうち、実際に調査したのは次の家族である。

アオ エ ヨ サブロー リョーイチ ヒロジ ヒガシトナミ ハンニヤノムラ ナカダマチ
 青江与三郎（83）一良一（54）一弘（29） 富山県東礪波郡般若野村（現中田町）
 ヨシカ タケオ ユキアサ ミナト ナミ ヒガシフクミムラ フタミツマチ
 吉尾かの（72）一丈夫（51）一幸房（19） 富山県西礪波郡東太美村（現福光町）

吉尾家の第1世は女性であるから、やや条件がそろわない。

E. 第2次調査

1. 目的 先に述べた「研究の目的」のうち、本年度の第2の目的、すなわち、第1次調査の結果と、集団移民的性格を持ったところでは、特に第3世の言語はどのように違うかについて明らかにしようとする。

このために、今まで集団移住地として知られている樺戸郡新十津川町のほか3か町村を探し出して調査した。なお、各調査地点で3世代そろった家族があれば、これをも調査する。

2. 調査の実施 上のような目的のもとに、次のような計画で調査を実施した。

調査地点	故地	調査者	調査期日
ソラチ フラノマチ 空知郡富良野町	ヨシノ 奈良県吉野郡	柴田・上村・徳川・佐藤	2月5—8日
ナカガワ 樺戸郡新十津川町	ヨシノ 奈良県吉野郡十津川村	野元	2月5—8日
中川郡豊頃村	ゾーマ 福島県相馬郡	柴田・長谷川	2月9—13日

樺戸郡浦臼村

高知県・徳島県

野元・五十嵐

2月9—13日

もう少し詳しく述べると、調査情況は調査地点ごとに次のようである。

2・1 富良野町 第1次調査のときは面接調査（言語調査）の地域に入れなかったが、社会調査票によって、奈良県吉野郡出身者が多いことを知ったので、富良野町の上御料・中御料・下御料・南御料・上五区で調査することにした。しかし、実際はそれほど集団移住地的ではなく、相当混住している。あらかじめ該当者がわかっていたので、東京から郵便で依頼状を発送することができた。上村・徳川・佐藤の3人の調査員によって、結局50人を調査することができた。その被調査者の内訳は次のとおりである。なお、調査票は第1次調査の「言語調査票」に、さらに吉野団体用の言語調査票および家庭の歴史・故地との交通の度などの調査票を加えたものである。以下この調査を「吉野」と略称する。

○世代・年齢	10代第2世	8	30代第2世	18	第2世	26
	10代第3世	15	30代第3世	9	第3世	24
	10代	23	30代	27	計	50
○性	男	33	○学歴	小学校卒	4	
	女	17		高小・新中	24	
				旧中・新高	16	
				旧高・新大	3	
				不明	3	

なお、柴田は、次の家族の3世代調査を実施した。

前中ナラエ (70) 一宣幸 (41) 一幸喜 (16) 奈良県吉野郡宗檜村 (現西吉野村)

ナラエの夫久正は入院中だったので調査できなかった。

2・2 新十津川町 (空知支庁) ここは古来集団移住地として知られ、ことばの上でも故地十津川の趣きを残すとされている。現地に臨んでみると、集団移住地的だったのは大正年代までで、以後は非常に混住的な色彩が濃くなったようであった。3世代そろった家族を探したがなかなか得られず、やっと後木家を見出したときには調査期日がなくなったため、富良野町の面接調査の調査票による調査を実施したにとどまった。

後木喜三郎 (79) 一八千男 (59) 一元一 (32) 奈良県吉野郡十津川村

後木家のほかの被調査者は、十津川村出身家族で、第1世男3人、第2世男

5人、第3世男3人女1人、その他の出身家族が、第2世女1人、第3世男3人であった。

2・3 豊頃村（十勝支庁） ここは典型的な集団移住地である。二宮尊徳の報徳教を精神的支柱として、強い団結を保ち、故地との結びつきは今でも強い。

調査したのは第3世の調査(柴田)では、10代第2世1人、10代第3世15人；男7人、女9人である。また、3代調査(長谷川)の家族は次のとおりである。

横田^{ヨコタヘジメ}一(69) 一誠^{イチマコト}(44) 一照子^{イチテルコ}(18) 福島県相馬郡大野村^{フクノノムラ}(現相馬市)

第3世が女性である点で条件が統一されていない。

2・4 浦臼村（空知支庁） いろいろの故障があって、3代調査は完全な家族を得られなかった。被調査者は、10代第3世18人、30代第3世2人；男13人、女7人である。このほかに、第1世2人、第2世1人を部分的に調査した。

F. 調査の結果

1. 社会調査の結果 まず、被調査者の年齢別の出生地（地方別）を集計する

第1表

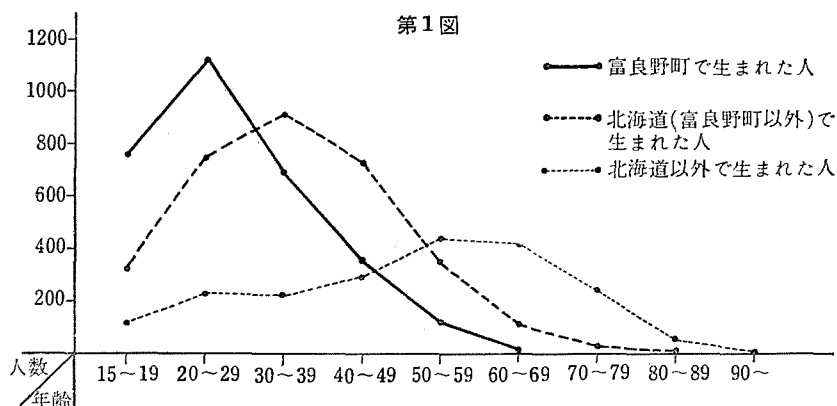
年齢区分 出生地	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～	計
北海道	1,079	1,858	1,605	1,088	480	112	17	3		6,242
富良野町	768	1,110	696	360	125	2				3,061
富良野町以外	311	748	909	728	355	110	17	3		3,181
北海道以外	109	226	219	298	433	416	244	61	1	2,007
東 北	9	74	91	162	190	176	90	17		809
関 東	14	18	23	19	24	9	4			111
中 部	5	18	30	58	125	135	78	23	1	473
近 畿	6	10	15	21	28	43	25	5		153
中 国		5	3	7	24	17	25	4		85
四 国		2	8	12	32	28	19	10		111
九 州	1	2	6	5	8	8	3	2		35
樺 太	48	85	41	13	2					189
その他外国	26	12	2	1						41
不 明	9	19	12	11	13	13	10	1	1	89
総 計	1,197	2,103	1,836	1,397	926	541	271	65	2	8,338

と第1表のようである。

総計の8,338人は、先の回収数より少ないが、これは誤まって回収された対象外のもの（14歳以下）や、年齢不明のものを省いたためである。

さて、出生県別に見て、多いのは、宮城県167、青森県163、富山県157、秋田県137、福島県133、山形県114で、少ないのは、高知県・長崎県・宮崎県各2、鹿児島県・島根県各3、千葉県・京都府各4である。ひとりもない県はない。なお、中部473のうち、北陸3県で256を占めている。

上の表を図示すると第1図のようになる。



年齢の高くなるにつれて、富良野町で生まれた人が少なくなり、北海道以外で生まれた人が多くなる。富良野町以外の北海道で生まれた人はその中間である。このような富良野町民の構成がよくこの第1図にあらわれている。

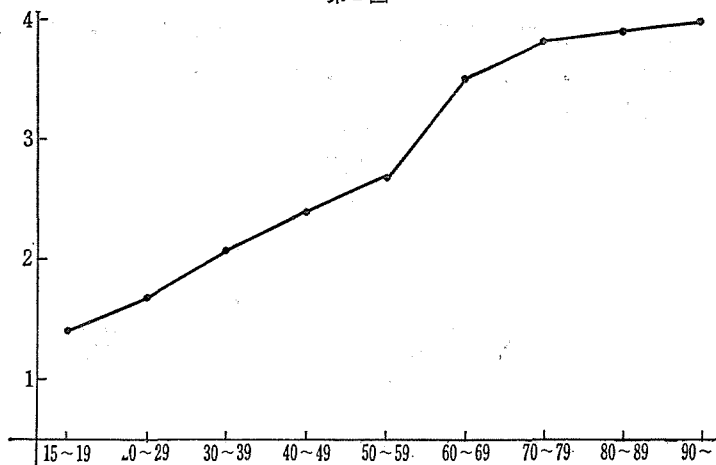
第2表

居住経歴区分	年齢区分										計
	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～		
富良野町以外に2年以上住んだことがない	785	1,005	495	224	81	2				2,592	
北海道以外に2年以上住んだことがない	274	772	816	625	334	86	16	2		2,925	
北海道以外に2年～9年間住んだことがある	95	109	282	263	158	72	23	4		1,006	
北海道以外に10年以上住んだことがある	12	188	208	238	304	348	212	47	1	1,558	
不 明	31	29	35	47	49	33	20	12	1	257	

次に年齢別に被調査者の居住経歴をみよう（第2表）。

かりに、第2表の「居住経歴区分」中、不明を除いて、上から1点…4点と与えて、年齢別に平均点を出して図示すると、第2図のようになる。

第2図



なお、性別年齢別構成は第3表のようである。

第3表

性別 \ 年齢区分	15~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~	計
男	591	988	927	686	481	287	126	26		4,112
女	606	1,115	909	711	445	254	145	39	2	4,226

2. 言語調査の結果 ここでは、3世代調査の結果は紙数の関係で省略することにする。昨年度の傾向とそう変わらない結果であるということとどめよう。主として、「言語調査票」による調査の結果について以下述べる。

2.1 語彙について 「言語調査」では語彙については、昨年度の調査を参考として、25問提出している。なお、関連質問がほかに10問ある。次に、簡単にこれをあげる。問題番号の右上に*のついているのは関連質問である。また、昨年度の年報58ページ以下に問題文の出ているものは、昨としてその問題番号をもあげる。

101 ジャガイモ。101*「いも」といったら何を指すか。102 昨 114 キャベツ。

103 トーモロコシ。103*種類によって名に区別があるか。104昨115サケ。104*「ホッチャレ」を使うか。105 昨 111 ズトーブ。105* 昨 112 ヒカキボー。106 昨 113 ハイ。106*たばこの場合は？ 107 冬ひどく寒いことを？ 107*池の水が氷になることを？ 107**ぬれた手ぬぐいがカチカチになることを？ 108「ヒャッコイ」「シャッコイ」使うか。119昨110「手に手袋を～」それから？ 110 昨 119「コワイ」を疲れたという意味で使うか。110*「ユルクナイ」を使うか。111「メンコイ」を使うか。111*人間についても使うか。112 昨 107 アサッテ。113 昨 108 ヤノアサッテ。114 昨 101 イクラ。115 コンバンワ。116「ハッチャキニナル」「ハッチャキコク」使うか。117「タナク」「タガク」使うか。117*その発音は？ 118「アメル」使うか。119「カテル」使うか。120「バクル」使うか。121「カッチャク」使うか。122 昨 109「アメユキ」「アマユキ」使うか。123「ホイト」使うか。124 ナンデモアルの反対は？ 125ソーダヨの反対は？

以上のうち、次の20問について、ローマ字で書いた反応を示したとき1点を与える。ローマ字の反応は、北海道方言と考えられるもの(いわれてきたもの)であるから、点の多いほど北海道的と考えることもできるわけである。

101 gosyoimo, nidoimo. 102 kaibetu, kyaibetu. 103 tôkibi, tôkimi. 104 akiazi. 105 sutôhu. 106 aku. 107 sibareru. 108 hyakkoi, syakkoi. 109 haku. 110*使う。111 使う。114 nanbo. 116 使う。なお gattyaki も。117 使う。なお tannaku も。118 使う。119 使う。なお kazeru も。120 使う。121 使う。122 使う。123 使う。

結果は第4表のようである。

これによると、年齢層では30代、世代では第2世の方が北海道的であるが、有意差はない。有意差はないものの、年齢・世代ともにさがるにつれて北海道的色彩が薄れる、つまり、全国共通語的になる、という傾向を示しているようである(これは文法などについても同様)。このような結果であるから、この年齢と世代とを組み合わせたとき、10代第3世と30代第2世との間には有意差が生ずる(一番右の「差」の欄で、*の二つあるのは1%以下の危険率で、*の一つあるのは5%以下の危険率でそれぞれ有意差のあるものである。以下も同

第4表

	人数	平均	分散	差
10代	100	14.17	8.35	
30代	100	14.96	13.95	
第2世	100	14.99	10.36	
第3世	100	14.03	8.27	
10代第2世	50	14.71	9.59	10代第3世×× 30代第2世
10代第3世	50	13.62	6.66	
30代第2世	50	15.28	6.84	
30代第3世	50	14.43	8.14	
性 男	100	14.77	6.79	
女	100	14.25	8.73	
居住地 市街地	114	14.32	9.24	
郊外	86	14.75	7.89	
居住経歴 1点	169	14.56	8.79	
2点	29	14.05	11.50	
学歴 小学校(小)	21	15.48	4.53	小×高
高小新中(中)	82	15.21	7.92	小×大
旧中新高(高)	84	13.89	14.31	中×高
旧高新大(大)	12	12.20	14.01	中×大
職業 俸給生活者	35	13.88	7.44	俸給×工員
工 員	27	15.44	7.30	
農 業	56	14.82	7.20	
学 生	26	14.25	6.76	
主 婦	25	14.06	9.36	

じ)。

性・居住地・居住経歴では、それぞれ常識的な結果が出ているが、有意差はない。なお、居住経歴で1点、2点とあるのは、上の社会調査の結果のところ、それぞれ1点、2点を与えた項目である。

学歴でも高い方が北海道的でない、という結果で、常識的である。表の有意差のところを見ると、中と高との間に断層のあるところがわかる。中はいわば義務教育的な教育程度の上限であるから、この点もうなずけるところである。

職業も、人数の少ないものは省略したが、まずは常識的な結果といえるであ

ろう。

ところで、北海道的ということばは、これまでは、北海道方言といわれてきたものかどうかという観点から決めていたが、なお、現在北海道でもっとも多く使われているものかどうかという観点から決めることもできる。この後者の観点から、もう一回計算してみよう。

各問の多数反応形（以下「多数形」と略称）が何であるかを調べて、多数形が比較的是っきりしていて、集計につごうのいい次の20問での多数形をとったとき1点を与えた。すなわち、101, 104, 106, 107*, 107**, 108, 110, 110*,

第5表

	人数	平均	分散	差
全	200	15.1	11.10	
10代	100	15.0	10.68	
30代	100	15.3	8.44	
第2世	100	15.7	10.50	第3世×第2世
第3世	100	14.6	8.06	
10代第2世	50	15.7	10.35	10代第3世×30代第2世 10代第3世×10代第2世
10代第3世	50	14.3	10.03	
30代第2世	50	15.8	7.50	
30代第3世	50	14.8	8.88	
性 男	100	15.6	8.26	女×男
女	100	14.7	10.50	
居住地 市街地	114	14.9	10.81	
郊外	86	15.4	10.27	
学歴 小	21	15.9	5.76	高×小 高××中 大×高 大××中 大××小
中	82	16.1	5.58	
高	84	14.6	8.10	
大	12	11.8	13.76	
職業 俸給	35	14.3	8.25	俸給×工員
工員	27	16.2	4.56	
農業	56	15.2	13.30	
学生	26	15.5	9.29	
主婦	25	14.8	10.04	

111, 114, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125。

結果は第5表のようである。

この表を見ると、前の表と同じ傾向である。しかし、これは107*を除いて、すべて、これまで北海道方言といわれてきたものであることから見ても、当然といえるであろう。ともあれ、二つの表とも、年齢層よりも、世代の方が大きい差を出している。

先に述べた、第2世の方が「北海道的」であるという結論は、昨年度第1次調査の、第3世になれば北海道共通語が確立する、とした結論と矛盾するようである。しかし、これは、今年度の調査が故地の言語を問題にしなかったからとも考えられる。第2世は故地の言語をまだ強く残しており、昨年度第1次調査は、故地の言語を手がかりとして世代を比較した。このために、この点が今年度の調査では薄められた（つまり、東北以外の故地の言語があらわれるような調査票でない。）ので表面にあらわれなかったのであろう。昨年度、第3世で確立するとした「北海道共通語」も非常に全国共通語的な性格のものであったから、第3世は共通語化すると一面からはいえる今年度の結果と別に矛盾するものではない、といってよかろう。

なお、吉野・浦臼・豊頃について、同様に富良野の多数形による点数を出した。これを第6表にかかげよう。なお、☆をつけたのは、それぞれの地点における多数形による集計である。

有意差はないが、吉野については、富良野と傾向が逆になっていることが注意される。たとえば、30代よりも10代が、第2世よりも第3世が「北海道的」である。この原因として考えられるのは、吉野の第2世が、全部吉野の故地の言語の影響を受けているため、特にこれが西日本であることもあいまって、第3世の方が「北海道的」となった。これに対して、富良野の被調査者の方は、東北出身者の第2世が多いため（100人中、両親とも東北出身49、片親だけ東北出身16）、東北方言の強い影響を受けている北海道方言は、実は故地の言語という意味もあり、二つの面が重なり合って第2世の方が「北海道的」となったのであろう。

富良野で年齢別・世代別に多数形を見ていくと、語によっていろいろの傾向

第6表

		人数	平均	分散	差
吉野	全	50	14.7	3.79	
	10代	23	15.1	2.72	
	30代	27	14.3	6.13	
	第2世	26	14.7	4.98	
	第3世	24	14.7	2.49	
	男	33	14.8	4.96	
	女	17	14.4	4.52	
	学歴 中	24	14.5	4.75	
	高	16	15.0	5.25	
	職業 農業	27	14.7	2.50	
吉野☆	全	50	14.9	5.01	
	10代	23	15.2	4.61	
	30代	27	14.6	6.50	
	第2世	26	14.7	7.21	
	第3世	24	15.1	3.16	
	男	33	15.0	5.06	
	女	17	14.6	7.36	
	学歴 中	24	14.8	5.46	
	高	16	15.2	4.27	
	職業 農業	27	15.2	5.80	
浦臼		20	13.8	3.71	
浦臼☆		20	14.5	3.35	
豊頃		16	13.1	4.39	
豊頃☆		16	13.8	3.49	

があることがわかる。以下、この観点から興味のあるものを述べよう。

102 でキャベツという言いかたは、年齢の方がきいていて、10代に多い。

104*のホッチャレも同様で、10代は「知らない」が多数形であるが、30代では「知っている」が多数形となる。

105*のデレッキは世代の方がきいていて、第3世の方が使うことが多い。

107*の池の水がコールは、年齢で10代に多い。

110*ユルクないは世代がきいていて、第2世に多く聞かれる。

111 のメンコイは年齢で、30代に多い。

116 のハッチャキも年齢であるが、これはむしろ10代の方に多い。

118 アメルは世代の方がどちらかというときいており、第2世の方が多い。

119 カテルは年齢で、10代の方が多いが、これは、この語が遊びの場面で使われ、したがって10代の方がよく記憶していたことによるのかもしれない。

122 アメユキなどは世代で、第2世の方が多い。

124 にナンモがあらわれるのも122と同じ傾向である。

以上を総合すると、年齢の方がきいているのは6、世代の方がきいているのは5であって、これだけからすれば、二つの要因の間には、そう差はないことになる。なお、富良野全体の傾向と逆に、年齢で10代の方が「北海道的」なのは、116 ハッチャキ、119 カテルであるが、カテルの方は別の原因も作用しているのではないかということは上に述べた。また、世代の方でかえて第3世の方が多いのはデレッキである。第2世はデレッキが少しあるためにこのようになったのであろう。デレッキよりもデレッキが古いようである。ついでに述べるなら、多数形ではないが、112のシアサッテをヤナアサッテなどと言うのは、第3世よりも第2世、113でヤナアサッテを知らないのが、第3世に多いのはおもしろい。

多数形について、第6表で、富良野以外のところを見よう。

吉野は行政的に富良野町に属しており、富良野とあまり変わりはないが、浦臼・豊頃も富良野とは相当変わっている面がある。以下、簡単にこのことについて述べよう。

浦臼では、全国共通語的ともいう傾向を持っているようである。すなわち101ジャガイモは、バレーショが多数形で(60%)、富良野の多数形であるゴシヨイモは35%にすぎない。105*のデレッキを知らない人が78%もいるし、106のハイ(灰)もハイが多数形である。118のアメルも半数が知らないし、119のカテルを使う者はひとりもない。

豊頃で目立つことは次のようなことである。すなわち、102キャベツでは、

他と違ってカイベツが多数形となる。112のシアサッテは、ヤナアサッテと言うし、123のホイトは知らない人の方がずっと多くなり、ホイトはわずか17%にすぎない。109の手袋をハメルは、カケルが多数形で78%。ここではハクは56%であって、他の調査地点でほとんど100%近くがハクなのと鋭く対立している。ここでは、ハクが全国共通語であるとの意識を持っているようであるがハクの力はまだ弱い。以上を見ると、豊頃がいちじるしく故地の方言そのままの形を残していることが考えられる。特に、112やこの109などからこのことはいえる。語彙だけでなく、アクセントや音声などの点からしても、豊頃が故地の言語を強く保存していることがわかる。

以上、語彙についての結果の一部を簡単に述べた。なお、文法・音声・アクセントについてもほぼ同様程度の集計を終えたが、ここでは紙数の関係ですべて省略して、他の機会を待つことにしたい。

2・2 今年度結果のまとめ 以上の、2回にわたる本年度調査でわかったことは、大体次のようなことである。

1. 世代がきくか年齢層がきくかは、項目によって違いがあり、一般的な答えは出せない。
2. 他の諸方言における事情と全く同一で、世代のさがるにつれ、年齢の若くなるにつれて、全国共通語にむしろ近くなっていく。独特の北海道共通語が形成されつつあるわけではない。
3. 昨年度の特に第2次調査で明らかになったような、地域的な差のほかに、植民方法（集団の度合い、特に出身地との関連によるそれ）によって、第2世・第3世の言語は相当に差を生ずる。

G. 今後の調査

今年度の2回にわたる調査で以上のことが明らかになったわけであるが、この結果、北海道の言語の実態を知るためには、なお次のようなことを知る必要があり、今後の調査はこの要求を満たすような企画のもとに行なわれることが望ましい。

すなわち、北海道のなるべく広い地域にわたって調査地点を設け、その地点

の植民の歴史をも明らかにすることによって、言語のいろいろな面が地域的にどのように分布しているか、集団の程度によってどのように故地の言語を保存しているか、などを知る。なお、調査地点は、いわゆる道南といわれる半島部にもばらまくべきである。これによって、本質的には東北方言と同じと思われる道南の方言の行なわれる範囲を推定し、その他の北海道的な共通語の行なわれる地域との境界を知ることができるであろう。またできれば、東北地方でも同じ項目による調査を行ない、北海道方言との関係を知ることにも努めたなら有効な結果が得られるであろう。

(野元)

言語能力の発達に関する調査研究

A. 前年度までの経過

この調査研究は昭和28年4月に小学校に入学した児童について開始した。東京に実験学校1校（1学級）、神奈川県純農村地帯に実験学校に準ずる協力学校1校（1学級）、東京および全国各地にわたって協力学校13校（1学級あるいは学校の事情によって各学級にわたって50名）を依頼した。その児童の、ひとりひとりについて、できるだけくわしく、継続的に調べて行こうというのがねらいであった。調査研究は、これらの児童が小学校を卒業するまで続けるつもりであった。6年間、観察やテストを続け、あと1年間で整理に費して、7年計画の予定であった。

翌昭和29年4月に入学した児童についても、また1学級（あるいは50名）を選んで、特に前年度の児童で準備不足などでできなかった、話しことばの面を主として調査研究を続けることになった。話しことばの面を主とするといっても、この調査研究の特色は、児童のひとりひとりをその言語能力の全面にわたって深くとらえるというところにあるから、ほかの方面もある程度調べなければならない。調査対象は、けっきょく、全学校2学級ということになった。わたくしたちは、28年入学児のほうを便宜上甲学級と呼び、29年入学児のほうを乙学級と呼んだ。

実験学校、実験学校に準ずる協力学校はずっと変わりなかったが、最初試験的に加わっていた協力学校4校が29年度からやめた。もうひとつの協力学校もその学校の学校長と国語科主任の移動で途中からやめた。当初からの協力学校は8校となったが、29年度に乙学級だけをやる学校が1校加わったので、前年度は実験学校1校、準実験学校1校のほかは9校であった。

B. 本年度担当者と実験協力学校

今年度担当所員は、前年度と変わりなく、興水実、芦沢節、高橋太郎、村石

昭三で、補助員は根本今朝男、川又瑠璃子である。

今年度の実験学校、協力学校は、

実験学校 東京都新宿区四谷第六小学校
実験学校に準ずる協力学校 神奈川県中郡比々多小学校
協力学校 東京都杉並区方南小学校
東京都中野区新井小学校
神奈川県逗子市久木小学校
静岡県静岡市中田小学校
長野県上水内郡豊野西小学校
長野県埴科郡松代小学校
栃木県小山市小山第二小学校
滋賀県大津市中央小学校
兵庫県氷上郡北小学校

の11校で、どれもみな継続の学校である。

実験学校は、所員が、ひとりひとりの子どもと直接親しくなり、テスト・観察・調査は主として所員の手でおこなわれるが、協力学校は、この調査研究の一部あるいは大部分を、その学校の職員の手でおこなう学校である。今年度でちょうど7年（1校だけ6年）になるが、学校長の移動や担任の先生の移動その他、いろいろ悪条件があったにもかかわらず、ずっと継続して協力して下さったことに対して、深い謝意をささげる。

C. 本年度実施のあらまし

本年度は、甲学級はすでに送り出し、調査対象は乙学級だけとなったが、甲学級を中心として発表して来た『高学年の読み書き能力』のまとめの仕事が残っていた。それに乙学級を対象とした調査研究と、同時に、全体のまとめのためのいくつかの補充調査を試みた。そのおもなものを列挙すれば、

1. 乙学級に対する各学期末のテスト

第1学期

- 1) 漢字読字 (100字 52語)
- 2) 読字付帯語い (20語)
- 3) 漢字書字 (30字 15語)
- 4) 読解力

- 5) 語い (A, B)
- 6) 文法 (A, B, C)
- 7) 作文(A)——課題作文「ともだち」
- 8) 作文(B)——正しく文を書く力, 文と文を接続する力, 文章の推考力, 文章の構成力
- 9) 聞く・話す

第2学期

- 1) かたかな書字力
- 2) 表記能力
- 3) 読解力
- 4) 作文(A)——課題作文「わたくしのうち」
- 5) 作文(B)——文と文とを接続する力, 主題に即して文章を展開させる力
- 6) 語い
- 7) 文法
- 8) 聞く・話す

第3学期

- 1) 読解力
- 2) 文法 (A, B)
- 3) 作文(A)——課題作文「せんせい」
- 4) 作文(B)——感想文を書く力, 段落をつける力
- 5) 聞く・話す

2. 乙学級に対する特別のテスト

- 1) 読みにおける眼球運動の測定
- 2) 小学校卒業時における語い (読み物・他教科・日常生活の, 漢字で書かれた語がどれだけ読めるか)

3. 全学年におこなったテスト

- 1) 読書速度
- 2) 文法
- 3) 作文の基礎能力

本年度調査研究の成果の一部分は研究所報告『高学年の読み書き能力』におさめた。他は言語能力の発達に関する調査研究の全体のまとめを出す場合に、そのほうにおさめる予定である。

(興水)

新聞の文章のわかりやすさに関する 調査研究

A. 調査研究の経過と目的

33年度には、新聞文章を現状よりも読みやすく、わかりやすいものにするためにはどんな条件が必要であるかを調査しようとした。そして、読みやすさ、わかりやすさを作り出すと考えられる条件（要因）について、その度合いをいろいろに変化させ、それに応じて理解度がどのように変わっているかを調べた。

その条件として8箇条の項目をたてたが、その中に、記事文章のたてがき、よこがきの比較の問題が含まれていた。そして、それについて得られた結果は次のとおりであった。

「この調査の問題文の程度の長さでは、読了時間に差は認められない。理解度については、設問によっては、よこがきのほうが多少成績のいいものがある。よこがきのほうが読みやすい・わかりやすいと断定することはできないが、たてがきのほうが読みやすい・わかりやすいという事実はない。」（『国立国語研究所年報10』P.169）

このことは、ある意味で、われわれには意外な結果であった。従来どの調査でも、日本語の文章に関する限り、例外なく、たてがきがよこがきよりもまざっている、という結果が報告されているからである。ただ、その結果の解釈としては、たて組みのものが多く読書環境の現状における読書経験の影響が現われたものであり、いわば、たてがきの文章とよこがきの文章と、どちらをより多く読んできたかを実験でたしかめたにすぎないといえる、とも考えられてきたのである。

ところで、33年度のわれわれの調査では、問題文がさほど長くないことが問題ではあるけれども、ともかくたて・よこに優劣の差がないという、これまでの調査・実験とは異なる結果が得られたわけである。これは何を意味するものと解釈すべきだろうか。従来調査・実験における被験者と、われわれの調査における被験者との年代のへだたりによる読書環境のちがいがここに現われた

のであろうか。今日では国語以外の教科書はほとんどすべてよこ組みになっているし、その他の読みものでも、中・高校生はよこがきのものに接する機会がはるかに多くなってきており、その読書経験の影響がここにあらわれたものであろうか。とすれば、もっと長い文章について、いろいろな角度からこのことをさらにつきとめる必要があるのではないか。われわれは、このように考えた。

また、各新聞社では、数年来よこ組みの紙面をふやそうとしてきたが、一、二社を除き、最近では、内外の不評—と当事者はいう—により、後退の姿勢をとっており、よこ組みの紙面が少なくされてきている。もしも、われわれの調査結果が若い世代のよこ組みへの慣れの度合いを示しているものであれば、新聞社では、むしろよこ組みの紙面制作に力を注ぐことが考えられてしかるべきである。

それではいったい、現実の新聞の紙面において、たて組みとよこ組みとは読みやすさ・わかりやすさの上で、はたしてどう違うだろうか。本年度はこの問題を中心問題として取りあげ、これに前記の昨年度の8項目のうち文章構造の違いによる読みやすさ・わかりやすさの度合いを調べる問題を付帯させて、昨年度と同じく、中学3年生、高校1年生について集団調査を行なうこととしたのである。(文章構造としては、抽象的な事がらを先に述べて具体的例示をあとに述べた文章と、その逆にした文章との読みの比較の問題を考えた。)

なお、実際の新聞紙面におけるよこ組みの字詰めは、いろいろあるので、新聞紙面でのよこ組みとしてはどのくらいの字詰めがよいかを調べようとして15字、20字、25字の3種について調査を試みることにした。(たては新聞紙面と同じく15字としたが、問題によっては印刷の都合上、20字、25字としたものもある。しかし、たてがきにおける字詰めがちがいは比較の問題としない。)

B. 担当者

この調査研究は、第2研究部言語効果研究室に属する次の3名の所員の共同作業である。

永野 賢 林 四郎 渡辺友左

なお、研究補助員宮地美保子が所員を助けて調査研究に従事し、内地留学生

蛭塚知久、島野義智の2名が集団調査の実施に助力し、また臨時作業補助員2名が一部の集計に従事した。

この報告のCおよびDの2・3は林が、Dの1は前半（1・1、1・2）を林、後半（1・3）を渡辺が執筆し、全体を永野が整理した。

C. 調査実施要領

1. 調査票の作成

1・1 調査項目と問題 調査項目は、たてがき・よこがきの違い及びよこがきにおける字詰めの違いによる読みの速さと理解度の違いを調べるのを主眼目とし、これに文章構造、読過順序の問題を加え、さらに要因分析のための付帯調査をあわせ加えた。一括して次に示す。（問題七についての報告は省く）

項目	記事略称	変化要因
たて・よこと 字詰め	黒い羽根〔問題一〕	たて15、よこ15、よこ20、よこ25
	山に生きる人〔問題二〕	たて15、よこ15、よこ20
	親潮〔問題四〕	たて15、よこ15、よこ20、よこ25
	台風〔問題五〕	たて15、よこ15、よこ20、よこ25
	外国教科書〔問題三〕	たて20、よこ20
	数量景気〔問題六〕	たて25、よこ20
叙述順序	外国教科書〔問題三〕	抽象—具体、具体—抽象
付帯1読解力	母親大会〔問題八〕	
付帯2読書環境		

以下に記事文章と設問とを示すが、煩を避けるため、各種類、代表だけを示す。活字は、調査票には偏平の新聞活字を用いたが、この報告書では、ふつうの正角8ポ活字を用いた。紙面構成も、報告書の形に合わせて、組みかえてある。ただし、「台風」記事だけは、サンプルとして、原形のまますを縮尺して用いた。

「黒い羽根」〔問題一〕問題文、設問とも）、4種類の中から、よこ15を示す。設問には正解を示した。以下同じとする。

“黒い羽根”運動がはじまって いる。北九州の炭鉱失業者の家族 を救うためだ。好況のころは炭鉱	主が“長者番付”のトップにずら りと並び、炭坑節が全国的に歌い まわれた。今や炭鉱住宅は食う
--	--

や食わずのどん底だ。

【設問】今読んだ文の中に、次のことばはありましたか。あったものを□でかこんでください。正答は1つだけです。

◎長屋 **炭坑節** 台風 組合

以下、同じ形式で答えてください。

筑豊、三池、粕屋の3炭田で失業または失業寸前のものが5万5、6千人もある。“貧乏人の子たくさん”の例にもれず、子女が5人、6人の世帯はザラで、妻子ともどもではその5、6倍の人数になろう。

◎日本 大都市 **子女** 衛生

福岡県失対本部の「炭鉱離職者の生活実態」という報告によると、その窮迫ぶりはまことに悲惨だ。学童生徒は弁当も持っていけない。学童給食はとくに打切られた。がまん強い子は自発的に“2食主義者”となっている。雨がサもゴム長グツもなく、雨が降ると学校は休み、長欠児、不就学児童がふえるばかり。

◎**学校** 社会 電灯 紙クズ

犬、ネコの姿さえ見かけぬ炭住がある。ネズミに魚をとられた主婦のひとりには「ネズミも世帯の1員です。たまには魚も食いたかろう」と涙を流したそうだ。

◎太陽 山 洗濯 **ネズミ**

“ハーモニカ長屋”というのがある。ボロ家を風が吹き通るとハーモニカのように鳴る。雨モリといっても降るような雨もりで、座

る場所もない。板壁は破れ放題で隣の家もまる見えだ。そのボロ家で大の男が行者のように1日黙然と座っている。

◎たばこ 財布 イワシ **大の男**

着のみ着のままで、上着と下着の区別もない。家財道具は売り払ったり質に入れて、空屋同然にガラソとして何もない。ラジオのある家は時計がなく、時計のある家はラジオがない。たまに仕事にありついても、時間が分らなくては困るからだ。

◎**時計** 新聞 テレビ はさみ

子供には“貧乏病”がまんえんしている。トラコーマ、結膜炎、吹出物、おなかは異常なまでにふくれている。栄養失調で乳幼児の死亡率も高い。

◎めがね 自動車 **死亡率** 人口

今の日本は数量景気だという。“3種の神器”といわれる高級な家庭電気器具は羽根が生えたように売れる。が、日の当らぬ暗い谷間のどん底生活が隣り合っている。

◎**売れる** 捨てる 消す 飲む

石炭は“斜陽産業”で滅びゆく宿命だといってすませるものではない。不幸な同胞はみんなで助け合わねばならぬ。黒い羽根も焼石に水だろう。政府も大きな手を打つべきだ。社会党大会も人事争いで日が暮れるようでは、のんきすぎる。この問題一つだけでも見事に解決したら、政権も遠くあるまいに。

◎予算 誠意 **政府** 議会

「山に生きる人」(〔問題二〕, 問題, 設問とも), 3種類の中から, よこ15を示す。

山に生きる人

マムシの長太郎さん

「マムシの長太郎」一部落の人たちは栗木長太郎さんのことをそう呼んでいる。盛岡市から西へ約20キロ入った大石町の西山部落。栗木さんは西山村が中村町に合併した30年4月まで6年も西山の村長をつとめ, この春の町長選にも地元から推されて出馬した。だがこの元村長さんは年のうち半分以上も山に入ってヘビをさがしているという根っからのヘビ好きだ。

【設問】栗木さんは――

- 1 マムシのようにきらわれている。
- ②もと村長さんだった。
- 3 山でゆくえ不明になった。

栗木さんがヘビを取りだしたのは小学校のころからで, 小学校時代はいつでもフトコロにヘビを入れていたほど。今でも暑いときシャツの下にヘビを入れておくとふしぎに涼しいという。

【設問】栗木さんは――

- ①小学生のころからヘビを取った。
- 2 小学生のころは泣き虫だった。
- 3 小学生のころから勉強した。

28歳のとき, はじめてマムシを捕えた。そのマムシを生のまま裂いて食べたら, そのうまいこと, とても青大将やシマヘビの比ではなかったそうだ。栗木さんのマム

シとりは自己流だから素手で押える。「なあにマムシの最初の攻撃は恐ろしいが, その次の攻撃までにはかなりの時間がかかる。そこを押えちまえばわけないで…」そうというが長い間には失敗もある。

【設問】栗木さんは――

- 1 マムシだけは取らない。
- 2 28歳で結婚した。
- ③素手でマムシを取る。

4年ほど前の秋家人がみんな出かけたのを幸いと木箱から6匹のマムシを取出し, 部屋に放した。狭い木箱から解放されたマムシは感触の違う畳の目を用心深くはっていた。栗木さんはわが子でも見ているようにはい回るマムシを楽しんでいた。そのうちに部屋から台所に抜けた2匹が流しのアナのなかへと入りはじめた。あわてた栗木さんはそのシッポを押えたが次の瞬間, 右手を深くかまれた。

【設問】栗木さんは――

- 1 マムシを売って生活している。
- ②4年前マムシにかまれた。
- 3 家の中でマムシを放し飼いにしている。

マムシの毒は24時間で人を殺すという。それでも栗木さんは6匹を木箱におさめてから手ぬぐいで止血し, かまれたところをナイフでそいだ。

【設問】栗木さんは――

- ①おちついて傷の処置をした。
- 2 6匹のマムシにおそわれた。
- 3 気絶して倒れた。

栗木さんのマムシとりのコツは、山のなかでマムシを捕えるとそれが子持ちならサッと腹を裂いて、こどものマムシはかならずそこに置いてくる。そうすると2年目にはきっと同じ場所で成長したマムシを捕えられるというのだ。「わしはナ、山にマムシを飼っているから捕えられるんでナ」栗木さんはそう自慢する。

【設問】栗木さんは――

- ①マムシの子は山に置いてくる。
- 2 山小屋でマムシと同居している。
- 3 マムシの子を殺すとたたりがあるという。

だが栗木さんはマムシとりが職業ではない。「これはワシの趣味でナ」と当人がいように村長在

職の6年間、村を流れる田川の治水に尽した功績は大きい。

【設問】栗木さんは――

- 1 趣味の広い人である。
- 2 村長よりもマムシ取りが好きだ。
- ③村長としてもよく働いた。

これも山から山を歩いて源流地帯を自分の庭のようによく知りつくしていたからやれたのだと栗木さんはいう。政治とマムシ。妙なとりあわせだが栗木さんは「マムシはかわいい。そりゃかみつくのは弱い身を守る唯一のそして最後の手段でな。人間ほどうやらしい動物はつくづくないで…」

だから山へ行くんだといいたげな栗木さんの表情だった。

【設問】栗木さんは――

- 1 マムシの威力で村長をつとめた。
- ②山の知識を村政に生かした。
- 3 今はマムシ取りをやめている。

「親潮」〔問題四〕問題文)、4種類の中から、よこ15を示す。

親 潮 と は

海の男たちが酒席でかわすシャレに「酒(サケ)は銚子きり」というのがある。寒海の魚であるサケが南でとれる限界は銚子沖までだ、という意味を酒徳利にからませたものだが、これはそのまま、東日本の太平洋岸を洗う親潮の流れの説明でもある。

日本近海で最大の寒流、親潮の源は北極に続く冷たい海、ベーリング海とオホーツク海である。それがクリル諸島中部から北海道の東端、根室半島の納沙布(のさっぷ)岬沖に流れ出て、そこから数本の分枝にわかれて、ゆっくりと本土にそい、太平洋を南に流れる。だいたい夏は金華山沖で黒潮とぶつかるが、冬は勢いが強くなり銚子沖あたりまで黒潮を押し返す。

それが親潮の南の限界だが、流れはさらに暖かい黒潮の下に潜りこみ、親潮潜流となって遠く沖繩、台湾の近海にまで及んでいる。

親潮の特徴は、第一に冷たいことだ。真夏でさえ納沙布岬沖では7、8度、南下しても20度を越すことはない。それも太陽熱を吸収した表層だけのことで、下はもっと低い。北海道沖では、下層の水はオホーツク海の水そのまま0度に近いこともある。20度以上ある黒潮とちがって、これではとても海水浴向きでない。第二に親潮はニゴっているのが特徴。透明度は水色4以上、ニゴリのため緑色を帯びている。黒潮が水色1～2、紺青に澄みきっていて、遠目には、その名の由来のように黒に近い濃い藍色に映るのは、まったく正反対だ。

冷たくニゴったこの寒流が、一見した暗い感じとは逆に、親潮という名をもつのはなぜだろう。それは、いつ、だれがつけたかわからない。ただこの流れが、海の幸、

いろいろの魚貝類を養う海の親のようだ、という意味だといわれている。恐らく北の海で生活を支えてきた無名の漁民たちが、名づけたものだろう。その体験を通じて親潮の性格をとらえたわけだ。冷たい水は密度が大きいから、海の底の方にある。海底には栄養分が豊富だ。つまり、何万年も前から陸地の川から海中に選ばれた栄養塩類や、海の生物の死体の分解したものが、海底にたい積している。それはプランクトンを育てる栄養分になる。プランクトンは小魚の絶好の食糧だ。またプランクトンで育った小魚は、それより大きい魚の食糧になる。

北極に近い冷たい海から起こり、栄養塩類でニゴった親潮は、日本近海でプランクトンを育て、小魚を育て大魚を育てる。日本を中心とする太平洋北部、とくに金華山沖や三陸沖が世界3大漁場の一つとされているのは、この親潮の冷たいニゴった流れのおかげなのだ。

「親潮」(設問)

A 今の記事は、親潮の特徴としてどんな点をあげていましたか。できるだけかたんに、二つまたは三つに箇条書きしてください。

1

2

3

B どうして親潮と呼ぶのですか。そのわけをかたんに書いてください。

「台風」(〔問題五〕問題文)、4種類とも、調査票のままを縮尺して示す。(印

刷の都合上82—83ページに示す)

「台風」(設問)

A 昔から言い伝えられている“台風に深水”ということについてこの記事の筆者はどう考えていますか。次のうち筆者の考えと思うものには○、そうでないと思うものには×をつけてください。(どちらともわからないのはそのまま)

- × 1 “台風に深水”という昔からの言い伝えは科学的に根拠がない。
- × 2 “台風に深水”ということは実現性の少ない空想だ。
- × 3 “台風に深水”ということは、稲が大水で流されないようにすることだ。
- × 4 “台風に深水”ということは、稲が台風で倒れないようにすることだ。
- 5 “台風に深水”とは稲が台風でゆれないようにすることだ。
- × 6 “台風に深水”をしたらかえって大水による被害が大きくなる。
- × 7 “台風に深水”は稲を水害から守ることにだけ効果がある。
- × 8 高アゼは水田一枚ごとにつくるべきだ。

B “台風に深水”といいますが、その効果をあげるにはいったいどのくらい深いとよいのですか、前の記事ではどう書いていますか。適当と思うものに○をつけてください。

- 1 十センチ以上
- 2 二十センチ以上
- ③ 四十センチ以上
- 4 六十センチ以上

「外国教科書」〔問題三〕問題文) これは、記事の叙述順序を、抽象具体、具体抽象と、2種類に作り、表記形式の2種類(たて20, よこ20)に配合して、4種類の問題文とした。ここには、よこ20によって、2種類の内容を示す。

(抽一具型)

外国の教科書に
正しい日本観を

国際理解を深めるためにも、外人客を引き寄せるためにも、できるだけ正しくわが国の姿を外国に紹介しなければならぬことは言うまでもない。事実、近ごろではかなり多くの印刷物が外国向けに作られている。しかし、それにもかかわらず、外国人がどれだけ正しく日本を知っているかということでは、実情

(84ページ)
続く)

台風とかんがい

五年続きの豊作の声を聞く。よろこばしいことである。しかしまだ台風が心配になる。昔から「台風は深水」といつて台風時には水田に深く水を張れと教えている。これは暴風による稲のユレを少なくしようというねらいのようである。

ところが、人工台風を起こす装置（風洞）で、灌（かん）水の深さを変えた模型実験をしてみると、四十センチ以上の深水でないと効果がないという結果になった。実際にはそんな高いアゼに囲まれた水田はないから、台風は深水の教えもユレを防ぐには大した役には立ちそうもない。

そこで思いきって水田に四十センチでできればそれ以上の人工洪水を起こしたらいどうであろう。風害と水害が同時に防げて一石二鳥というわけである。五十センチの貯水ができるとすれば、百町歩（約百ヘクタール）の水田は五十万トンの洪水調節池となる。さらに海岸地方では淡水の洪水により、潮風害はもちろん、高潮による塩水害もはるかに少ない。心配される浸水による稲の害は、穂と葉の一部が水面に出ておりさえすれば、二、三日なら実害はない。

高アゼを作るとしても、水田一枚ごとにはできないから、かなり広面積の水田を単位として囲むのである。輪中の小規模なものと思えばよい。この方法では灌水と同じに排水が自由にできねばならぬが、あまりにも現実ばなれした空想であらうか。

台風とかんがい

五年続きの豊作の声を聞く。よろこばしいことである。しかしまだ台風が心配になる。昔から「台風は深水」といつて台風時には水田に深く水を張れと教えている。これは暴風による稲のユレを少なくしようというねらいのようである。

ところが、人工台風を起こす装置（風洞）で、灌（かん）水の深さを変えた模型実験をしてみると、四十センチ以上の深水でないと効果がないという結果になった。実際にはそんな高いアゼに囲まれた水田はないから、台風は深水の教えもユレを防ぐには大した役には立ちそうもない。

そこで思いきって水田に四十センチ、できればそれ以上の人工洪水を起こしたらどうであろう。風害

と水害が同時に防げて一石二鳥というわけである。五十センチの貯水ができるとすれば、100町歩（約100ヘクタール）の水田は50万トンの淡水調節池となる。さらに海岸地方では淡水の洪水により、潮風害はもちろん、高潮による塩水害もよほど軽くなるに違いない。心配される浸水による稲の害は、穂と葉の一部が水面に出ておりさえすれば、2～3日なら実害はない。

高アゼを作るとしても、水田1枚ごとにはできないから、かなり広面積の水田を単位として囲むのである。輪中の小規模なものと思えばよい。この方法では灌水と同時に排水が自由にできねばならぬが、あまりにも現実ばなれした空想であらうか。

台風とかんがい

5年続きの豊作の声を聞く。よろこばしいことである。しかしまだ台風が心配になる。昔から「台風に深水」といって台風時には水田に深く水を張れと教えている。これは暴風による稲のユレを少なくしようというねらいのようである。

ところが、人工台風を起こす装置（風洞）で、溜（かん）水の深さを変えた模型実験をしてみると、40センチ以上の深水でないと効果がないという結果になった。実際にはそんな高いアゼに囲まれた水田はないから、台風は深水の教えもユレを防ぐには大した役には立ちそうにもない。

そこで思いきって水田に40センチ、できればそれ以上の人工洪水を起こしたらどうで

あろう。風害と水害が同時に防げて一石二鳥というわけである。50センチの貯水ができるとすれば、100町歩（約100ヘクタール）の水田は50万トンの洪水調節池となる。さらに海岸地方では淡水の洪水により、潮風害はもちろん、高潮による塩水害もよほど軽くなるに違いない。心配される浸水による稲の害は、穂と葉の一部が水面に出ておりさえすれば、2～3日なら実害はない。

高アゼを作るとしても、水田1枚ごとにはできないから、かなり広面積の水田を単位として囲むのである。輪中の小規模なものと思えばよい。この方法では溜水と同時に排水が自由にできねばならぬが、あまりにも現実ばなれした空想であろうか。

台風とかんがい

5年続きの豊作の声を聞く。よろこばしいことである。しかしまだ台風が心配になる。昔から「台風に深水」といって台風時には水田に深く水を張れと教えている。これは暴風による稲のユレを少なくしようというねらいのようである。

ところが、人工台風を起こす装置（風洞）で、溜（かん）水の深さを変えた模型実験をしてみると、40センチ以上の深水でないと効果がないという結果になった。実際にはそんな高いアゼに囲まれた水田はないから、台風は深水の教えもユレを防ぐには大した役には立ちそうにもない。

そこで思いきって水田に40センチ、できればそれ以上の人工洪水を起こしたらどうであろう。風害と水害が同時に防げて一石二鳥というわけである。50センチの貯水ができるとすれば、100町歩（約100ヘクタール）の水田は50万トンの淡水調節池となる。さらに海岸地方では淡水の洪水により、潮風害はもちろん、高潮による塩水害もよほど軽くなるに違いない。心配される浸水による稲の害は、穂と葉の一部が水面に出ておりさえすれば、2～3日なら実害はない。

高アゼを作るとしても、水田1枚ごとにはできないから、かなり広面積の水田を単位として囲むのである。輪中の小規模なものと思えばよい。この方法では溜水と同時に排水が自由にできねばならぬが、あまりにも現実ばなれした空想であろうか。

ははなはだ心もとない。

最近、国際教育情報センターという機関が16か国の小、中、高校教科書を調べたところ、どここの国の中でも、いろいろ誤った記述があることがわかった。その発表をみると、非常に時代おくれの説明や、見当違いの解説が少なくないのに驚く。

たとえば写真など、さすがにアメリカでは戦後の新しいものを使っているが他の諸国では戦前の、それも相当古いものを使っている。統計数字などは、アメリカでさえ古い。本文の時代的ズレは一層ひどく「男はキモノを着て山高帽をかぶり、自転車のペダルを踏んでいる」(フランスの地理教科書)などには、笑っていいやら、おこっていいやらわからない。

地理の教科書が日本の地震に触れているのは当然だが「日本は絶えず地震でゆれている。1日1回以上の地震がある。これは島を支えている巨大な動物が動くためだと、日本の説話では説明している」とまで書かれては、これもフランス流の文学的表現かといってすましてもいられまい。

さらに困るのは日本を低賃金とダンピングの国にしてしまっていることだ。わたしたちが紳士の国と信用しているイギリスの本でも、紡績工場で働く少女たちが「2時間の休みを入れて午前5時から午後5時まで働いている」と記されている。インドの教科書までが日本を低賃金の国ときめているのには、あなたの国はどうですかといいたくなる。さらに、フランスのある本によると日本では時計を目方で売るそう。いやはや、日本は何というひどい国、めずらしい国だろう、そう外国の少年少女は思うだろう。

このような誤解や不用意な記述が、青少年の教科書に見えるのだから大問題である。ユネスコでは国際理解を強調しているが、この現状を何と見るだろう。ユネスコの支部はやっぱり日本にある。できるだけ早く対策を講じて、何とか外国の教科書のゆがんだ日本観

をあらためてもらいたいものである。

(具一抽型)

外国の教科書に 正しい日本観を

「日本の男はキモノを着て山高帽をかぶり自転車のペダルを踏んでいる」——これが現在のフランスの地理の教科書にある文だときいたら、あなたは吹きだすだろうか、ふんがいするだろうか。「日本は絶えず地震でゆれている。1日1回以上の地震がある。これは島を支えている巨大な動物が動くためだと、日本の説話では説明している。」——何とみごとな文学的表現か、さすがはフランスだ。いや、そんな感心はしていられまい。わたしたちが紳士の国と信用しているイギリスの教科書でも、日本の紡績工場で働く少女たちが「2時間の休みを入れて朝の5時から夕方5時まで働いている」と書いてある。かくて日本は完全に低賃金とダンピングの国となりおわる。そして、なんと、インドの教科書までが日本を低賃金の国ときめている。それよりあなたの国はどうですかと言いたくなる。さらにフランスのある本によると、日本では時計を目方で売るそうだ。いやはや、日本は何というひどい国、めずらしい国だろう、そう外国の少年少女は思うだろう。

これはうそでも、大げさでもない。最近国際教育情報センターという機関が16か国の小、中、高校教科書を調べたところ、地理や歴史の本にちゃんとこうかいてあったのである。これらはほんの一、二の例で、どこの国の本でも、この程度の誤りのないものはない。写真その他の資料など、みな戦前の、しかも相当古いものばかりである。さすがにアメリカだけは別で、戦後のものを使っているが、それでも統計の数字などになるとやはり古い。

わたしたちは、いったい諸外国に日本の姿を紹介していないのだろうか。そんなことはない。以前は知らず、近ごろでは、ずいぶんいろいろな印刷物が外国向けに出されている。それでも事実はこのようである。

わたしたちも外国を正しく理解しなければならないが、外国人もわたしたちを正しく理解してくれなければこまる。外国人が日本に来るのも、そんな珍奇な国を見物してこようという気持からではありがたくない。ユネスコが強調する国際理解もこれでは泣くだろう。ユネスコの支部はりっぱに日本にある。できるだけ早く対策を講じて、何とか外国の教科書のゆがんだ日本観をあらためてもらいたいものである。

「外国教科書」(設問)

次の問いに答えてください。

A 今の記事をどう理解しましたか。次の文のうち、記事にかいてあったことと一致するものに○、一致しないものに×をつけてください。

- × 1 外国教科書の日本紹介記事を見ると、やはり、大学のものは正確である。
- 2 外国の教科書には、日本の国情が正しく紹介されていない。
- 3 イギリスの教科書にも、日本を低賃金とダンピングの本場のようにかいたものがある。
- × 4 諸外国の中でも、アメリカが特にひどい。
- × 5 フランスの教科書のは、さすがに文学的な書き方でおもしろい。
- 6 ゆがんだ紹介は読者の国際理解をさまたげるから、これを是正するようつとめなければならない。

B 今の記事にはどんな例があげてありましたか。あげてあったものには○、あげてなかったものには×をつけてください。

- × 1 日本では自転車普及していて、紳士もみんな自転車にのっている。
- 2 日本の紡績工場の女工は、午前5時から午後5時まで働いている。
- 3 日本では、時計を目方で売っている。
- 4 日本は毎日地震でゆれている。
- × 5 日本はフジャマとゲイシャガールの国である。
- × 6 日本の婦人は礼儀正しくてよく働く。

C この調査をしたのは、どこの団体ですか。一つだけ○をつけてください。

- 1 ユネスコ
- 2 文部省
- ③ 国際教育情報センター
- 4 国際文化振興会

「数量景気」〔問題六〕問題文)

これは「数量景気とは」「ゴキブリ異変」「少年院はこれでいいか」「秋の虫の飼い方」「列車の中で」の5個の小記事から成っている。よこ20を示す。

数量景気とは

問 最近“数量景気”といわれていますが、
どういうことか説明して下さい。

答 数量景気に対することばは価格景気です。常識からみると、景気がよくなる時に物価の上昇はつきものです。需要が供給を上回り、物価が高くなり、生産がふえていくという順序がふつうの景気のよくなり方で、これは価格景気と呼ぶことができます。価格景気はその時の景気はいいのですが、必ず後の心配がつきまといます。物価が上がり続けるということは国民生活、国際収支その他いろいろの面で国の経済に穴があきやすいのです。

望ましい景気のよくなり方は需要がふえ、生産も生産設備もふえ輸入も伸び、結果として国民の収入もふえながら、しかも物価が上がらないという状態です。国の経済のあらゆる部門が適当な伸び方をすればこういう景気を作り出すことはできます。これが数量景気です。

菅野経済企画庁長官は最近の月例経済報告で「いまの日本経済は数量景気が順調に展開している」という表現をしました。たしかに日本の経済はいま大きく伸びていながら物価は上がっていません。しかしこれは、いま経済の各部門が正しい発展をしているためとはいいい切れません。神武景気で造りすぎた生産設備が需要の伸びに間に合ったからなのです。設備投資がたくさん必要になってくる時

に経済全体とのバランスをどうとっていくかがこんごの問題となるでしょう。

ゴキブリ異変

東京や大阪など都会のビルの最近の悩みはゴキブリ(いわゆる油虫)ののさばり方だ。寒い冬にも暖房完備、居心地満点とあって南方系のこのコン虫はいまやビル族と化している。

国立予防衛生研究所が東京駅前のあるビルの製粉会社で、ゴキブリはどこにいるかという実験を試みた。土曜日、殺虫剤の原子爆弾こと、DDVPという新薬の煙霧を一面にふりまいた。月曜日、ゴキブリの死がいを見場所別に集計した。この薬はその場でコロリといくからゴキブリの隠れ家を調べるのには都合がよい。

パーセントで表わすと——役員室0.5、社長室0.3、会議室0.3——これは当然のこと事務室は8.2だった。会社の見本用メリケン粉が事務室の戸ダナにおいてあったのだ。ところが最高の食堂21.0につづいて、タイプ室が20.4と出た。

金属製のタイプや紙とゴキブリと、その関連はなにか。首をひねったコン虫学者がハタとひざを打った。タイプ——タイピスト——女の子——おしゃべり——お菓子。会社の庶務課長さんはあっさりと、その推理の正しさを認めたそうだ。

少年院はこれでいいか

“カミツキ高田”の異名がある社会党の高田なほ子氏(全国)は大分の特別少年院を視察、31日の参院法務委員会で「少年院の生活はチリ紙1日に4枚、石けん4か月に1個というひどいものだ」と現地視察の結果を報告した。高田氏が少年院の門をくぐったら少年たちが畑にかがみこんで、ガラガラ照りつける太陽の下でトマトやスイカの手入れをしている。聞いてみると少年たちの汗の結晶はみんな政府に取りあげられてしまうという。「食べざかりの少年たちに口に入るものを作

らせて、収穫を全部取りあげてしまうような残酷な仕打ちはすぐ止めるべきだ」と机をたたいて井野法相にかみついた。これには委員席もセキとして声なく、井野法相も「非常によいお話を聞いた。早速、現地の事情を調査する」と善処を約し、この時ばかりは超党派のまとまりをみせていた。

秋の虫の飼い方

問 秋の虫を飼うときの心得を教えてください。

答 きりぎりす、松虫、鈴虫、草ひばりなどはきゅうり類を、1日1回、それぞれの体の半分ぐらいの量を与えること。うり類がなくなればハチミツで育てるのです。

エサは午前中にやって下さい。時間がおそいと、夜、鳴く時間もおそくなりますから。気をつけなければいけないのは

- 1、虫はすべて羽で鳴きますから水気がかからぬように
- 2、蚊取線香の煙にふれないように
- 3、塩気をきらうので、エサを切る庖丁に気をつけること
- 4、太陽光線をあてないこと
- 5、鈴虫はなるべく風にあてないように
- 6、殺虫剤に特に気をつけて下さい

虫はなれるまで(1日ぐらい)鳴かぬことがあります、心配はいりません。

列車の中で

こみ合う列車の中で親子4人が向かい合いの席をとることができ、やれやれと思っているところへ、車掌から「お子さんをこちらへ移して立っているお客さんをもうひとりかけさしてあげて下さい」などといわれると、さも水いらずの団らんを乱されたかのようにブンとふくれた顔をするのはつつしみたいものです。

自分たちのつごうばかりを考え、立っている客への思いやりを忘れるようでは、車内道徳をわきまえているとはいえません。

「数量景気」（設問）

前のページには、五つの記事がありました。各記事の内容について、次の設問に答えてください。

A 「数量景気とは」について

- 一 数量景気のほかに、もうひとつ景気の一よくなるなり方があります。それは何とよばれていますか。空白の中に適当な文字を記入してください。

答 （価格）景気

- 二 数量景気の特徴として、ということがいえますか。（一つだけに○）

- 1 物価が高くなり、生産がふえる。
- ② 物価は高くないで生産がふえる。
- 3 その時はいいが、あとが心配だ。
- 4 輸出が輸入を上回って外貨が得られる。

B 「ゴキブリ異変」について

ゴキブリが死んでいた場所について、問いに答えてください。（空白の中に文字を記入する）

- 1 いちばん多く死んでいたのはどのへやでしたか。

答 （食堂）

- 2 そのつぎに多かったのはどのへやでしたか。

答 （タイプライター室）

C 「少年院はこれでいいか」について

- 一 高田氏の報告内容はどんなものでしたか。（一つだけに○）

- 1 少年院の数が少なすぎる。
- 2 少年院の中の規律が乱れている。
- ③ 少年院での残酷な扱いをやめろ。
- 4 青少年の道德教育を考え直すべきだ。

- 二 右の報告に対する法相の答弁内容はどんなものでしたか。

- ① 早速調べて善処する。
- 2 そういう事実はないはずだ。
- 3 だから道德教育を考えている。
- 4 現状が適切だと思う。

D 「秋の虫の飼ひ方」について

秋の虫を飼うのには、どういう注意が必要ですか。（記事に書いてあったものには○、書いてなかったものには×をつける）

- ×1 夕方えさをやる。
- ×2 羽にさわらないようにする。
- 3 蚊取線香の煙にふれないようにする。
- 4 日光に当てないようにする。

- × 5 風通しをよくする。
- × 6 なれるまで静かに置く。
- 7 羽に水がかからないようにする。
- × 8 夜は暗い場所に置くようにする。
- 9 殺虫剤に気をつける。
- × 10 ごく少量の塩はやったほうがよい。

E 「列車の中で」について

この文を書いた人の言いたいことはどんなことですか。（一つだけに○）

- 1 セっかく親子四人で向かい合っているところへ割りこむものではない。
- ② 座席にいる人はなるべくつめて、立っている人をすわらせよう。
- 3 こんだ車の中では、車掌が整理してなるべく客をすわらせるべきだ。
- 4 こんだ車に子どもをつれてはいるのは、子どもにかわいそうだ。

「母親大会」（〔問題八〕）は、あとで、結果を記す際に示す。次の「調査」は表以外はたて組みにしたが、ここでは、よこにして示す。

【調査】

一、次の学科について、あなたの好きな順に番号を記入してください。

- ☐ 社会 ☐ 数学 ☐ 国語 ☐ 英語 ☐ 理科
☐ 図工 ☐ 音楽 ☐ 体育

二、新聞にはいろいろな記事がのっています。あなたはそれぞれの記事をどのように読みますか。あてはまる欄の中に○印を記入してください。

	1, いつも読む	2, ときどき読む	3, 読まない
ま ん が			
子 供 欄			
家 庭 欄			
社 会 記 事			
投 書 欄			
政 治 記 事			
経 済 記 事			
社 説			
学 芸 欄			
科 学 記 事			
小 説			
ス ポ ー ツ			

三、あなたは参考書以外の本を読むことが好きですか。きらいですか。あてはまるも

のに○印を記入してください。

1. 好きだ 2. きらいだ 3. どちらともいえない
四、最近どんな本を読みましたか。読んだ本の名前を書いてください。

1・2 調査票 調査票の印刷は読売印刷所に依頼し、活字は新聞1倍(旧5号)すなわち、よこ8ポタて6.4ポの偏平活字を使用した。

問題の各種類ともが、どの学校のどの組にもまんべんなく行きわたるよう、調査票のとじ合わせには、特殊な考慮を加えた。その方法は前年度と同じであるから、ここには、くり返さない。(「国立国語研究所年報10」116ページ参照)

結果として、どの学校のどの組にも、各種類だいたいまんべんなく配られた。さらに、各種類に当たった被調査者に、グループとして、国語能力に片寄りがなかったかどうかを、学校の国語の成績(5段階評定)によって検査した結果、国語能力の片寄りを示す有意差は、どこにも見出せなかった。すなわち、混配は成功したので、以下調査結果を述べる際、国語能力の片寄り是要因として考慮に入れる必要がないわけである。

2. 調査実施

2・1 インストラクション 調査者はひとりだけではないので、インストラクションの斉一を期するため、プリントを作り、それに従って指示した。プリントの全文を記す。

○ 「中をあけてはいけない」と注意して、まず調査票を配る。

表紙に所定の事項を記入させてから、説明に移る。

1. これは、国立国語研究所の調査です。
2. 目的は、新聞をもっと読みやすく、わかりやすくするためには、新聞の文章の書き方をどうしたらよいかを知ること、みなさんの国語の能力を測ることではありません。
3. 形は学校の国語の試験問題のような形をしています、今言ったように、目的が違いますから、気楽に、のびのびと答えてください。この結果は学校には残りません。みなさんの成績とは、何の関係もありません。だからといって、でたらめを書いてもらっては困ります。わからないのはわからないで結構ですから、ありのままを卒直に書いてください。
4. ふつうに新聞を読んでいる時の状態で、頭に何が残るかを知りたいのですからあまり緊張しないで、むしろ興味本位に読んでください。ただし、指示には必ず従ってください。そうでないと、せっかく調査した結果がむだになってしまい

ます。

5. ふつうの試験と非常に違うところは、たとえば、同じ〔問題1〕でも、ある人のはたてがきしてあり、ある人のは、よこがきしてあるというように、人によって、すこしずつ違う点があることです。となりの人を見たりしてはいけません。もし見えた場合、自分の問題と違う点があっても心配しないで、やってください。
6. 調査票は表紙とも15ページです。中を見ないようにして、右下のページの位置だけをめくって、たしかめてください。たりないのがあったら、手をあげてください。
7. 問題は8つあります。どれも勝手に始めないで、指示に従って始めること。
8. 鉛筆は、あまりとがっていないのを、3本ぐらい用意してください。
9. 最初の問題は——まだあけてはいけません——早読み競争です。数行読むと、設問があります。それに答えては、読み進むこと。ここでは、正しく答えることより、早く読むことが大切です。答えに自信がなくても、決してあとへもどって読み返さないこと。わたしが「やめ」といったら、読み終わったところにかぎじるし(「」)を書き入れて、鉛筆を置き、顔をあげる。訂正したり、次をめくったりしてはいけません。では、左手で紙の右はしをもち、めくる用意をする。「用意、ドン」で一斉に始めます。……「用意」……「ドン」

〔問題1〕(1分30秒で)「やめ」

10. つづいて〔問題2〕をやります。要領は前と同じですが、設問の性質は、すこし違っています。答えは三つありますが、そのうち一つが正答です。それに○をつけます。では、紙をつまんで、……「用意」……「ドン」

〔問題2〕(2分で)「やめ」

11. 〔問題3〕以下は、始めるのは一斉ですが、「やめ」とはいいません。問題文の中に設問はまじっていませんから、だれもが一応内容をつかみながら、なるべく早く、一回読みます。読み終わったら、すぐに、ここ(黒板)を見てください。ここには時間の経過を知らせる数字が出ていますから、その時出ている数字を、記事の右側に書きます。書いたら、すぐにページをめくる。次のページに設問がありますから、それに答えてください。答えるときにはもう、問題文を見てはいけません。答えおわったら、鉛筆をおいてそのまま待つ。次をめくってはいけません。
12. 以下〔問題4〕〔問題5〕〔問題6〕、みな同形式。ただし、〔問題6〕は、よこ組みのものは調査票の方向が変わるので、そのことを事前に注意する。
13. 〔問題7〕は、時間は測らない。一回通読を厳守して、次のページの質問に答えてもらう。終り次第、〔問題8〕〔調査〕へ進ませる。〔問題8〕はふつうのテスト形式だから、読み方に制限はない。

〔調査〕の最後の項目——四、最近どんな本を読みましたか。読んだ本の名前を

書いてください——は、最近読んでおもしろいと思った本の名前を書いてください——に改める。

2.2 被調査校と調査期日、被験者数

東京都立戸山高等学校	1960. 1. 12
東京都立豊島高等学校	1959. 12. 21
埼玉県立熊谷農業高等学校	1959. 12. 16
東京都新宿区立西戸山中学校	1959. 12. 23
東京都江東区立深川第六中学校	1960. 1. 27
埼玉県熊谷市立大原中学校	1959. 12. 16

被験者の人数一覧表を第1表に示す。

第1表 被験者、学校別、性別、人数一覧表

中学				高校				全体		
	男	女	計		男	女	計	男	女	計
西戸山	56	47	103	戸山	72	31	103			
深川六	47	42	89	豊島	44	55	99			
大原	89	76	165	熊谷農	106	109	215			
計	192	165	357	計	222	195	417	414	360	774

D. 調査の結果

1. たてがき・よこがきの違い及び、よこがきにおける字詰めの違いによって読みの速さと理解度に違いが生じたか。

1.1 読みの速さの比較 「黒い羽根」から「数量景気」まで、6個の記事について、問題文種類別、すなわち、たてがき・よこがきの違い、及び、よこがきにおける字詰めの違いによる、1分間平均読字数を示すと、第2表の通りである。「外国教科書」は、ここでは、内容上の違いを合算によって無視し、表記形式の違いだけによって類別し平均した。また、「黒い羽根」と「山に生きる人」は、ともに記事文の中に設問がさしはさんであり、被験者は、設問に答えながら読み進んだものであるが、ほかの記事は、記事文の中には設問を含んでいない。

第2表をみると、まず次のことがらに気づく。

第2表 各記事、表記形式別による1分間平均読字数

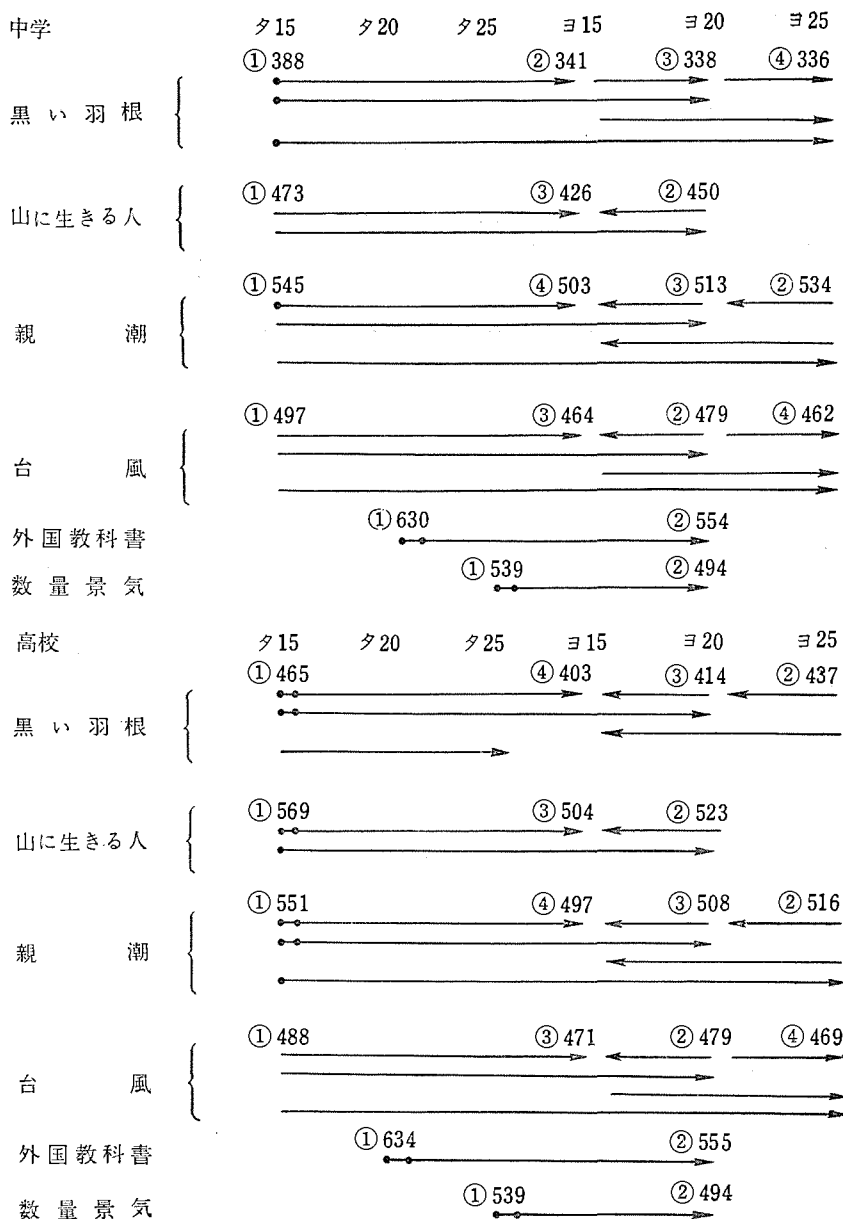
		黒い羽根	山に生きる人	親潮	台風	外国教科書	数量景気
中学	タ 15	388	473	545	497	—	—
	タ 20	—	—	—	—	630	—
	タ 25	—	—	—	—	—	539
	≡ 15	341	426	503	464	—	—
	≡ 20	338	450	513	479	554	494
	≡ 25	336	—	534	462	—	—
高校	タ 15	465	569	551	488	—	—
	タ 20	—	—	—	—	636	—
	タ 25	—	—	—	—	—	539
	≡ 15	403	504	497	471	—	—
	≡ 20	414	523	508	479	555	494
	≡ 25	437	—	516	469	—	—
全体	タ 15	430	527	549	496	—	—
	タ 20	—	—	—	—	634	—
	タ 25	—	—	—	—	—	539
	≡ 15	375	468	499	468	—	—
	≡ 20	381	488	511	479	555	494
	≡ 25	389	—	523	466	—	—

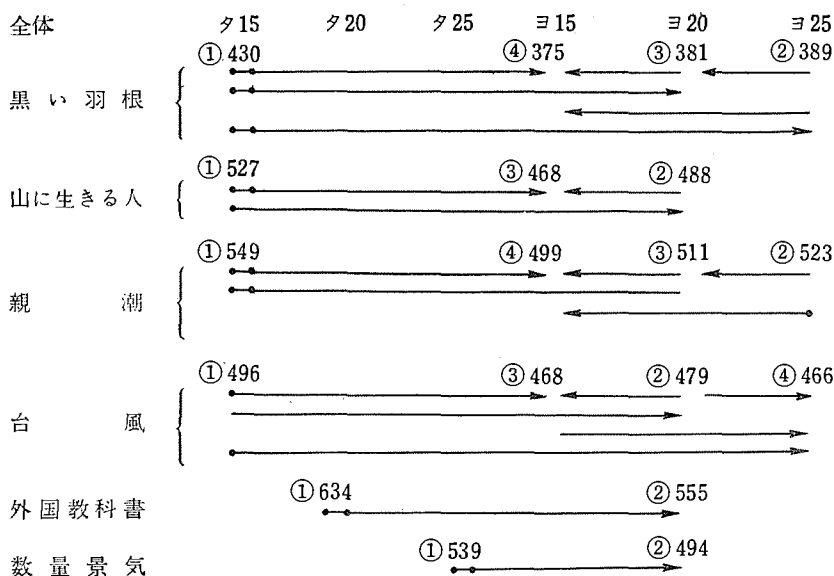
- ① すべての記事を通じて、たてがきが、よこがきよりも速いこと。
- ② 「親潮」以下は、中学と高校とで、数値がきわめて接近しているが、「黒い羽根」「山に生きる人」の二つでは、いちじるしく中・高間の差が開いており、高校生がある場合には、1分間に平均100字も多く読んでいること。これは、この2記事が設問を含んでいるために、能力の差があらわれたものと思われる。

次に、表記形式別によるこれら平均値のへだたりが、統計的に有意なものであるかどうか、また、各種類間の読みの速さの順位はどうなっているかを見るために、それらが同時に見渡せるように、図表第1図を作った。

表記形式の各種類をそれぞれ一つの極とする。二つずつの極を矢印がつないでいる。矢の根元が速い極、先端がおそい極である。根元にある黒玉は、速さの差が統計的に有意であることを示す。黒玉一つは危険率5%の有意差、黒玉二つは危険率1%、つまり著しい有意差を示す。

第1図 各表記形式間の読みの速さの優劣関係、及び差の有意性





「山に生きる人」「外国教科書」「数量景気」の3記事は、極の数が3乃至2でふそろいなので、一応除外し、4極そろっている「黒い羽根」「親潮」「台風」の3記事について、速さの総合順位を見る。極がかぞえられる回数は各極とも、 $3 \times 3 = 9$ 。9を分母とし、矢の根元の数を分子とすると、分子の大きい

第3表 3記事合計による、4種の表記形式の、読みの速さの順位

	タ15	≒15	ヨ20	≒25
中学	① 9/9	③ 3/9	② 4/9	④ 2/9
高校	① 9/9	④ 1/9	② 4/9	② 4/9
全体	① 9/9	④ 1/9	② 4/9	② 4/9

い極ほど順位が高いわけだ。それによってつけた順位が第3表の○の中の数値である。たて15、よこ20の1位、2位は不動だが、よこ15、よこ25の順位は、中学と高校とで入れかわっている。高校生は比較的横長を好み、中学生は

どちらかといえば横長を好まない。全体を合計すれば、高校の場合と同じになり、よこ20と25が相並んで、よこ15を引きはなす結果となる。しかし、よこ3種の差は概してわずかであるから、有意差にならぬ差は無視し、黒玉の数だけをかぞえてみる。

黒玉のつきうる数は、各極とも、 $9 \times 2 = 18$ が限度であるから、18を分母と

第4表 第3表の結果を有意差だけに着眼してかぞえなおした表

	タ15	ヨ15	ヨ20	ヨ25
中学	4/18	0/18	0/18	0/18
高校	9/18	0/18	0/18	0/18
全体	13/18	0/18	0/18	1/18

し、黒玉の数を分子とすると、第5表となる。中学・高校を別にして見たときはたて15だけが、はっきり優位を保っており（その傾向は高校のほうが強い）、よこ3種はすべて同等である。全体を合算した時はじめて、よこ25がよこ15に対し、

一回だけ有意差をもって、まさっている事実が見出される。

除外した「山に生きる人」でも、中高とも、よこ15がよこ20に劣っている。「外国教科書」「数量景気」は、それぞれたて20、たて25の、よこ20との比較であるが、その開きぐあいからいって、たて20、たて25ともに、たて15に、まさるともおとらないと思われる。

以上を総合すると、今回の調査では、たてがきが3種類とも、よこがきの3種類に比べて速く読まれているといえる。よこ3種の間では、15が最も劣ることとはほぼ確かであるが、20と25との優劣はきめがたい。

次に、観点を変えて、記事の内容と読みの速さとの関係を見る。6個の記事の中で、内容がくだけているのは「山に生きる人」と「外国教科書」であり、いちばんかたいのは、「台風」であろう。それがそのまま、読みの速さに反映している。「山に生きる人」は設問に答えながら読み進んだため、おそくなっていると思われるが、同形式の「黒い羽根」に比べれば、ずっと速い。「外国教科書」は最も速く、「台風」は最もおそい。そして、その速い「外国教科書」では、たてがきとよこがきとの速さの差が最も開いており、概しておそい「台風」では、最も差が少なく、中高校別にすれば有意差が出ていない。このことを、すらすら読めるものには、たて・よこの差が強くあらわれ、注意して読まなければならないものには、あまり差があらわれなかったと解釈してみたいが、「山に生きる人」と「黒い羽根」との比較では、それは、あらわれていない。結局、はっきりしたことはわからない。

1・2 理解度の比較

読みの速さでは、たてがきが速かったが、理解度ではどうであろう。

1・21 設問をさしはさんだ記事の理解度 「黒い羽根」の設問は9個、「山に生

きる人」のは8個である。各設問に答えた者の数を分母とし、正答者の数を分子とした実数の表及び、それを比率化した正答率の表を第5表に示す。

表の(2)(4)の右端に総計の正答率を示したが、設問にはやさしいものも、むずかしいものもあるのだし、表記形式の種類によって、読み進んだ度合が違うのであるから、厳密に考えると、総計の正答率は、同列に比較することのできないものである。したがって、有意差を問題にするのは適当でないと考え、検定はしなかった。さすれば、この2問題には、理解度を確実に比較するきめ手はないわけである。このように、設問をはさみながら読ませ、時間を制限した方

第5表 「黒い羽根」「山に生きる人」の長記形式別理解度

(1) 「黒い羽根」各設問応答者正答者実数

		設問 種類(人数)										計
中 学	タ 15 (89)	66	58	63	66	37	23	12	6	3	334	
	≡ 15 (87)	88	87	77	68	48	26	15	8	4	421	
	≡ 20 (86)	62	59	53	49	22	5	4	2	0	256	
	≡ 25 (95)	85	85	70	56	24	10	7	4	0	341	
高 校	タ 15 (103)	59	54	50	53	26	11	3	0	0	256	
	≡ 15 (100)	86	84	59	56	30	14	6	2	0	337	
	≡ 20 (109)	75	69	60	59	29	15	9	2	0	318	
	≡ 25 (105)	94	93	78	61	35	17	9	3	1	391	
中 学	タ 15 (103)	83	75	87	92	65	51	32	21	11	517	
	≡ 15 (100)	103	103	93	94	80	57	38	25	13	606	
	≡ 20 (109)	81	81	80	74	55	27	19	10	2	429	
	≡ 25 (105)	100	100	95	78	62	34	20	13	5	507	
高 校	タ 15 (103)	91	70	85	87	64	40	24	9	7	477	
	≡ 15 (100)	109	108	102	90	73	44	24	14	8	572	
	≡ 20 (109)	79	76	77	85	54	29	23	12	9	444	
	≡ 25 (105)	105	105	102	95	63	42	28	17	9	566	

(2) 「黒い羽根」各設問正答率

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
中 学	タ 15	75.0	66.7	81.8	97.1	77.1	88.5	80.0	75.0	75.0	79.3
	≡ 15	72.9	69.4	75.7	87.5	91.7	50.0	57.1	50.0	—	75.1
	≡ 20	68.6	64.3	84.7	94.6	86.7	78.6	50.0	0	—	76.0
	≡ 25	79.8	74.2	76.9	96.7	82.9	88.2	100	66.7	0	81.3
高 校	タ 15	80.6	72.8	93.5	97.9	81.3	89.5	84.2	84.0	84.6	85.3
	≡ 15	81.0	81.0	84.2	94.9	88.7	79.4	95.0	76.7	40.0	84.6
	≡ 20	83.5	64.8	83.3	96.7	87.7	90.9	100	64.3	87.5	83.4
	≡ 25	75.2	72.4	75.5	89.5	85.7	69.0	82.1	70.6	100	78.4

(3) 「山に生きる人」各設問応答者正答者実数

		1	2	3	4	5	6	7	8	計
中学	タ 15(114)	93	109	103	58	70	65	47	15	560
		114	114	112	93	89	83	61	23	689
	≡ 15(116)	92	110	107	48	67	24	9	6	463
		116	115	112	96	82	43	23	10	597
高校	タ 15(146)	127	143	136	79	120	84	56	29	774
		146	146	141	135	129	104	78	34	913
	≡ 15(133)	112	131	132	80	95	56	21	8	635
		133	133	133	123	104	65	36	10	737
	タ 15(137)	123	135	132	83	103	69	39	24	708
		137	137	134	120	113	79	50	26	796
	≡ 15(137)	123	135	132	83	103	69	39	24	708
		137	137	134	120	113	79	50	26	796

(4) 「山に生きる人」各設問正答率

		1	2	3	4	5	6	7	8	計
中学	タ 15	81.5	95.6	92.0	62.3	78.7	77.4	72.0	65.2	81.3
	≡ 15	82.7	95.6	95.5	50.0	81.7	55.8	39.1	60.0	77.5
	≡ 20	70.1	96.8	89.2	54.7	79.0	56.1	30.0	46.7	73.1
高校	タ 15	87.0	97.9	96.5	58.5	93.0	80.7	71.8	85.3	84.7
	≡ 15	84.1	98.5	99.2	65.0	91.3	86.1	58.3	80.0	86.1
	≡ 20	89.7	97.8	98.5	69.1	91.1	87.3	78.0	92.3	88.9

法は、もともと、読み進んだ分量から読みの速さを測るのが主眼で、設問を入れたのは、ただ、読み方がでたらめになることを避けるための手段であり、理解度を正確に比べるための手段ではなかった。確実なきめ手がないのはやむを得ない結果である。しかし、総計の正答率をそのまま見比べれば、大体の様子はつかむことができる。両記事とも、中学でも高校でも、表現形式の種類による理解度の違いは、まずまず無いといってよからう。ただ、「黒い羽根」において、よこ25の正答率が中学では最も高く、高校では逆に最も低いことが目立つ。ところが、「山に生きる人」では、よこ20が、中学で最も低く、高校で最も高い。何だか皮肉なような結果だが、あまり深入りすべき数値ではないから無理な解釈はしない。

1・22 一読後の設問で測った理解度 「親潮」「台風」の2つの記事の理解度を見る。「親潮」は自由記入で解答させた。問Aの「親潮の特徴」は、①冷たいこ

と、②にごっていること、の二つ。あるいはこれに③栄養分が豊富なこと、を加えてもいい。問Bの「親潮と呼ぶわけ」は、その栄養分が多く、海産物を育てるからという意味のことを答えればいい。合計4点を与えて集計してから、これを10点満点に換算した結果の平均点を第6表に示す。無答も多いので、得点は低い。

第6表 「親潮」の表記形式別理解度

	中学		高校	
	人数	平均点	人数	平均点
タ 15	90	3.96	103	5.31
≡ 15	87	3.74	111	5.36
≡ 20	89	3.88	105	5.95
≡ 25	91	4.45	98	5.37

中学のよこ25がやや高いようであるが、有意差にはならない。そのほかは全く相接近している。

「台風」記事の間Aは、8点満点で集計したものを10点に換算した平均点を問Bは正答率を、あわせて第7表に示す。

第7表 「台風」の表記形式別理解度

	中学			高校		
	人数	A平均点	B正答率	人数	A平均点	B正答率
タ 15	92	5.07	88.0	103	4.96	91.2
≡ 15	83	4.86	79.5	100	5.26	90.0
≡ 20	93	4.81	90.3	108	5.08	90.7
≡ 25	89	4.98	80.9	106	5.08	90.5

問Aはむずかしすぎ、問Bはやさしすぎた観があるが、いずれにしても、注意すべき傾向は見られない。

次に「外国教科書」の間A、問B合計12点満点を10点満点に換算したものの平均点と、問Cの正答率を第8表に示す。

第8表 「外国教科書」の表記形式別理解度

	中学			高校		
	人数	A+B平均点	C正答率	人数	A+B平均点	C正答率
タ 20	172	6.06	56.4	212	7.08	64.5
≡ 20	185	5.90	48.6	205	7.37	63.1

ここにも、なんら注意すべき傾向はない。

第9表 「数量景気」の表記形式別理解度

	中学		高校	
	タ25	ヨ20	タ25	ヨ20
	186名	171名	206名	211名
A 1	17.7	10.5	51.9	39.8
2	47.8	49.7	50.5	53.5
B 1	21.0	27.5	37.4	45.9
2	20.4	22.8	37.8	44.1
C 1	59.6	63.1	81.0	80.0
2	55.9	55.0	76.7	75.3
E	57.5	57.9	58.7	69.2
D点	5.51	5.71	6.53	6.26

「数量景気」の設問A, B, C, Eの正答率と, Dの10点満点による平均点を第9表に示す。

下線を引いた数値はたて・よこ間で有意差の出たものの高いほうの値である。

(一本線は危険率5%で有意差のあることを示す。)

高校のA 1とEとがそれであるが片方はたてが高く, 片方はよこが高いというわけで互いに相殺し, まとまった傾向にはならない。

以上, 「黒い羽根」から「数量景気」まで, 通覧して, たて・よこの違い及びよこにおける字詰めの違いによって, 理解度に相違は生じていないことがわかる。読みの速さでは, たて15が明らかに速かったが, だからといって理解が浅いわけでも深いわけでもない。逆からいえば, 理解度は同じでも, 速度には違いがあるのが実態である。

1.3 文章のたて組み・よこ組みの読みの速さその他のいくつかの要因との関係

1.31 文章の読解力とたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係 文章を読解する力がすぐれているものと, 劣っているものとの間には, そのたて組み・よこ組みの読みの速さのタイプの上でなんらかの違いがみられないか。たとえば, 全般としては, よこ組みよりもたて組みのほうが速く読みとられるのだが, 読解力のすぐれているものは, 逆にたて組みよりもよこ組みの文章を速く読みとることができる, といったような傾向がないだろうか。もしあるとすれば, 中学・高校生のそれぞれにおいて, どの程度にそのことがいえるだろうか。われわれは, この関係をつきとめようと試みた。

まず, 被験者の読解力の程度を評価するために, 下に示すような問題を課した。もちろん, このようなテストだけで被験者の読解力を全面的に評価することはできないだろうが, その一面は探ることができると思われる。評点は, (㉠)(㉡)(イ)(㉢)(㉣), または(㉠)(㉡)(イ)(㉢)(㉣)と答えたものに満点の5点, (㉠)(イ)(㉢)(㉣)

次の七つの文章を適当な順序につなぐと、全体で一つづきの文章になります。解答欄に、その順序を書いてください。(記号で記入すること)

- (ア) 一つの社会がどれだけ進歩しているかを量る一番たしかな尺度は、労働生産性と、婦人の地位の二つである。労働生産性(一人一時間当たりの生産高)が高く、婦人の地位が向上しておればおるほど、その社会は進歩しており、その反対の場合は遅れた社会といえる。このことは歴史的にも裏証されており、世界の現状をみてもそうである。
- (イ) 「幼にして親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」というのが長い間日本の婦道であった。それは文字通り忍従の生活であった。今でも経済的な理由から、あるいは古い家族制度のくさびにおさえられ、いいたいことも言い得ないまま、おきらめの生活を余儀なくされている母親たちが多いのではなかろうか。
- (ウ) 子供の教育についての分科会や、夫婦や親子の関係を討議する分科会など、身近な問題を話合う教室はそれこそすしつめの盛況で活発な意見がかわされたのは、いかにも母親大会らしい風景であった。
- (エ) 相手に意見を押しつけず、相手の意見をうのみにせず、とことん納得するまで自分の頭で考えること、それでなければ意味はない。結論を急ぐよりも、納得できる結論を見いだすことが大切である。
- (オ) そうした環境の中からひとりひとりの母親が立ち上がって、子供の問題や生活の問題を自分の頭で考え、ひとりでは解決できないことをみんなで話しあおうというのは、社会を明るくする運動といえる。なぜなら母親たちのしあわせな社会こそ明るい社会といえるからだ。
- (カ) 「母親大会はアカだ」という自民党の神薙職もそれほどきき目はなかったとみえ、第五回母親大会は一万人以上の参加者が集まり、三日間にわたる大会を無事に終えた。
- (キ) それだけにこうした運動が、右にせよ左にせよ特定の勢力にあやつられ、出来合いの笛に合わせて踊らされるのでは意味がない。政治問題をおそれる必要はない。子供の問題や台所の問題が政治につながるのとは当たり前だ。だが複雑な問題を簡単に割り切ってしまうのは危険である。

解答欄

1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	

(件)に 4 点を与え、以下記入の程度に応じて 0 点までとした。しかし、結果は第10表のとおりで、すこぶる悪かった。

このうち、得点が 0～2 点のものを読解力が劣っているもの（読解力が下）、3～5 点のものを読解力があるもの（読解力が中・上）と一応認定し、そのおのおのについて、上述の問題のたて組み・よこ組みの読みの速さを求めると、第11表および第12表のようになった。

すなわち、読解力のあるもののたて組み・よこ組みの文章の読みの能力と劣っているもののそれとの間には目立った違いを認めることはできなかった。しかし、このテストの限りでの読解力のあるものは、中学生の場合、「黒い羽根」「親潮」「台風」の問題で、よこの方がたてより速く読まれているものがある。高校の場合は、「台風」のよこ20字、中・高合わせた全体では、「黒い羽根」「親潮」「台風」のそれぞれよこ15、よこ15、よこ20にその傾向が認められる。統計学的に有意の差があるものではないが、この点は注意すべきことであると思う。有意差の検定表にある○、●印は、この表をよこにみて、それぞれの項目が、それぞれの相対する項目に対して、○の場合は、優位に立つ有意差のあることを、●は劣位に立つ有意差のあることを意味する。この場合、○・●●は危険率1%で、○・●は同じく5%で有意差のあることを示す。以下同じ。

1.32 学科の好き・きらいの傾向とたて組み・よこ組みの速さとの関係 文章のたて組み・よこ組みの読みの能力は、特定の学科に対する好き・きらいの傾向となんらかの関係がないだろうか。たとえば、理科と国語とをとりあげてみる。現在、理科の教科書はすべてよこ組み、国語の教科書はほとんどすべてのページがたて組みになっている。だから理科の好きなものは、おのずとよこ組みに

第10表 読解力テストの得点分布

イ) 中学

読解力	下			中	上		無答	計
得点	0	1	2	3	4	5		
人数	77	125	86	47	12	2	8	357
	288			47	14		8	357

ロ) 高校

読解力	下			中	上		無答	計
得点	0	1	2	3	4	5		
人数	48	139	119	68	25	15	3	417
	306			68	40		3	417

第11表 読解力とたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係(一)

読解力のあるもの

イ) 中学 (61名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	14	367	22	561	18	538	14	599
≡ 15	12	467	16	484	16	540	12	501
≡ 20	16	363	22	509	10	590	16	603
≡ 25	18	374			15	568	19	461

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	15	711	*
	≡ 20	16	590	
B	≡ 20	18	669	
	≡ 20	11	619	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	18	562	
	≡ 20	12	545	
B	≡ 25	17	584	**
	≡ 20	14	471	

(* 危険率5% で有意)
(** 危険率1% で有意)

有意差の検定

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15	●	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○
≡ 15	○	●	○	○	●	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
≡ 20	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—
≡ 25	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	●	—	●

ロ) 高校 (108名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	25	479	36	603	24	560	29	526
≡ 15	31	431	33	546	24	492	27	493
≡ 20	26	449	38	554	34	530	27	536
≡ 25	26	429			24	546	25	487

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	31	675	**
	≡ 20	21	578	
B	タ 20	27	694	*
	≡ 20	28	598	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	23	536	**
	≡ 20	20	518	
B	タ 25	31	615	
	≡ 20	30	520	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20		タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		—	—	—		○	○	○		○	—	—		—	—	—
≡ 15	—		—	—	●●		—		●		—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	●	—			—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—						—	—	—	—	—	—	—	—

読解力の劣っているもの

イ) 中学 (202名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	49	363	61	457	50	530	54	478
≡ 15	48	329	66	424	41	514	48	453
≡ 20	50	332	73	428	49	496	52	449
≡ 25	52	323			55	517	46	453

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	52	611	*
	≡ 20	46	513	
B	タ 20	47	608	
	≡ 20	53	563	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	58	536	**
	≡ 20	47	489	
B	タ 25	47	512	
	≡ 20	39	483	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

ロ) 高校 (187名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	51	454	68	546	45	559	46	467
≡ 15	44	397	62	482	50	493	48	463
≡ 20	50	407	57	493	45	499	50	463
≡ 25	42	443			46	504	43	463

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	43	605	
	≡ 20	52	553	
B	タ 20	40	613	*
	≡ 20	47	529	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	47	517	**
	≡ 20	50	470	
B	タ 25	40	523	
	≡ 20	43	496	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	
タ 15		○	—	—		○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○		—		—		—		—
≡ 15		●	—	—		● ●		—		● ●		—		—		—
≡ 20		—	—	—		● ●		—		●		—		—		—
≡ 25		—	—	—						●		—		—		—

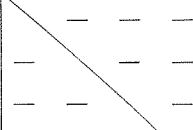
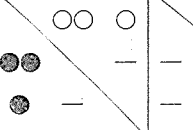
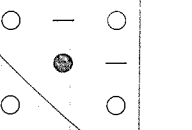
第12表 読解力とたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係(二)

読解力のあるもの(全体)(169名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	39	439	58	587	42	576	43	548
≡ 15	43	441	59	517	40	588	39	487
≡ 20	42	416	60	538	44	550	43	560
≡ 25	44	406			39	554	44	481

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	46	687	**
	≡ 20	37	578	
B	タ 20	45	684	*
	≡ 20	39	601	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	41	547	
	≡ 20	32	528	
B	タ 25	48	603	**
	≡ 20	44	503	

	黒い羽根				山に生きる人			親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 35	タ 15	≡ 15	≡ 20	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15															
≡ 15	—	—	—		●●●		—	—	—	—		●		●	—
≡ 20	—	—	—		●	—		—	—	—		—	○		○
≡ 25	—	—	—					—	—	—		●	—	●	

読解力の劣っているもの（全体）（389名）

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	100	410	129	504	95	541	100	473
≡ 15	92	362	128	452	91	502	96	457
≡ 20	100	369	130	456	94	498	102	456
≡ 25	94	377			101	511	89	457

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	95	608	**
	≡ 20	98	533	
B	タ 20	87	611	**
	≡ 20	100	547	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	105	527	**
	≡ 20	97	479	
B	タ 25	87	517	
	≡ 20	82	490	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20		タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	○	—		○ ○ ○ ○				○	○	—		—	—	—
≡ 15	● ●		—	—	● ●		—		●		—	—	—	—	—	—
≡ 20	●	—		—	● ●	—			●	—		—	—	—		—
≡ 25	—	—	—						—	—	—		—	—	—	

組まれている理科の教科書や参考書その他の理科的な文章に親しむ機会が多いだろうし、国語の好きなものは、自然とたて組みの国語教科書その他の国語科的な文章に親しむ機会が多いだろうと考えられる。したがって、両者の間には、たて組み・よこ組みの、特に理科的な内容をもったたて組み・よこ組みの文章の読みのタイプには一般的にいったんなんらかの違いがあるのではなかろうか。われわれは、このような仮説をたてて、その間の関係をつきとめようとした。結果は以下に述べるとおりで、その間にはっきりしたとはいいきれないにせよ、かなりの傾向を認めることができた。

まず、学科に対する好き・きらいの傾向を、付帯調査2の中の次のような質問紙によって確かめ、全被験者の中から、①理科が好きで、国語がきらいなグループ、および、②国語が好きで、理科がきらいなグループをぬき出した。(調査の対象になる被験者数を確保するため、ここで、好きなものとは、それぞれの教科に1, 2, 3, 4のいずれかを記入したもの、きらいなものとは、6, 7, 8のいずれかを記入したものを指す。)そして、おのおののグループについて読みの速さを求めると、第13表のようになる。

次の学科について、あなたの好きな順に番号を記入してください。

☐ 社会	☐ 数学	☐ 国語	☐ 英語	☐ 理科
☐ 図工	☐ 音楽	☐ 体育		

理科が好きで、国語がきらいなもの、国語が好きで、理科がきらいなものも同様に、一般的にいったんたて組みの文章を速く読むようである。しかし有意検定を行なってみると、国語が好きで理科がきらいなグループの方が、たて組みの文章を速く読む傾向がうかがえる。そこで、前項の場合と同様に、中学・高校を合わせた全体についてみると、第14表のようになり、統計学的に有意の差のあるものが、国語が好きで理科のきらいなグループの方により多くなって、そのちがいがかなりはっきりしている。

1.33 新聞の科学記事への接近の程度とたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係
特定の教科に対する好き・きらい、それから結果されるであろうたて組み・よこ組みの文章への接近(慣れ)の程度に関連して、新聞の科学記事に対する接

第13表 学科の好き・きらいとたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係(一)

理科が好き・国語がきらい

イ) 中学 (81名)

		黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
		人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ	15	15	362	27	464	21	527	22	549
≡	15	20	337	21	444	10	486	15	415
≡	20	40	340	32	449	21	507	25	482
≡	25	4	300			28	541	17	492

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	17	621	
	≡ 20	17	561	
B	タ 20	20	635	
	≡ 20	23	616	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	20	601	**
	≡ 20	17	479	
B	タ 25	17	516	
	≡ 20	22	532	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		—	—	—		—	—			—	—	—	○ ○	—	—	
≡ 15	—		—	—	—		—		—		—	—	● ● ●	—	—	
≡ 20	—	—		—	—	—			—	—		—	—	—		—
≡ 25	—	—	—						—	—	—		—	—	—	

ロ) 高校 (89名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	18	474	26	600	26	542	14	522
≡ 15	24	417	33	542	13	527	26	448
≡ 20	21	389	29	532	26	551	20	463
≡ 25	26	439			22	515	29	477

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	24	672	
	≡ 20	21	603	
B	タ 20	16	622	
	≡ 20	24	590	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	21	569	**
	≡ 20	20	470	
B	タ 25	20	540	
	≡ 20	24	528	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○	—	—				○			—	—		○	—	—
≡ 15	●	—		—	—			—			—	—	●	—	—	—
≡ 20	—	—		—	●	—		—			—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—		—	—	—	—			—	—	—	—	—	—

国語が好き・理科がきらい

イ) 中学(107名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	27	384	31	483	31	541	35	481
≡ 15	22	301	39	448	29	480	23	466
≡ 20	26	341	37	443	20	505	22	444
≡ 25	32	338			25	494	27	490

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	27	662	*
	≡ 20	24	564	
B	タ 20	28	574	
	≡ 20	28	538	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	31	545	**
	≡ 20	21	482	
B	タ 25	24	531	**
	≡ 20	27	477	

	黒い羽根				山に生きる人			親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	—	—		—	—		○	—	—		—	—	—
≡ 15	● ●		—	—	—		—	●		—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—					—	—	—	—	—	—	—	

ロ) 高校(147名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	37	460	51	535	30	530	43	481
≡ 15	36	378	42	489	45	486	33	470
≡ 20	40	415	53	518	35	486	35	475
≡ 25	34	426			37	513	36	460

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	33	601	
	≡ 20	35	572	
B	タ 20	37	619	*
	≡ 20	40	554	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	28	531	*
	≡ 20	45	490	
B	タ 25	34	539	**
	≡ 20	36	475	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○	○	—		○	—			○	○	—		—	—	—
≡ 15	●●		—	—	●		—		●		—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	—	—			●	—		—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—						—	—	—		—	—	—	—

第14表 学科の好ききらいとたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係(二)

理科が好き・国語がきらい 全体(170名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	33	423	53	531	47	535	36	538
≡ 15	44	380	54	489	23	508	41	435
≡ 20	61	357	61	488	47	530	45	473
≡ 25	30	420			50	519	46	486

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	41	648	*
	≡ 20	38	580	
B	タ 20	36	629	
	≡ 20	47	602	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	41	569	**
	≡ 20	37	474	
B	タ 25	37	529	
	≡ 20	46	530	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15	—	○	—		—	—	—		—	—	—		○	○	○	—
≡ 15	—	—	—		—	—	—		—	—	—		●●●	—	—	●
≡ 20	●	—		●	—	—			—	—	—		●	—	—	—
≡ 25	—	—	○						—	—	—		—	○	—	

国語が好き・理科がきらい 全体(254名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	64	430	82	524	61	540	78	481
≡ 15	58	349	81	470	74	486	56	468
≡ 20	66	386	90	487	55	493	57	462
≡ 25	66	373			62	505	63	472

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	60	627	**
	≡ 20	59	555	
B	タ 20	65	599	*
	≡ 20	68	543	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	59	538	**
	≡ 20	66	488	
B	タ 25	58	536	**
	≡ 20	63	466	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	—	○		○	—			○ ○	○	—		—	—	—
≡ 15	● ●		—	—	●		—		● ●		—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	—	—			●	—		—	—	—	—	—
≡ 25	●	—	—						—	—	—		—	—	—	—

第15表 科学記事への接近の程度とたて組み・よこ組みの読みとの関係

いつも読む全体（計85名）

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	25	667	29	565	18	584	26	576
≡ 15	16	363	25	471	27	558	27	479
≡ 20	18	385	31	527	26	554	13	585
≡ 25	25	393			14	604	19	472

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	21	686	*
	≡ 20	29	590	
B	タ 20	23	703	
	≡ 20	12	694	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	25	601	*
	≡ 20	14	515	
B	タ 25	29	596	
	≡ 20	16	555	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	○ ○	○ ○		○ ○	—			—	—	—		○	—	○
≡ 15	● ●		—	—	● ●		—		—	—	—		●		●	—
≡ 20	● ●	—		—	—	—			—	—	—		—	○		○
≡ 25	● ●	—	—						—	—	—		●	—	●	

読まない (79名)

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	20	370	32	494	25	524	12	491
≡ 15	14	391	23	501	18	451	24	526
≡ 20	19	325	24	442	19	497	16	466
≡ 25	26	387			14	467	21	482

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	21	587	
	≡ 20	21	568	
B	タ 20	21	518	
	≡ 20	15	496	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	12	491	
	≡ 20	16	466	
B	タ 25	24	526	
	≡ 20	21	482	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		—	—	—		—	—			○	—	—		—	—	—
≡ 15	—		—	—	—		—		●	—	—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	—	—			—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—						—	—	—	—	—	—	—	—

近(慣れ)の程度も問題になる。理科学的な内容をもった教科書その他の文章がおしなべてよこ組みであるように、今日、それらと同じような内容を取り扱った新聞の科学欄もよこ組みで組まれることが多い。現にわれわれの、この調査の問題文にもとをただせば、よこ組みに組まれた現実の新聞の科学欄から借用したものが二、三ある。したがって、これら新聞の科学記事を好んでいつも読むものと、少しも読まないものとの間には、そのたて組み・よこ組みの読みのタイプになんらかの違いがありはしないか。

われわれは、このように考え、質問紙法によって、全被験者を、①新聞の科学記事をいつも読むもの、②ときどき読むもの、③読まないもの、に分類し、そのうち①と③のグループについてたて組み・よこ組みの読みの速さを求めた。だが、結果は、第15表に示すように、われわれの予想とは逆に、これらよこ組みに組まれることの多い科学記事を常によく読むものが、そうでないものより

	中学	高校	計
いつも読む	40	45	85
読まない	38	41	79

りもたて組みの読みが速いということが判明した。これは、次項に述べることと何か関係があるように推測される。なお科学記事だけではなく、新聞の記事全体に対する接近の程度

とたて組み・よこ組みの読みの関係をみたが、めだった結果はでなかった。

1・34 読書の好き・きらい(読書の量)とたて組み・よこ組みの読みの速さとの関係
それでは、特定の教科に対する好き・きらいや、よこ組みに組まれることが多い新聞の科学記事に対する接近(慣れ)の程度の問題とは別に、いっばんに読書に対する好き・きらい、したがってたて組み・よこ組みのいずれを問わず、いっばんに文章に対する接近(読書量)の程度とはどのような関係になるのだろうか。付帯調査2の中の次の質問の結果は、第16表のようになった。

あなたは参考書以外の本を読むことが好きですか。きらいですか。あてはまるものに○印を記入してください。

1. 好きだ 2. きらいだ 3. どちらともいえない。

そこで、これを二つに分け、A、読書が好き B、きらい・どちらともいえない のおのおののグループについて、前と同様読みの速さを調べてみると、第17表のようになり、両者の間には、そのたて組み・よこ組みの文章の読みの

第17表 読書の好き・きらいと、たて組み・よこ組みの読みの速さとの関係
読書が好き 中学

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	50	401	60	612	48	544	52	525
≡ 15	49	348	69	458	48	512	45	468
≡ 20	49	352	66	453	50	542	47	532
≡ 25	44	346			47	544	52	472

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	46	656	**
	≡ 20	47	549	
B	タ 20	53	658	*
	≡ 20	49	594	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	59	565	**
	≡ 20	40	488	
B	タ 25	48	539	
	≡ 20	47	506	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	○	○		○ ○	○ ○			—	—	—		○	—	○
≡ 15	● ●		—	—	● ●		—	—	—	—	—	—	●		●	—
≡ 20	●	—		—	● ●	—		—	—	—	—	—	—	○		○
≡ 25	●	—	—						—	—	—	—	●	—	●	

読書が好き 高校

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	61	495	90	571	66	551	69	524
≡ 15	65	416	89	512	66	508	61	469
≡ 20	66	427	87	537	60	514	68	502
≡ 25	74	440			64	537	68	467

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	64	652	**
	≡ 20	65	564	
B	タ 20	64	663	**
	≡ 20	65	585	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	58	547	**
	≡ 20	64	498	
B	タ 25	76	543	*
	≡ 20	63	502	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20		タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	○ ○	○ ○		○ ○	○			○	—	—		○ ○	—	○ ○
≡ 15	● ●		—	—	● ●		—		●		—	—	● ●		—	—
≡ 20	● ●		—	—	●		—		—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	● ●		—	—					—	—	—	—	● ●	—	—	—

読書がきらい・どちらともいえない 中学

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	33	385	42	447	35	552	32	471
≡ 15	28	295	41	381	31	499	28	433
≡ 20	30	331	52	452	31	471	40	440
≡ 25	44	336			35	517	34	474

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	28	596	*
	≡ 20	38	517	
B	タ 20	30	611	
	≡ 20	37	545	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	34	517	
	≡ 20	33	502	
B	タ 25	31	519	
	≡ 20	31	489	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20		タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		○ ○	—	—		○	—			—	○ ○	—		—	—	—
≡ 15	● ●		—	—	●		—		—	—	—	—	—	—	—	—
≡ 20	—	—		—	—	—			● ●	—	—	—	—	—	—	—
≡ 25	—	—	—						—	—	—		—	—	—	

読書がきらい・どちらともいえない 高校

	黒い羽根		山に生きる人		親潮		台風	
	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数	人数	読字数
タ 15	35	414	45	556	29	575	28	450
≡ 15	26	385	37	493	33	481	32	467
≡ 20	34	406	42	498	40	492	31	448
≡ 25	29	390			22	491	33	468

		外国教科書		
		人数	読字数	有意差
A	タ 20	34	614	
	≡ 20	31	577	
B	タ 20	33	594	
	≡ 20	26	569	

		数量景気		
		人数	読字数	有意差
A	タ 25	30	507	*
	≡ 20	32	465	
B	タ 25	22	565	*
	≡ 20	33	492	

	黒い羽根				山に生きる人				親潮				台風			
	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25	タ 15	≡ 15	≡ 20	≡ 25
タ 15		—	—	—		○	○	○		○	○	○		—	—	—
≡ 15	—		—	—	●	●		—	●		—	—	—		—	—
≡ 20	—	—		—	●		—		●	—		—	—	—		—
≡ 25	—	—	—						●	—	—		—	—	—	

タイプに顕著な開きがみられた。すなわち、読書が好きだと答えたグループは、そうでないグループよりも有意の差をもつてたて組みの文章を速く読んでいるものが多い。読書の好き・きらい、したがって活字や文章に対する接近（慣れ）の程度の違いが、結局文章のたて組み・よ

第18表

	中学	高校
好き	197	266
きらい	9	11
どちらともいえない	126	113
無答	25	27
計	357	417

こ組みの読みのタイプに決定的な影響を及ぼしているようにみえる。われわれの周囲には読材料としてたて組みの文章が圧倒的に多い。そしてそれを必然的に読まねばならぬ。文章のたて組み・よこ組みの読みやすさの問題は、読書環境のもつこういう条件に結局還元されるのであろう。

2. 文章構造—抽象・具体の提出順序—の違いによって、理解度に違いが生じたか
前節で、「外国教科書」は、表記形式の種類のほか、内容上の変化があるといった。その変化は何か、変化が理解度に影響を与えたかどうかを見る。

「外国教科書」の4種類は、次のように構成されている。この文章は、外国の教科書に現在の日本の姿が正しく紹介されていないから、何とかしなければ

表記形式 叙述順序	た20	≒20
抽象—具体	a	b
具体—抽象	c	d

ならないということを述べたものであるが、aとcは、まず概括して、あとから具体事例を述べる形式（「抽—具」と略称する）であり、bとdは、まず具体事例を出して、あとでくる形式（「具—抽」と略称する）である。前節で、表記形式たて20よこ20の区分による、読みの速さや理解度の数値を示したのは、aとb、cとdを、それぞれ合計した結果であった。今度はaとc、bとdを、それぞれ合計して叙述順序の違いによって理解度に差が生じているかどうかを見る。問A、問Bの合計得点平均と、問Cの正答率とを第19表に示す。ここでは、a、b、c、d各単独の結果と、a+c、b+dの結果とを、あわせ示す。問Aは文章のテーマについて、問Bは具体事例についての設問であり問Cは一個の細目の記憶調べであるから、理解度のきめ手は、CよりもA+Bにある。A+Bの理解は、中学においては、有意差をもってb+dのほうが高い。（表内の下線2本は、危険率1%の有意差で高いほうの値）。高

第19表 「外国教科書」の内容別理解度

		a (タ抽一具)	b (タ具一抽)	c (ヨ抽一具)	d (ヨ具一抽)	a + c (抽一具)	b + d (具一抽)
中学	人数	82	90	94	91	176	181
	A + B 平均点	5.62	6.47	5.73	6.30	5.56	<u>6.38</u>
	C 正答率	68.3	51.1	48.9	45.0	55.1	49.7
高校	人数	109	103	104	101	213	204
	A + B 平均点	7.22	6.94	7.44	7.33	7.33	7.13
	C 正答率	75.0	53.4	64.4	61.7	<u>69.8</u>	57.5

校ではきわめて接近している。このことだけからいえば、相対的に言語能力の低い中学生にとっては、この場合、具体事例からはいっていく書き方のほうが理解しやすかったということになる。

E. おもな結果の要約

以上の調査結果の要点を次に再録する。

1. たてがきとよこがきとでは、よこがきの字詰めのかんにかかわらず、たてがきのほうが読了が速かった。
2. よこがきの字詰めについては、20字と25字との優劣はきめがたいが、15字は大体において、いつもおそく読まれた。
3. 内容的にくだけているもの、すなわち、すらすら読める文章ほど、たてよこの読書速度の差が開き（たてのほうが速い）、固いもの、すなわち、丁寧に読む必要のある文章では、その差がせばまる傾向のあることが観察された。
4. たてのほうがよこよりも速く、また、よこの中でも15字詰めが遅く読まれたが、理解度はかわらなかった。逆にいうと、理解度は同じでも読了速度には違いがあった。
5. たてとよこの読書速度の開きは、被験者の読解力（この調査でのテストの限りでの）の高い低いにほとんどかわりがないと観察された。ただし、読解力の高いものでは、よこのほうがたてよりも速く読まれている場合のあることが注意された。
6. はっきり断言することはできないが、たてとよこの読書速度の開きは

学科に対する好ききらいの違いに関係があるらしい。すなわち、国語科が好きで、理科がきらいなものは、理科が好きで、国語科がきらいなものよりたて組みの文章を速く読むらしいことが観察された。

7. 読書（ものを読むこと）のすきなもののほど、たてよこの差が開く（たてが速い）。新聞の科学記事（よこ組みが多い）をよく読む生徒においても同じ結果が得られた。

8. 文章構造としては、具体的事例から述べて、あとで抽象的にしめくくる書き方の文章のほうが、その逆の構造の文章よりも、中学生には、理解しやすいようであるが、高校生ではその傾向はなかった。

F. 結果の解釈と反省

われわれの調査に関する限り、大体において、たてがきのほうがよこがきよりも速く読まれている。しかも、理解度にも差はないし、他のいろいろな要因との相関からみても、おおむねたてのほうが速い。

すなわち、昨33年度の結果とは反対に、従来行なわれた、たてよこの優劣の比較の調査研究の結果とほぼ同じことになったわけである。現状における読書環境では、たてがきのものがよこがきよりもはるかに多いわけで、それに対する順応（慣れ）の度合いがこの種の調査結果に反映するのだと解釈されてきたし、われわれもこの調査結果については、そのように解釈すべきものと考えている。言い換えれば、若い世代でも、まだよこがきには充分慣れきっていないということになる。

ところで、だからといって、一般にたてがきのほうがよこがきよりもすぐれているとか、日本語の文章はよこがきには適さないとかいう結論を下すのは、性急に過ぎる、とわれわれは考える。

現在一般に用いられている活字は、たて組み用にデザインされたものであって、それをそのままよこ組みにしたのでは、たてよこの優劣の比較のための条件を整えたことにはならない。よこ組みにとっては、明らかに不利な条件となる。しかも、いまの新聞の活字、とくにこの調査でテスト問題の本文の印刷に用いた活字は偏平のもの（よこ8ポ、たて6.4ポ）である。この点も、よこが

きには不利な条件となっているのかもしれない。

少なくとも、今の新聞活字をそのまま使って、よこ組みの紙面を作ることはあまり有利でないということが言える。新聞の紙面によこ組みを実施するとすれば、少なくとも、この点の改良を心がけることが必要であろう。（永野）

明治時代語の調査研究

——明治初期の学術・論説的文献の用語調査——

A 目 標

近代語研究室は、これまでに明治10～11年の『郵便報知新聞』を資料とした用語調査を行ない、報告書『明治初期の新聞の用語』を刊行した（昭和34年3月）。

われわれは、つづいて明治1～20年に刊行された22種の学術・論説的な文献にあらわれた用語の調査にとりかかり、一方ではいわゆる文化的用語の発生から定着までの一時期の姿をとらえることをこころみ、他方では『郵便報知新聞』以外の資料から、この時期のかたい文体に使われた用語を追加登録しようとした。また、これらの作業を通じて、用語採集における二つの方法の特色を実地にたしかめようとした。

この調査は昭和33年度に始まり、昭和34年度に終わった。

以下、はじめに調査のあらましを述べ、順次項目を追って報告する。

B 担当者

山田 巖、見坊豪紀、広浜文雄、進藤咲子(以上所員)、石田秋子、中曾根仁(以上補助員)。

C あらまし

この調査は、明治1～20年に刊行された学術・論説的文献22種（55冊）を資料として用語調査を行なったものである。書名・刊行年月などは表2を見られたい。調査対象は各資料の本文で、延べ約5千3百ページ、語数は助詞・助動詞を除いて約45万語と推定される。

この中から客観法および主観法により各1万5千語、計3万語について調査したところ、異なり語数15,436を得た(表1参照)。客観法、主観法の内容については方法の2に説明するが、かんたんに言うならば、客観法とは、あらわれ

表1 得た異なり語数		た用語のすべてを、重複した分も含めて洩れなく採集する
客観法	4,843	方法である。また、主観法とは、あらわれた用語のな
主観法	11,847	かから、目ばしいものを主観的に、なるべく重複しない
計	15,436 ^(a)	ように採集する方法である。
主観/客観	2.44/1	

(1)重複分を除く 二つの採集方法で同じ分量のカードをとったところ、主観法による異なり語数の採集能率は、客観法にくらべて約2倍半高いことがわかった。

この調査では多種類の文献を資料に使ったので、客観法における語の使用度数と出典数(使用範囲)との相関関係をつきとめることができたのは、収穫であった。一例をあげれば、使用度数の高い用語23について、使用範囲(出典数)に対する使用度数の相関係数を求めたところ、 $r=0.83$ のきわめて高い数字を得た。

われわれは、すでに『郵便報知新聞』について、客観法で異なり語数22,272を得ている(人名・地名・数詞を除く)。主観法による補充採集の結果、さらに8,524語を追加した。計30,796語である。このたびの調査では、あらたに9,890語を追加したので、けっきょく全部で40,656語の用語がこれまでに登録されたことになる。来年度は、小説、小新聞などの用語がこれらに追加されることになる。

最後に、客観法と主観法との特色をあげてみよう。

- 1 時間や手間の点では、主観法の方が手軽である。
- 2 採集した延べ語数に対して新たな見出し語を得る歩留まりは、圧倒的に主観法がまさる。
- 3 数量的処理・推定にかけては、客観法がまさる。
- 4 以上のことから、用語採集を能率的に行なうためには、リプリント方式による適当な規模の客観的用語採集を土台とし、これに主観的採集を積み上げることが効果的ではないかと思う。

以上が、この調査のあらましである。

さて、この調査の必要性について一言しよう。

今日行なわれているいわゆる文化的用語の地盤は、主としてこの時期に形成されたと考えられる。もちろん、医学・薬学・物理・化学・天文などの技術的領域では、蘭学などを通じて早くからもろもろの訳語が流行し、また定着した

のであるが、明治維新とともに、法律・政治・経済・哲学・教育・美学その他学術・文物・制度の広い領域にわたって、新しい用語が数多くあらわれては消えて行った。その中の限られた少数のものが今日に至るまで使用されているのである。われわれの調査によって、この時代に新しく発生し、交替・変遷し、消滅・定着した用語の初期の様相をとらえ、明治時代語が現代語にどのように移行してきたかを明らかにするならば、現代標準語の確立に対して歴史的な面から寄与するところがあるだろう。これが、この調査の必要性の第一である。

第二に、過去の利用語を記録に残すことの必要性である。これは第一の必要性に照らしても当然のことであるが、特に明治初期の様相が十分には解明されていない今日において、たとえわずかでも、あらわれた語を記録に残すことの意義は小さくないと思われる。ただし、残念ながら紙面の関係で、この報告では語彙表の全体を発表することはできなかった。

第三に、用語採集における二つのやり方を比較してみたかったことである。用語採集でこれまでにとられてきたやり方はリプリント方式による客観的採集である。これに対して、調査対象にあらわれた用語のうちから、なんらかの観点で注目すべき用語だけを主観的に採集する方法が考えられる。われわれはすでに、『郵便報知新聞』の補充採集でこの主観法をころもみたが、同じ調査対象について、ほぼ同じ枚数のカードをとりながら二つのやり方を比較することは、今後のための基礎データとして十分参考になるであろう。この必要性は、ある意味では、この調査のねらいとも言うべきものである。

以上三つの必要性にもとづいて、この調査は企画・実施された。

D 資 料

資料は、すべて原物によることをたてまえとし、かつ、著者・内容の点でなるべく広く行きわたるように収集した。収集した資料は次の22種（55冊）である。各資料についての簡単な解説を P.146 以下にあげたから、参照されたい。

表2 資料一覧表

ブロック No.	資料 No.	編著者	書名	冊数	刊年・月 (免許年・月)	備考
a 日本人の作品の部						
1	(1)	山田 俊蔵 大角豊次郎	近世事情 (全三編)	7	明6.9~7.8	
2	(2)	加藤 弘之	国体新論	1	明 8	
	(3)	高橋 易直(編)	明治文抄	3	(明10.8)	再録物
	(4)	高橋 易直(編)	続明治文抄	4	(明10.12)	再録物
	(5)	福沢 諭吉	福沢文集	2	(明11.1)	
3	(6)	田口 卯吉	日本開化小史	6	(明11.2)	
	(7)	大月 曜四郎	日本暗射地図教授法	1	明11.7	
	(8)	渡辺修次郎	明治開化史	1	明13.1	
4	(9)	福沢 諭吉	民間経済録	2	(明10.12)	
	(10)	福沢 諭吉	時事小言	1	明14.9	
	(11)		東京学士会院雑誌 (明治15年度合本)	1	明15	翻訳の部分はブ ロック8へ
5	(12)	藤田 茂吉	文明東漸史	1	明17.9	内外編合冊
	(13)	青田 節	内地雑居之準備	1	明19.11	
	(14)	藤田 武城(編)	文明実地演説(前)	1	明20.3	再録物「です・ ます体」の部分を除く
b 翻訳作品の部						
6	(15)	バロンマルテン ス 巴倫馬児顔(独) 福地源一郎	外国交際公法	2	明2.10	
	(16)	フランシス・イン グランド 英蘭志須英蘭士(英) 小幡篤次郎	英氏経済論	3	明 4	全8冊のうち
	(17)	チェンバース(英) 前田 利器	百科商業編 全書	2	明7.6~10.2	
	(18)	スウェーデン スト 斯篤宇(英) 島田 脩海	消毒新論	1	明7.10	
7	(19)	ミ ル 弥 児(英) 董 重孝 鈴木 重孝	弥児経済論(初編)	8	明8.11~15.12	
8	(20)	M・デュ チャテ レト(仏) 刀根宗二郎	娼婦論	2	明10.9	
	(21)	エ ル ム 埃・哥烈曼 平塚 平	夫婦衛生論	1	明15.9	
	(22)	アル フェ ース・ト ッド(英) 尾崎 行雄	英国議院政治論 (首巻)	1	明15.10	全10冊のうち
	(11)		東京学士会院雑誌 (明治15年度合本)	1	明15	日本人の作品は、 ブロック4へ

E 方 法

1 資料の区分 資料は、まず大きく日本人の作品と翻訳作品（外国人の作品）とに分け、次に全体を八つのブロックに分けた。日本人の作品5ブロック14点、翻訳作品3ブロック8点となる。各ブロック内の文献は刊行年代順になっている。

資料を日本人の作品と翻訳作品とに分けたのは、用語の幅や性格の上で両者に差のあることが予想されたからであり、全体を八つのブロックに分けたのは各ブロックの採集量なるべく等しくすることによって、延べ語数・異なり語数などの統計的処理を便利にしようと考えたからである。

2 用語の採集法 用語の採集には、客観法（リプリント方式による）と主観法を併用した。

客観法

ページを単位に、1/30の比率でサンプルを無作為に抽出し、サンプルに当たったページの全文をカードに謄写印刷し、サンプルにあらわれた限りのすべての語を採集した。客観法で当初採集した語数は14,980であった。母集団の推定延べ語数は、助詞・助動詞を除き、約45万である。なお、リプリント方式によるサンプリング採集を客観法と呼ぶのは、次にのべる主観法と対比させるためである。

主観法

使用度数の低いと思われる用語を主観的に抜きだして採集するやり方である。いったい語彙のサンプリング採集では、母集団に多くあらわれる用語は比較的あやまりなく採集されるが、母集団にあまりあらわれない用語は、ともすると採集洩れになる。特に、母集団で延べ数回しか使われない用語の相当の部分はサンプリング採集では到底採集しきれない。もとより、サンプリング採集はすべての用語を採集しつくすことを目的とするものではないが、しかし、使用度数の少ない用語を重点的にひろい上げということは、用語のひろがりと変異の様相を見る上に意味があるので、この調査では、使用される度合の少なそうな特定の用語——たとえば、難語、俗語、方言、各種専門用語、職名、施

表3 客観法による採集数（ブロック別）

区分	ブロック	延べ採集枚数					そのブロック 内での異なり 語数
		1 当初 枚数	2 人名	3 地名	4 数詞	5 正味枚数 =1-(2+3+4)	
日本人	1	1886	74	126	101	1585	871
	2	1878	11	19	18	1830	920
	3	2236	72	102	62	2000	1129
	4	2086	15	25	85	1961	974
	5	2054	29	83	27	1915	1106
小計		10140	201	355	233	9291	
翻訳	6	1838	3	11	60	1764	822
	7	1408	3	15	32	1358	683
	8	1594	32	16	26	1520	843
小計		4840	38	42	118	4642	
合計		14980	239	397	411	13933	

表4 主観法による採集数（ブロック別）

区分	ブロック	延べ採集枚数						そのブロック 内での異なり 語数
		1 当初 枚数	2 人名	3 地名	4 数詞	5 その他	6 正味枚数 =1-(2+3+4+5)	
日本人	1	2094	42	37	20	48	1947	1789
	2	2460	13	9	30	10	2398	2258
	3	2198	40	52	19	4	2083	1989
	4	1648	13	16	27	1	1591	1540
	5	1910	15	7	24	0	1864	1784
小計		10310	123	121	120	63	9883	
翻訳	6	1487	4	13	24	0	1446	1363
	7	1048	3	6	16	0	1023	976
	8	1447	19	8	15	2	1403	1340
小計		3982	26	27	55	2	3872	
合計		14292	149	148	175	65	13755	

設など——に着目して、これらを主観的にひろい上げることにしたのである。主観法の場合は、なるべく同じ用語を重複して採集しないように気をつけた。

主観法もページを単位に、1/4の比率でサンプルを抽出し、サンプルに当たったページの全体から必要な用語だけをえらんで拾い上げた。従って、抽出ページ数は、客観法の7倍以上あったにもかかわらず、当初採集した語数は14,292であった。

なお、主観法の対象は、資料の本文のほかに、序文、後付けの広告なども若干ふくんでいること、抽出ページ数が、客観法の7倍以上なので、ブロックごと、出典ごとの異なり語数が客観法のそれよりも当然多くなる場合があることをことわっておく。

以上の内訳を表示すると、表3、表4のようになる。

F 結 果

1 語彙表の作成

1.1 五十音順語彙表第一表(全体) 主観法・客観法を含む採集した限りのすべての用語を語彙表にまとめた(人名・地名・数詞を除く)。語彙表は、書名別の出典がわかるように作り、編集物などは作者名もわかるようにしてある。見本として表5に示したのは、アの部の初めの一部である。印刷の便宜上、もとの体裁を多少変えた。

表の説明(左側の欄外から右側の欄外に至る)

(1) ABCなどの記号は、『郵便報知新聞』語彙表(『明治初期の新聞の用語』所収)との対照の結果を示す。

A……使用度数10以上の表(略称A表)にあるもの。

B……使用度数9～1の表(略称B表)にあるもの。

C……追加語彙表(略称C表)にあるもの。

ナシ…A～C表にないもの。つまり、この調査で新しく追加した語。

(2) ○△の印は、採集法の区別を示す。

○……客観法で採集した用語。

△……主観法で採集した用語。

○△…客観法と主観法のどちらでも採集した語。(表5には実例がない)

表5 五十音順語彙表(一部)

近郊(59) 明初学
總合語彙表

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	備考
書名略称	近世事情	国体新論	明治文抄	続明治文鈔	福沢文全集	開化小史	暗射地圖	明治開化史	民間經濟錄	時事小言	学士会院①	文明東漸史	難居之準備	実地演説	外国交際	英氏經濟	百科商業	消毒新論	弥兒經濟	娼婦論	夫婦衛生論	学士会院②	英議院政治	作者内訳
刊年	6~7	8	10	10	11	11~15	11	13	10~13	14	16	17	19	20	2	4	7~10	7	8~15	10	15	16	15	
A ○	ア	ン																㊦						
A ○	ア	ア(感)	嗚呼	㊦							㊦									㊦				注1
B △	アイ																		弥					
B △	アイ		続																					注2
A ○	アイ・ウ	逢	しにつき, 出典なし																					
	～											㊦												注3
ナシ△	～(アイ)(相)				開																			
ナシ△	～ガタッ	難			開																			
C △	アイイク	シ・ス	愛育		開																			
ナシ△	アイエン																							注4
ナシ△	アイキョウゲン	間狂言									学													注5
B △	アイコ	愛顧																					院	

(3) 語形の欄

語形は、かたかなで示す。漢字は意味の注記のために添えたものであるが、字体は原文に従う(ただし、表5では新字体などに改めた)。見出しの立て方、その他の約束は、『明治初期の新聞の用語』に従う。

(4) 出典の欄

出典は書名の略号で示す。文字を○でかこんだものは、客観法による採集である。たとえば〈アッ悪〉は、客観法によって『消毒新論』から採集されたことがわかる。また〈アイ哀〉は、主観法によって『続明治文鈔』から採集されたことがわかる。

(5) 作者内訳の欄

出典3, 4, 11, 14, 22には作者名があるので、それをこの欄に示す。表5では、印刷の便宜上、備考欄の文脈と合併して脚注の形で示した。

(6) 備考

わかりにくい見出しについては文脈を示すなど、見出しの理解に役立つようにした。

1・2 五十音順語彙表第二表(使用度数10以上) 客観法で採集した用語のうち、使用度数10以上のものを別にまとめた。その初めの部分を表6に示す。

使用度数10を境目にしたのは、語の使用度数の分布についての一つの仮説にもとづく。すなわち、大まかに言って、任意の語の行あたりの使用度数がポアソン分布に従うと仮定すれば、危険率10%の条件のもとで、使用度数10以上の語は、一往、よく使われる語であるということが許される。⁽¹⁾ この10という数字は、サンプルの延べ語数には関係なく、いつでも成り立つ数字である。サンプルの延べ語数が多ければ、それだけ、使用度数10以上の語もふえ、少なければ、へるだけのことである。

今回の調査では、延べ語数が1万5千たらずなので、表6に含まれる語数は172に過ぎなかった。

2 使用度数と使用範囲(出典数)との相関関係 この調査では、客観法における出典ごとの使用状況がわかるように語彙表を作った。また、客観法における使

(1) 『明治初期の新聞の用語』(昭和34年) P.34参照。

表 6 客観法で使用度数10以上の語の表 (一部)

近世(59)明初学 総合語彙表		書名略称		使用 度数		出典総数																						
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23						
近世事情	国体新論	明治文抄	明治文抄	福沢文集	開化小史	暗射地圖	明治開化史	民間經濟錄	時事小言	学士会院①	文明東漸史	雜居之準備	實地演說	外國交際	英氏經濟	百利商業	消毒新論	彌兒經濟	娼婦論	夫婦衛生論	学士会院②	英議院政治						
6~7	8	10	10	11	11~15	11	13	10~13	14	16	17	19	20	2	4	7~10	8~15	10	15	15	16	15						
18					開			民							英		弥					4						
能イ・ウ		抄	統	福	開		明		時		文		実	外	英	百	弥					13						
当タリ・ル				福	開		明		時		文		実	外		百	弥			夫		13						
有リ・リ	近	国抄	統	福	開	暗	明	民	時	学	文	雜	実	外	英	百	弥	娼	娼	夫	学	23						
有様				福	開													弥				4						
或は	近		統	福	開		明				文	雜		外		百	弥	娼	娼	夫		15						
意		抄	統		開				時		文	雜	実		英	百	弥			夫		11						
言イ・ウ	近	抄	統	福	開	暗	明	民	時	学	文	雜	実	外	英	百	弥			夫	学	21						
以下	近				開				時				実			百						5						
何如	近			福	開		明	民		学			実	外								8						
至リ・ル	近	国抄	統	福	開		明	民	時	学	文		実	外	英	百	弥	娼	娼	夫		19						
一時(副)								民		学		雜		外								5						

用度数10以上の語彙表を別に作ったので、これら二つの語彙表を利用すれば、使用度数10以上の用語がどの程度の使用範囲を持つかという問題を解決することができる。常識で考えても、使用度数の大きい語と使用範囲の広い語との間に高い相関関係があるだろうことは、容易に想像されるところであるが、ここでは、使用度数の大きい語、使用範囲の広い語(出典数の多い語)をそれぞれ約23語ずつえらび(表7—1, 表7—2), じっさいに相関係数 r を計算してみた。表7—1, 表7—2にもとづき、スピアマンの順位相関係数を求める公式によって計算したところ,

表7—1 使用度数の大きい語の表

使用度数	順位	語数	語 形
351以上	1	2	有リ・リ 其の
251~350	2	2	之 者
151~250	3	1	事
101~150	4	4	言イ・ウ 此の 為 ^シ ・ス 無 ^シ
91~100	5	2	所 人*(9)
81~ 90	6	1	時
71~ 80	7	2	至リ・ル 亦《副》
61~ 70	8	3	得 ^テ ・ウ 政府*(9) 為
51~ 60	9	5	多 ^シ 即チ 為 ^シ ・ス 又《接》 由リ・ル
41~ 50	10	2	或は 以テ《副》*(12)
計		24	

表7—2 使用範囲の広い語の表

使用文献数	順位	語数	語 形
23	1	2	有リ・リ 其の
22	2	3	之 為 ^シ ・ス 者
21	3	6	言イ・ウ 事 所 無 ^シ 為 ^シ ・ス 又《接》
20	4	3	此の 時 亦《副》
19	5	1	至リ・ル
18	6	3	或は 得 ^テ ・ウ 多 ^シ
17	7	1	即チ
16	8	4	為 成リ・ル*(11) 皆*(12) 由リ・ル
計		23	

注 *印は、相手方の表にない語。()内の数字は、相手方の表での順位。

使用度数の使用範囲に対する順位相関係数 $r_{f \cdot h} = 0.83$

使用範囲の使用度数に対する順位相関係数 $r_{h \cdot f} = 0.78$

となり、前者の相関関係の方がいくらか強いように思われた⁽¹⁾。

2 つけたり 延べ語数の少ない作品の考察 使用度数の大きい語は、延べ語数の多い文献にもあらわれるが、また延べ語数の少ない文献にもあらわれる。

この調査の資料に使った文献の中、『日本暗射地図教授法』は本文64ページの小冊子で、しかも組み方がきわめてあらい。客観法で採集した数は、延べ語数50、異なり語数33にすぎない。これではあまりに少なすぎて、全体的な考察の対象にふさわしくないように思われるが、異なり語数の内容を調べてみると存外おもしろい内容を含んでいることに気がついた。

表8で明らかのように、異なり語数33のなかには、客観法で使用度数10以上の語が八つも含まれているのである。全異なり語数のじつに四分の一に当たる数である。しかも〈^イ入りル〉〈全国〉の2語を除く6語が、使用度数、出典数ともにきわめて高い順位に属するのである。使用度数についていえば、順位5までの11語のうちの5語がわずか33の異なり語数のなかに顔を出している。また、出典数についていえば、同じようにして順位3までの11語のうち6語が顔を出している。

表8 『日本暗射地図教授法』にあらわれた語の中、「使用度数10以上の表」に属するもの

No.	語形	使用度数 順位	出典数 順位
1	有リ・リ	1	1
2	言イ・ウ	4	3
3	^イ 入りル	17	18
4	為 _シ ・ス	4	2
5	全国	16	19
6	其の	1	1
7	所	5	3
8	為 _シ ・ス	9	3

以上の事実にもとづいてわれわれは、使用度数の高い語の性格について、次の二点を指摘することができると思う。

使用度数の高い語とは、

$$(1) \quad r_{uv} = 1 - \frac{6 \sum (u-v)^2}{n(n^2-1)}$$

ここに r_{uv} は相関係数。 u は基準になる表の中での順位。 v は相手方の表の中での順位。 n は語の数。なお、順位は頭からかぞえた順位でなく、前後からのへだたりが等しくなるようにかぞえた順位によった。従って表7—1の順位1, 2…はそれぞれ、順位1・5, 4…に書きかえて計算した。また、 u , v はわかりやすいようにド(度), ハ(範)と改めた。

- (1) 使用範囲もまた広い語である。
- (2) 言語量の制限された作品にも率先してあらわれる語である。

参考までに、客観法で採集した用語の、使用度数、出典数の多少による度数分布表をあげておく（表9～表10）。

3 『郵便報知新聞』語彙表との対照 五十音順語彙表（全体）を『郵便報知新聞』の語彙表と対照したところ、表11の数字を得た。これによると、重複した語数では主観法と客観法との間にやや差が認められるにすぎないが（表11 §1, 表13 §1）、重複率では、主観法は客観法の半分以下である（表13 §5）。

表9 異なり語の度数分布表1
（使用度数10以上のもの）

使用度数	使用 順位	語数
351以上	1	2
251～350	2	2
151～250	3	1
101～150	4	4
91～100	5	2
81～90	6	1
71～80	7	2
61～70	8	3
51～60	9	5
41～50	10	2
36～40	11	5
31～35	12	10
26～30	13	11
21～25	14	10
16～20	15	25
12～15	16	43
10～11	17	44
計		172

表10 異なり語の度数分布表2
（出典数8以上のもの）

出典数	出典数 順位	語数
23	1	2
22	2	3
21	3	6
20	4	3
19	5	1
18	6	3
17	7	1
16	8	4
15	9	5
14	10	3
13	11	11
12	12	9
11	13	14
10	14	13
9	15	19
8	16	19
計		116

注 最小使用度数、最小出典数はいずれも1。また、最小使用度数、最小出典数の順位は、いずれも23。使用度数の順位を1から23までに区分したのは、出典数の順位が容易に1から23までに区分されるので、それに合わせたものである。

4 主観法と客観法との比較 この調査では、比較がしやすいように、同じ調査対象について二つのやり方をこころみ、しかも当初の採集枚数も約1万5千枚にそろえてみた。ただし、異なり語数を追加するための採集を兼ねて企画し

表11 『郵便報知新聞』の語彙表と重複した語数

区分	1 全体	2 A表と 重複分	3 B表と 重複分	4 C表と 重複分
1 客観法	2,931	854 ⁽¹⁾	1,922	155
2 主観法	3,430	280	2,684	466
3 主観・客観に共通	874	197	622	55
4 計=(1+2)-3	5,487	937 ⁽¹⁾	3,984	566
5 主観:客観=2/1	1.17	0.33	1.40	3.00

注 (1) このうち、度数10以上の語は172ある。

たので、サンプルまで重複させることはしなかった。サンプルが重複したばあいについては別に調査をすませてあるが、この報告では省略する。

さて、主観法と客観法で、採集枚数、異なり語数などがどうちがつているかという、表12のとおりである。

表12 採集枚数、異なり語数などの比較

	(1) 当初採集 枚数	(2) 正味の採 集枚数 ⁽¹⁾	(3) 異なり語 数	(4) =(2)/(1) 採集率(%)	(5) =(3)/(2) 異なり語含有率(%)
A 主観法	14,292	13,755	11,847	96.1	86.1
B 客観法	14,980	13,933	4,843	93.1	34.8
計	29,272	27,688	15,346 ⁽²⁾		
平均				94.5	55.4
比率			A/B=2.44		A/B=2.47

注 (1) 人名・地名・数詞などを差し引いたものを「正味」と呼ぶ。

(2) 重複分1,344を除く。

正味の採集枚数はほとんど同じであるのに、得られた異なり語数はひじょうに開いている。主観法で得た異なり語数は、客観法のそれにくらべてほとんど2倍半の多きにのぼっている。

また、異なり語の含有率も、客観法の35%弱に比して、主観法は約2倍半の86%という高い率を示している。これは、延べ10枚の採集カードを任意に取り出したと仮定したときに、客観法では平均して6枚以上の重複カードが出るのに対して、主観法では1枚または、せいぜい2枚の重複にしかすぎない、ということの意味する。

『郵便報知新聞』の語彙表に対して、どの程度重複するかは表11に示したの

で、第三に、くだんの語彙表に対して、どの程度追加されたかを表13にあげよう。主観法で追加された語数は、客観法の場合の約4倍半にものぼり、採集した語数のうちあらたに追加された分のパーセンテージも、主観法がいちじるしく高い(表13 §2, §3 のかっこ内)。

以上の諸点で明らかなとおり、見出し語の採集能率や追加能率に関する限り主観法は圧倒的に有利であるように思われる。もちろん、ここにあげた比率そのものには個人差があると思うけれども、主観法と客観法とで結果に大きな差があらわれる点では、だれがやっても同じだと思う。

表13 『郵便報知新聞』の語彙表に追加した語数

	1 重複分 (全体)	2 AB表に 対して追加分 (%)	3 ABC表に 対して追加 分(%)	4 =1+3 合計	5 =1/4 重複率	6 =3/4 追加率
1 客観法	2,931	2,067 (9.3)	1,912 (6.2)	4,843	60.6	39.4
2 主観法	3,430	8,884 (39.8)*	8,418 (27.2)	11,848	29.0	71.0
3 主観・客観に 共通	874	525	470	1,344	65.0	35.0
4 計=(1+2)-3	5,487					
平均		10,426 (46.7) 100%=22,272	9,860 (32.0) 100%=30,796	15,347	35.8	64.2
5 比率=2/1	1.17	4.29	4.40	2.44		

* C表(8,524)が、AB表の合計(22,272)に対して追加された%は38.1である。

しかしながらこれをもつて、用語採集のあらゆる点で主観法が有利であるとみるのは誤りであって、統計的処理や推定の段になると、主観法は到底客観法の比でない。言うまでもないことながら、よく使われる用語であるかどうかなどの客観的判定は、たとえば使用度数10以上という基準にでもよらなければくだせないことである。この調査の中から一例をあげると、『日本暗射地図教授法』について指摘した注目すべき事実も(表8参照)、客観的採集の裏づけなしには言われないことである。

なおまた、たとえば全体をいくつかのブロックに分けて語のふえ方の傾向を明らかにし、それにもとづいて調査対象の全体に含まれる語彙の総量を推定す

るといった仕事も、客観法でなければならないことであろう。⁽¹⁾

次に、適当な規模の客観的調査は、新しく行なわれる同種の主観的調査の土台として役立つ。たとえば、『郵便報知新聞』の調査で、使用度数10以上の語は、人名・地名・数詞を除いて1,280であった。この時の延べ語数は約10万である。今回の調査では、延べ1万5千のうち、使用度数10以上の語が172である。ところが語彙表をくわしく対照していくと、937の語が『郵便報知新聞』の1,280の中に含まれているのである(表11参照)。937という数字は、1,280の75%以上に当たる。おそらく、今回の調査を進めて行けば、937の大部分も使用度数10以上の階層に属するようになるのであろう。このように、客観法によってある程度の語彙表ができあがっていると、新しい結果も、それとの対照において意味を持ちうるということがわかるであろう。

以上のことからして、用語採集における客観法と主観法は、たがいに一長一短があり、たがいに補いあう性格を持つと言えるであろう。そこでもっとも効果的な方法は、ある規模の客観的調査ができたならば、それを土台としてこれに適当な規模の主観的調査を組みあわせることではないかと思う。もとより用語採集の事業は目的によって方法がきまるわけで、一律にきめることはできないけれども、なるべく多くの異なり語を採集し、しかもそれにある程度の客観性や数量的処理の可能性をも与えようとするならば、上記の方法が望ましいと思う。けだし、客観的用語採集は、いわば語彙体系の中心的現象をねらうものであり、主観的用語採集はこれに対して、語彙体系の周辺の現象をねらうものとも言えよう。

理論的に考えられる第三の方法としては、客観的主観法とでもよぶべきやり方がある。これは、まずサンプルにあらわれた限りのすべての語を採集単位に分割したら、〈為・ス〉〈其の〉などのように、明らかに使用度数の多い語をあらかじめ採集の対象から除いておき、次に採集ずみの用語を適当な手順で落としながら、残ったカードの中から異なり語だけを記録に残すというやり方である。異なり語だけを洩れなく記録に残すという目的からすれば、これ以外のや

(1) 『総合雑誌の用語』後編(国立国語研究所報告13) p. 26~37 参照。なお、水谷静夫「延べ語数と異なり語数との関係」計量国語学第三号、第十二号参照。

り方はなさそうに思うが、これについては実施の経験がない。

G 来年度の計画

来年度は、明治1～20年の間に刊行された、小説・小新聞その他の文献について用語採集を行なう予定である。(見坊)

H 資料の解説

この解説は、資料として採用したものの内容を簡単に述べたものである。また編著訳者の経歴も、人名辞典や『明治編年史』の索引でわかる限りは掲げるようにした。全体を通じて、文体は、われわれの言う「かたい」文体で書いてある。だから、文体にはふれていない。用語も、目だったものが使っているものに限ってその旨を特記した。

(1) 近世事情 山田俊蔵・大角豊治郎著 明治6～7年刊

2篇7冊(和) 364丁(本文だけ。以下同じ)

編年体の歴史書である。初篇と二篇とに分かれており、寛政元年から明治2年までの開国の歴史を記述してあるが、著者は佐幕派であったと思われる、榎本武揚の奮戦を叙述するあたりは、きわめて精細である。例言によれば、英人「ギージョト」氏の開化史にならって、近時の開化に進歩する履歴をみる必要があったとある。内容は、史実が中心であるが、史料としての勅詔・公告等、人物の伝記、会計表なども含まれている。

(2) 国体新論 加藤弘之 明治8年刊 1冊(和) 30丁

著者は、東京大学法理文三学部総理をへて、東京大学総理になった学者である(1836～1916)。人間には、天賦の権利がある。君主、政府は民の心で民を治めるべきであると説いている。新論の名が示すように、当時としては、思い切った議論で、反对者も多く、後にみずからの意志で絶版にした(14年)。

(3) 明治文抄 高橋易直編 明治10年免許 3冊(和) 96丁

全体を建議・論・序に分け、福沢、渋沢、森、加藤等広く当時の知識人の文章を転載したものである。しかし、校合の結果、原文との間に異同

のあるものの混じていることがわかった。

- (4) 続明治文鈔 高橋易直編 明治10年免許 4冊(和) 145丁

(3)の続編。この方は、上書、建言、論、雑を収めてある。

- (5) 福沢文集 福沢諭吉著 明治11年免許 2冊(和) 87丁

福沢諭吉の文章のうちで著書の体裁とはならず、新聞などに投稿したものなども含めて、一冊にまとめたもの。今日でいえば、随筆集とも呼ぶのが適当であろう。

- (6) 日本暗射地図教授法 大月疇四郎編述 明治11年刊 1冊(和) 32丁

暗射地図(今日言うところの白地図)による地理の教授法を述べたもの。地図上の番号の地名を簡単に解説した小冊子である。

- (7) 日本開化小史 田口卯吉著 明治15～17年刊 6冊(和) 207丁

著者は、言論と文章で世につくそうとした人であり、国会議員にもなった。尺振八の門下。経済学を学んだが、一方史学にも興味をもち、人名辞書や国史大系の刊行にも力をつくした(1855～1905)。擬古文風の文章で、神代から、大政奉還までの事を述べてある。

- (8) 明治開化史 渡辺修次郎著 明治13年刊 1冊(洋) 225ページ

幕末から明治12年までを、政事、外交、兵制、法律、経済等10章に分けて述べている。各種の表、長文の建白書などを含む。

- (9) 民間経済録 福沢諭吉著 明治10年免許 2冊(和) 109丁

学問に興味を持たせるべく配慮して、子供むきに書いた教科書風の本。欄外に質問を用意してある。文章もくだけ、字もやさしくしようと努力した、と初篇の序に述べている。第二篇は、初篇の3年後に刊行したもので、当時15,6才の子供であった初篇の読者は、18,9才になって、社会の一員になろうとしていることを考慮し、西洋の経済書の入門書にもとを考えて執筆した、とある。

- (10) 時事小言 福沢諭吉著 明治14年刊 1冊(洋) 320ページ

政権、国権、財政等について、社会評論風に論じたもの。俗語も適当にまじえ、くだいて書いてある。

- (11) 東京学士会院雑誌 明治15年1～12月 合本1冊(洋) 227ページ

東京学士会院は、現在の日本学士院の母胎である。15篇の論文を収めてあり、講演（漢文書き下し文体の系統の文体で書いてある。速記ではないらしい）、外国書の翻訳、論文等がある。黒川真頼、大鳥圭介、神田孝平、西村茂樹、福羽美静などの名が見える。論じているテーマは言語、社会、生物、倫理、風俗、文学等にわたり、巾が広い。

(12) 文明東漸史 藤田茂吉著 明治17年刊 1冊（洋） 473ページ

著者は、慶応義塾出身のジャーナリスト。『繫思談』やシェークスピアの翻訳もやる一方、政治小説にも筆を染めた事がある。また国会議員となったこともある(1852～1892)。内篇と外篇とに分け、内篇には、ポルトガル人の来航から説き起し、キリスト教・学問・経済の国内での影響進歩にふれている。外篇には、渡辺華山、高野長英の伝記をのせ、兩人の論文を翻刻してある。渡辺、高野の事業を明らかにすることが全体の主眼であると見られる。

(13) 内地雑居之準備 青田^{みきお}節著 明治19年刊 1冊（洋） 63ページ

著者は、兵庫県出身の士族。福島県で小学校教育に従事し、方言改良会の設置や、学校に言語練習科の設置を提唱していた。『方言改良論』の著がある。外国人が内地に雑居するに当たり、日本人として心得ていなければならないエチケットを解説している。

(14) 文明実地演説前篇 藤田武城訳述 明治20年刊 1冊（洋） 231ページ

新しく起こったコミュニケーションの手段としての演説のいわば種本であり、内外の知名の人の演説を集めてある。ビスマルク、グラッドストーン、ソルスベリー、フェノロサなど外人のものの翻訳を初め、福沢諭吉、杉亨二、末広重恭、板垣退助、伊藤博文等の日本人のものに至るまで、38篇を収めてある。大部分は文語体であるが、談話体のものも一二含む。

(15) 外国交際公法^{バロンマルティンス} 巴侖馬兒顛著 福地源一郎訳訂 明治2年刊 2冊（和）

72丁

訳者は、ジャーナリストであり、また通訳にも従事したことがあった。小説、脚本も執筆している(1841～1906)。外交についての常識を説いた

ものであり、外交官制度が中心になっている。翻訳に当たっては、つとめて平俗にし、富麗の文字を使わず、達意をもっぱらにしたと、緒言で述べている。訳語にルビの形で原語を示したもの、原語をそのままかたかな書きにしたものなどが多い。

- (16) 英氏経済論 ^{フランス・イギリス} 英蘭志須英蘭土著 小幡篤次郎訳 明治4年刊 3冊(和)
156丁

著者は慶応義塾塾長。前に、英学の教授であったこともあり、宗教学の翻訳がある(1842~1905)。凡例には、「字傍ノ訓或ハ下文ヘ読ミ続ケ悪シキモノアル可シ元ト初学ノ記憶ヲ助クルニ備フレバ訓ニ由ラズシテ直ニ音ヲ以テ之ヲ読ミ下ス可シ」とあり、術語の翻訳についての苦心の程がしのばれる。

- (17) ^{商業編} 百科全書 前田利器訳 明治7~10年刊 2冊(和) 97丁

著者は、名古屋藩洋学校の教師をしたことがある。文部省が刊行を計画したチェンバース百科全書の中の一冊である。貿易論と貨幣論についての部分であって、経済用語の翻訳語が多く出ている。^{コンパニー} 会社 ^{ヴァルデ} 注文 ^{カピタル} 資本
為替手形 手形貸付 等。

- (18) 消毒新論 ^{ストウ} 斯篤宇氏著 島田脩海訳 明治7年刊 1冊(和) 48丁

消毒とは、中毒を消すという意味である。鉱物、動物、植物の毒性あるものの性質と中毒した場合の徴候および治療法、ならびに毒物試験法について述べている。終わりの方には、溺死、首つりの場合の救助法にまで及んでいるのは、今日言う救急看護法といった性格の本であると言ってよいだろう。

- (19) 弥兎経済論 ^{ミュー} 弥兎著 林董訳(初篇8冊のうち6冊目まで) 鈴木重孝訳(初篇7冊目以下) 明治8~15年刊 初篇 8冊(和) 327丁

訳者林董は、県知事、特命全権公使、外務大臣の職を歴任した。英国に留学もし、日英同盟の締結、改訂に尽力した(1850~1913)。

訳者林がかつて外遊した時に、欧州各国の「経済法」を一変させたこの書の価値に驚き、わが国にも実際に施行させようとの考えから訳を志したが、本務が多忙のため、途中から鈴木にその仕事をまかせた。内容

は学術上の理論を捨てず、実用を主としているもので経済術と呼んでいる。

なお、この訳書は25冊で完結しているが、用語採集の対象としたものは8冊目までである。

- (20) 娼婦論 M・デュチャテレット著 刀根宗二郎筆記 明治10年刊
2冊(和) 56丁

娼婦が社会に及ぼす悪影響を統計的な調査に基づいて論じたものである。翻訳ではあるが、全文の忠実な訳ではなく、必要と考える部分を抜き出してある。だから、訳とは言わず、「筆記」の文字を使っているであろう。全篇左側のルビを使い、漢語の大部分に、意味をくいだいたやさしいことばの言いかえを右側ルビの形で示す。

- (21) 夫婦衛生論 埃・哥烈曼^{エ・グレンマン}著 平塚平訳 明治15年刊 1冊(洋) 248ページ
結婚についての、主として生理上の注意すべき点を解説したもの。著者には、フランス医学博士の肩書がついている。漢字は全部その読みをルビで示してある。

- (22) 英国議院政治論首巻 総論並制度沿革史 アルフェース・トッド著 尾崎行雄訳
明治15年刊 1冊(洋) 127ページ

訳者は、著名な政治家である。慶応義塾を卒業後ジャーナリストの生活を経、理学の教官の職についたこともある。東京市長の任にもあり、第1回の国会から晩年まで、国会議員の席にあったことは有名である(1859～1954)。総論では、自国民の歓心を収め、諸外国の模範となっている英国議会の二院制の効能と利益を論じている。さらに、議院沿革史においては、その由って来た点を明らかにする為に、議院政治の歴史を詳しく解説している。なお、この書物は全10冊であるが、そのうち首巻の1冊のみを用語採集の対象とした。(広浜)

同音語の調査

A. 目標, 担当者

第一資料研究室では、正書法に関する基礎問題についての資料の収集および調査研究を行なっているが、昭和34年度は前年に引き続き「同音語の調査」につき、次の調査を行なった。

1. 「同音語・類音語集」（衆議院速記者養成所刊）その他から採集した資料（年報10参照）の整理分析
2. テレタイプにおける同音語の支障の調査およびその資料の収集・分析
1は松尾拾、市川孝（4月まで）、大久保愛（10月まで）、田中章夫（10月以降）が、2は松尾が担当した。

B. 同音語の整理・分析

前年度上記の資料から採集した同音語概数約48,000語につき、次の作業を行なって分析を進め、分類方法について検討した。

1. われわれは具体的な文章を理解するとき、同音語を何によって読み分け聞き分けているか、その判別のかぎになっていると予想される2点、(1)その語のもつ位相の異同、(2)その語の品詞性の異同を一々の語について推定・検討した。位相としては、①専門語、②特殊な職業または狭い年齢層の間では使われる可能性があっても、一般には使われない語、③慣用語句、④文章語、⑤非現代語、および⑥以上のどれにも属さない一般語をたてた（詳細は年報10・285ページ参照）。この位相の判定には、根拠となる具体的な文章が与えられていないので、判定者の主観のゆれが大きい。そのゆれのはばを、できるだけ少なくするため、室員3名の判定が一致することを原則とした。しかし資料の中には室員の経験しないような語もあり、必ずしも3名全部の一致を得ることがむずかしいものもあった。その場合はしばらく、2名の一致を得たものを採取しておいた。判定によって得た、専門語と専門語、一般語と一般語のような組み合わせ

せが、まぎれやすい同音語として、当面の第一の研究対象となるはずである。しかし、その語の使われる文脈を想定しながら進める、われわれの作業では、一般語または専門語と特殊な職業または狭い年令層の間でのみ使われる語、一般語と文章語、文章語と非現代語等の区別をつけることは、容易ではなかった。したがって、実際にはそれら異なった位相の組み合わせの語も、研究の対象に採用しなければならなかった。このような操作を経て採用した、まぎれやすいと思われる同音語を、2語ずつの組み合わせとして概数6,000組を選び出し、分析の対象とした。(以上を第1次操作と呼ぶ)

2. 第2次操作として、第1次操作により一応まぎれる可能性があると推定された6,000組について、まぎれやすさの段階づけを試みた。

2・1 まず、同音語のまぎれやすさを生み出す条件として、位相・意味・品詞・用法・アクセントなどの観点から、次のようなものを設けた。

○位相

① とともに一般語であるかないか。

第1次操作では、位相を文章語、非現代語などこまかく分けたが、その判定・区別に苦しみが多く、实际的効果が少ないので、今度は一般語(現在、一般社会で使われていると思われる語)どうしの組み合わせが、もっともまぎれやすいという観点から、この条件だけを考えることにした。したがって、官庁等ある職域では広く使われるが、一般社会ではそれほどの広がりをもたない語は、専門語とせず、一般語に含ませた。

② 専門的な語で、使用分野が同一であるかないか。

第1次操作では、専門語・職業語をかなり細分したが、ここでは、専門的な職業語であって、ともに同一分野で使用される語の組み合わせがもっともまぎれやすいという観点から、この条件だけにした。

以上の①、②の2条件のほか、読み方や用字法がきわめて特殊な語は、一般に使われることが非常に少ないのではないかという観点から、これも条件として加えた。

○意味

㊦ たがいに類義であるかないか。

同音語であっても、意味がかけはなれているものはまぎれにくい、意味の近いものほどまぎれやすいという観点から、類義語がもっともまぎれやすいとして、この条件を設けた。

次に、比較的意味の近いものについても、当然考えるべきであるが、語の意味体系についての研究が未完成の現在では、これを取りあげることは不可能なので、便宜的方法として、それぞれの語を構成している漢字が一部分一致しているかどうかという点に注目し、これも条件として加えた。

○品詞

㊧ 品詞性が全面的に一致しているかないか。

ここでは、品詞性が全面的に一致する語が、もっともまぎれやすいという観点から、部分的一致については、とりあげなかった。

○用法

㊨ 慣用的用法や、他の語との慣用的な結びつきがあるかないか。

同音語でも、一方（または両方）の用法が限定されていれば、まぎれにくいという観点から、いわゆる慣用句（慣用的な複合形式をも含めた）的用法がないものは、同音語のまぎれを起しやすと考えた。

○アクセント

㊩ アクセントが一致しているかないか。

アクセントのちがいは、一語で出てきた場合には、ほとんど唯一の判別条件になりうる。もちろん話しことばでは有力な判別条件である。したがって、アクセントが一致している同音語はまぎれやすいと考え、この条件を設けた。

2・2 第1次操作で選出しておいた約6,000組の同音語の一組一組に、以上の条件をあてはめて、各組の同音語のまぎれやすさを判断した。そして、多くの条件にあてはまるものを、もっともまぎれやすい同音語と認め、以下あてはまる程度の違いによって段階づけを行なおうと試みたが、その結果、次の三つの点について疑問が起こった。

① もっともまぎれやすい段階には、同音類義語のほとんどすべてが属し

ていて、これの占める割合がかなり大きい。しかし実際には、同音類義語なら、たとえまぎれてもコミュニケーションは一応成立するわけで、それほど大きな支障にはならない。したがって、一般の同音語（同音異義語）がまぎれる場合とは、質が異なるのではないか。

- ㊤ もっともまぎれにくい段階には、非現代語や特殊な専門語（以下、「非一般語」と呼ぶ）どうしの組み合わせが、ややまぎれやすい段階には、非一般語と一般語との組み合わせが属する。しかし、別な方面から考えれば、非一般語は一般の人々の言語意識には存在しにくい語だから、非一般語を含む同音語の組み合わせでは、次のようなことが起こる。

○非一般語どうしの組み合わせ……理解者（受け手）の言語意識に、
どちらの語も存在していないために、コミュニケーション
が全く成立しない場合。

○非一般語と一般語の組み合わせ……理解者（受け手）の言語意識に
非一般語が存在しないために、それを、それと同音の一般
語の方の意味に理解してしまう場合。

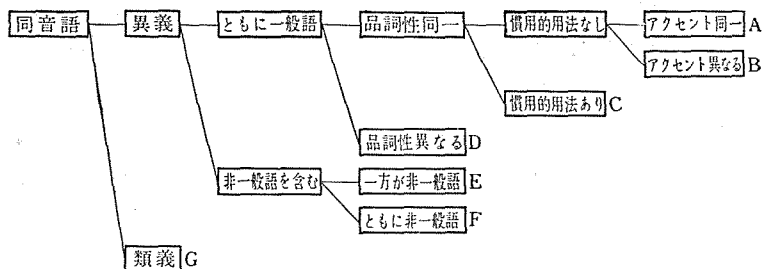
非一般語を含んだ同音語の組み合わせでは、コミュニケーションの際にこのような支障・混乱が起こることは、当然予想される。しかし、これらはいずれも、語（非一般語）を知らないためにもたらされた混乱・支障であって、同音語がまぎれたという場合とは、質が異なるのではないか。

- ㊦ 第2次の操作では、まぎれやすさをもたらし条件を、すべて等質的・等価的に評価したが、それぞれの条件によって、支障・混乱の質のちがいがあ、各条件のウェイトのちがいを認めるべきではなかったか。

3. 第3次操作では第2次操作の欠陥を考慮して、次のような分類をほどこした。（別表参照）

- ① 同音語を同音異義語と同音類義語に分ける。

○同音語 { 同音異義語（コミュニケーションの混乱・支障をもたらす）
同音類義語（コミュニケーションの成立には支障にならない）



㊤ 同音異義語を，ともに一般語の組み合わせと，非一般語を含む組み合わせとに分ける。

○同音異義語 { ともに一般語 (まぎれやすい)
非一般語を含む (非一般語を知らないための支障 <2.ロ> がおこりやすい)

㊦ 非一般語を含む組み合わせを，一方が非一般語になっている組み合わせと，ともに非一般語の組み合わせとに分ける。

○非一般語を含む { 一方が非一般語 (非一般語は，一般語の方の意味に理解されてしまいやすい。 <2.2.ロ>)
ともに非一般語 (コミュニケーションが成立しにくい。 <2.2.ロ>)

㊧ とともに一般語の組み合わせをわける場合，分類基準に次のようなウエイトをつけた。

- i 品詞性の異同……個人差やゆれがないので，もっとも基本的な基準として採用する。
- ii 慣用的用法の有無……現代の若い年令層では，慣用的な語法がかなりくずれつつあり，その上個人差も大きいので，品詞性と同等に扱えない。
- iii アクセントの異同……話しことばの場でしか通用しないので，もっとも軽い分類基準とする。

4. 第3次操作の結果，第1次操作で選出された6,000組の同音語が，別表

のように、A～Gの8グループに組み分けされた。いままで、2.2および3の各項でのべたように、この組み分けは純粹にまぎれやすさのランキングになっているわけではない。〔A, B, C, Dのグループ〕と〔E, Fのグループ〕および〔Gのグループ〕相互は、コミュニケーションの成立上生じる混乱・支障の質的なちがいを含んでいる。もちろん、A, B, C, Dは一応まぎれやすいものからまぎれにくいものへの段階的な分類になっていると考えてよい。

- ④ 次に、A～Gまでの各グループに属する同音語セットの例をあげると、次のようになる。

〔例〕

- A 強調：協調 学会：学界 化学：科学 連盟：連名 居る：要る 蛸：風
B 送料：総量 商品：賞品 訳者：役者 厚さ：暑さ 身近な：短な 銅う
：買う
C 一同：一堂 皆兵：海兵 喜色：気色 過半：下半 案に：暗に 納める
：修める
D 関心：感心 対戦：大戦 良好：良港 平温：平穩 大降り：大風 意気
：粹
E 思想：詩想 高圧：光圧 継子：継粉 風呂：風炉 改心：回心 剥ぐ：
剝く
F 雪景：夕景 精深：精審 採藻：栽桑 円心：炎心 幹川：官線 択伐：
択抜
G 探求：探究 成育：生育 形式：型式 定宿：常宿 差す：挿す 実状：
実情 定跡：定石 延棹：延竿 打球：打毬 支払：仕払 聴取：聴守 複
製：覆製 修正：修整

- ⑤ このうち、Aに属するセットが、もっともまぎれやすい同音語と考えられるが、ここに含まれている語を、「総合雑誌の用法(前編)」第2表における使用率の高い3,950語と対照してみた。これによって、これらAに属する同音語の使用率を推定した。

5. 第3次操作までで、単独の語についての分類整理の方法は、一応検討を終ったが、複合語・造語要素・略語・固有名詞・洋語・助辞を含む単位については調査が進んでいない。こうしたものについての本格的な資料収集は、かなり困難なので、次年度の仕事として、「総合雑誌の用語」調査の際の資料など手近なものから得られる範囲で、問題点だけでもさぐっていきたい。

C. テレタイプ関係の資料の調査・収集および分析

現在、実務方面では、事務能率の向上のため、カナタイプやテレタイプによる通信関係の機械化が進んでいるが、事務文書が全文かな書きとなると、そこに当然同音語の問題が起こってくるのが予想される。実務の場では、それをどのように処理しているかを、当事者にただして参考にしたいと考えた。調査した所は次のとおり。

朝日新聞、損害保険協会、東京芝浦電気、日興証券、三菱電機(伊丹製作所)、日本製鋼所、全国購買農業協同組合連合会(全購連)、日本国有鉄道、呉羽紡績

質問した事項は、

- (1) テレタイプにおける同音語の支障の有無
- (2) 支障がある場合は、その実際的な処理方法

(1)の質問に対しては、一、二の事業所を除いては、すべて支障を感じたことがないという回答であった。これは予想に反したことであったが、その原因を推察してみると、おおよそ次の4点にしばれるであろうと思われる。

- i) 後に述べる(2)のような、同音語による混乱を避ける方法がある程度採っていること。
- ii) 社会一般を対象とする企業である新聞は別として、一般には、企業の業務内容はかなり限られたものである。したがって、その内部の通信に用いられることばも限られたことば、あるいは専門語であり、また、実務上テレタイプを使用しているのは、伝票、注文書、稟議書等、一定の規格のあるものが大部分である。このために、通信する当事者間では、たとえ同音語が出てきても、ほとんど迷うことなく理解できること。
- iii) 一般文書にもテレタイプを使用しているが、その内容が事務連絡のものなので、高度のものではなく、文も短く表現も簡単であること。
- iv) (2)に述べる以外の点で、同音語による支障が起こった場合にも、原案作成者あるいはテレタイプのオペレーターが、そのつど、適宜判断して言いかえたり、外国語になおしたり、その語が漢語の場合には訓読みにしてい

るのが実情である。したがって、同音語の問題が表向きの問題として浮かびあがってこない面もあるようであること。(ただし、一、二の所、たとえば、呉羽紡績のように、進んだ段階でテレタイプを利用している所では、こ
とばに関する問題が、全機構の問題と関連させて、とりあげられている。)

(2)については、企業の業務内容に応じて、同音語を避けるために種々の方法をとっているが、これをまとめてみると、次のようになる。

i) わかち書き

- ① ビ ヨウイン (美容院) と ビョウイン (病院) [火災保険]
- ② だいたい文節で分ける。 [朝 日]
- ③ だいたい単語でわかる (接続助詞はつづける)。 [日本製鋼所]

ii) その語にあたる漢字や意味を注記する。

わたくしが ても しやないは まかせられる たいせい (からだ・せいど) に あるので あんしんしている。 [朝 日]
ひろしまし せんさいじ (じどう) いくせいしよ [朝 日]
薬種 ヤクシュ (クスリ)
薬酒 ヤクシュ (サケ) [火災保険]

iii) 注記と言いかえ併用

紙工品 シコウヒン (カミ)
嗜好品 種類を明示する。 [火災保険]

iv) 略語を使わない。

光機 コウガクキカイ
工機 コウサクキカイ
衡器 ドリョウコウキカイ [火災保険]

v) 略称を用いる。

- ① 社内で作業過程をコード別にしてある。 [日本製鋼所]
- ② 電報略号を代用する。

ソサ (総裁), カソス (回送す), トカホセ (東海道本線), ムフ (意味不明) [国 鉄]

vi) 表現をかえる。

- ④ 語の位置をかえる。

日本製鋼所K・K

K・K日本精工所

〔日本製鋼所〕

- ⑥ その語の別の読み方を用いる。

××の なかとびで あつさり どうてんと した。〔朝 日〕

〔注〕 「なかとび」はセンターフライ

vi) 語順で示す

必ず「…ケン…グン…マチ」の順に書くため、同音の地名でもまぎれない。
〔火災保険〕

このほか、言いかえ法は、どこでも適宜採用している。なお、事務連絡のための一般の文書に一定の型を設けている所はなかったが、習慣上自然に定型らしいものが生じていて、それが、なにほどこ同音語のまぎれを防いでいることもあるのではないと思われる。たとえば、次のような文である。

○…月…日 広シマ ヒッチャク スルヨウ トクダンノ ゴハイリョ ネ
ガイマス

○…ノケンハ ショウワ…年…月…日ヅケ ケッサイ…ヲ モッテ カキ
ニ ヨリ ショウニンニ ナリマシタ カラ ゴ ツウチ イタシマス

○キャクサキ…課… ドノ キホウ イタシマス

要するに、テレタイプを用いる現場では、上に述べたような処理方法を講じた上で、なお残る同音語の支障は、ほとんど支障とは感じられていないようである。しかしそれは、一企業体の内部では問題にならないにしても、外部との交渉をもつ場合には、問題がないわけではない。それは固有名詞である。たとえば、同じ業種に「トウエイ」が二つあるとき、「東映」か「東栄」かの区別がつかない(呉羽紡)、というように、漢字にもどす場合の苦勞があり、こういう場合はそのつど調べたり、問い合わせているというが、この問題は、容易には解決のつかない問題であろう。

この調査でわかったことは、専門語は、たとえ同音語になっても、実際上ほとんど理解の支障にはなっていないということである。

この調査の目的は、実務関係における、この問題に関する実情を知ることの

ほかに、具体的な文脈を備えた資料を得ることにあったが、以上のようにして会社関係からは、われわれが求めるような資料は得られなかった。わずかに、朝日新聞から得られた資料は、社会一般に使われることばを多く含むので、直接の資料とすることができた。政治欄・社会欄・スポーツ欄・経済欄等の、整理された紙面になる前の原稿から、約1カ月分を資料とすることができた。

(朝日新聞では、調査のため尋ねた昭和34年7月以降、かなのテレタイプを漢字テレタイプに切り替えたため、これ以上の資料を求めることができなかった。)この資料から、同音語の支障が考えられる所をぬき出し、具体的な文脈の中では、どのような条件のもとに同音語を判別しうるかを観察し、次の条件を分析した。(原文は、同音語や読みにくい語には注記がほどこしてあるが、これは紙面をつくる時、漢字にもどすための処置である。いま、これがないものと考えて読んでみた。傍線の語は同音語)。

(1) 複合語における語の結合のしかた

おうさか かせんとりひきしよ (大阪 化纖取引所)

(2) 並立形式

きようだい どうししやだいの こうこがくしやも はつくつに のりだした (京大 同志社大の 考古学者も 発掘に 乗り出した)

(3) 慣用ある言い方

せいしんの きに みちた ぎかいと なつた (清新の 気に 満ちた 議会と なった)

(4) 品詞性の違い

おじの こうてきな めんは あまり しらないが… (叔父の 公的な 面は あまり 知らないが…)

(5) その語より前に判別のめじるしがある。

し민が せいしんな しせいを きたいしている (市民が 清新な 市政を 期待している)

ふくぎちように …うじを せんにんした (副議長に …氏を 選任した)

(6) その語より後に判別のめじるしがある。

30日の こつかいは 5月2日 しうしうの おうずめを むかえ
ごぜんから しうそくへの うごきを しめし (30日の 国会は
5月2日 収拾の 大詰めを 迎え 午前から 収束への 動きを
示し)

せうこうげうしやにも くいこんで ほしゆへうを うばい (商工業
者にも 食いこんで 保守票を 奪い)

ここに得た条件については、さらにその妥当性を確かめるため、次年度に各
種の実験テストを予定している。 (松尾, 田中)

国内における国語問題に関する情報の収集・整理

——特に新送りがな問題について——

A. 目標, 担当者

第二資料研究室では、国内における国語問題の動向を知るために、関係の文
献、情報の収集、調査、研究を行なっている。今年度は新送りがなについて調
査した。資料の収集と調査には、高橋一夫、大久保愛が当たった。

B. 資 料

調査の結果は目下整理中である。われわれが資料として使った新送りがなに
ついて論じられた記事、論文のうち主なものをあげる。(アイウエオ順)

1. 新聞・雑誌の記事・論文

- 1 朝日新聞「新送りがな8か月、経過と成りゆきをみる」(昭35.3.11)
- 2 朝日ジャーナル「異論の多い新送りがな、例外規定が混乱を呼ぶ」(34.
11.22)

- 3 石井淳一「新・送りがな」(「教育」昭35.2 国土社)

- 4 石川達三「国語に手を出すな」(「週刊読売」昭34.11.29)

- 5 石黒修「読みやすい日本語に、“送りがな”この厄介なるもの」(「図書
新聞」昭34.7.18)

- 〃 「送りがなの問題」(「実践国語教育」昭34.9)
- 6 板垣直子「送りがな」(「日経新聞」昭33.12.12)
 - 7 糸井寛一「二拍までに統一しよう、送りがなについて」(「大分合同新聞」昭34.4.7)
 - 8 植松 正「慣用偏重は混乱のもと、一貫しない新“送りがな法”」(「朝日新聞」昭33.12.16)
 - 9 臼井吉見「条件闘争派の言い分、乱暴な国語政策」(「読売夕刊」昭34.11.10)
- 〃 「国語の暴力革命」(「コウロン」昭34.11.24)
- 10 浦松佐美太郎「あまりにも日本的、国語改革に短気はこまる」(「中日新聞」昭34.11.8)
 - 11 大岡昇平「不便な“新おくりがな”，教育上の苦情は当然——国語問題論議をめぐって——」(「東京タイムス」昭34.11.26)
 - 12 大久保忠利「“現かな” 制定の精神に矛盾，ホオカムリされた“誤記・難記”」(「読書人」昭34.11.2)
- 〃 「やっかいな“送りがなのつけ方”」(「社会教育」昭35.1)
- 13 片岡並雄「国民の読み書きと表記の改革 ——新おくりがな法をめぐって——」(「教師の友」昭35.4)
 - 14 亀井 孝「漢字は困ったもの，文部省の“送りがなのつけ方”について」(「毎日新聞」昭34.7.14および「国語学」38輯)
 - 15 金田一京助「新送りがな考(上・下)」(「東京新聞夕刊」昭33.12.7~8)
- 〃 「新送りがなを支持，例外の多さを気にするな」(「読売新聞」昭34.11.15)
- 16 清田秀博「新しい価値体系の確立，矛盾と混乱の整理」(「富山新聞」昭34.12.6)
 - 17 倉野憲司「再び送り仮名について」(「文芸と思想」昭34.11)
 - 18 坂西志保「新送りがな」(「毎日新聞」昭34.12.4)
 - 19 サクマ・カナエ「国語審議会できめた『送りがな』について」(「ことばの教育」昭34.1)
 - 20 柴田武「送りがな」(「産経新聞」昭33.12.5)

- 21 志田延義「"送りがなのつけ方" 実施についての要望」(「実践国語教育」昭34.5)
- 22 白石大二「告示された "送りがなのつけ方"——昨秋の国語審議会の建議との異同を見る——」(「時の法令」昭34.8.3)
- 23 鈴木 堯「校閲泣かせの新送りがな」(「言語生活」昭35.2)
- 24 高橋義孝「いじくりまわすな、日本語は現状のままでいい」(「日経新聞」昭34.12.13)
- 25 竹内輝芳「官製送り仮名を排す、送り仮名の統一は不可能」(「神社新報」昭34.8.1)
- 26 時枝誠記「基準的な記載法示せ、利用者の立場から見た "送りがなのつけ方"」(「毎日新聞」昭33.11.21および「国語学」36輯)
- 27 畑中裕作「新しい送りがなのつけ方の特色」(「作文教育」昭34.2)
- 28 広田栄太郎「新しい送りがなのつけ方」(「新聞研究」昭34.12)
- 29 福田恆存「新 "送りがな" への疑問 (上・下)」(「東京新聞夕刊」昭33.12.16~17)
- 30 前田雄二「新聞の "送りがな" のつけ方」(「新聞研究」昭34.5)
- 31 マツサカ タダノリ「オクリガナヲ ヤメヨウ」(「カナノヒカリ」昭34.5)
- 32 水谷静夫「国語審議会 "送りがなのつけ方" の分析」(「国語学」36輯)
- 33 Miyake, Takeo「新おくりがなへの道——おくりがなと文法の問題 (その3)——」(「実践国語教育」昭34.4)
- 34 望月 努「送りがなのつけ方についての意見と要望」(「作文教育」昭34.2)
2. 雑誌等に記載された座談会・討論・共同研究
- 35 池田弥三郎・原富男・福田恆存・山本健吉・岩淵悦太郎「新しい "送りがな" をめぐって」(「言語生活」昭35.1~2)
- 36 土岐善麿・倉石武四郎・原富男・岩淵悦太郎・白石大二・広田栄太郎・大野晋・山本健吉・福田恆存・亀井勝一郎・沢野久雄・中村光夫・加藤周一「国語政策と国語問題」(「聲」6号昭35.1)
- 37 時枝誠記・大野晋・山本健吉・福田恆存「国語問題解決の方向」(「聲」

- 38 倉石武四郎・亀井勝一郎「国語政策と言葉の魅力、国語改革をめぐる二つの意見」(「朝日ジャーナル」昭35. 1. 17)
- 39 松尾拾・斎賀秀夫・水谷静夫・市川孝「国語審議会の“送りがなのつけ方”(共同研究)」(「言語生活」昭34. 2)

3. 新送りがなに関する根本資料

- 40 「“送りがなのつけ方”と用例集」(「言語生活」昭34. 9)
- 41 「資料“新送りがな”に関する主な記事(昭和34年)」(「言語生活」昭35. 2)
- 42 『新聞用語集 昭和35年版』(「新聞協会」)
- 43 「法令用語の送りがなのつけ方」(「時の法令」昭35. 1. 3 または、法制局監修・法令普及会編『法令用語の送りがな』井上書房刊)
- 44 「公用文送りがな用例集」(『文部省公文書の書式と文例』昭34. 11非売品)
- 45 『読売スタイルブック』(「読売新聞社」昭35年)
- 46 『国語問題問答 第七集 送りがなのつけ方特集』(「国語シリーズ」44 昭35. 2. 15) (大久保)

中国の文字改革に関する調査

中国の文字改革について、昭和34年度には大略次のごとき動きがあった。[なお以下の記述は、昭和35('60)年4月現在である。]

中国が今日扱っている言語政策の主要な問題としては、前年度報告にも述べたように、漢字改革、共通語の普及、ローマ字注音の推進があるが、本報告においては、漢字改革を主として1年間の動向を略述する。

漢字簡略化(略字)についていえば、'56年1月に、一部は決定一部は試用として、国务院名義で公布された「漢字簡化方案」には、合計545字(ほかに偏旁簡化54種)があり、'59年4月現在で一般の新聞雑誌に実施されているものは、そのうちの425字であった。'59年6月29日に至り、文字改革委員会と文化部は共同通知を出し、同年7月15日から新たに、残りのうちの92字を一般に試

用する旨を指示した。かくて現在に至るまで、国务院名義で公布された簡体字 545 字のうち、517 字が一般に行なわれている（したがって、活字として一般には試用されてない残余は28字である）。

なお参考として実施期日を列記すれば次の通りである。

1956, 2, 1.	第 1 回	260字
" 6, 1.	第 2 回	95字
1958, 5, 15.	第 3 回	70字
1959, 7, 15.	第 4 回	92字

第 4 回分の公布たる前述92字の一端を例示すれば（○印のもの）,

{ 货 币	启 发	身 体	发 肤	递 信	画 坛	叹 异	图 画	酿 造
{ 貨 幣	啓 発	身 体	発 膚	遞 信	画 壇	嘆 異	図 画	醸 造
{ 练 习	购 买	怀 顾	语 汇	积 极	清 洁	舰 队	讲 义	
{ 練 習	購 買	懷 顧	語 彙	積 極	清 潔	艦 隊	講 義	
{ 专 卖	浊 音	远 钟	彻 底	后 尘	妇 长	圣 书	认 识	
{ 專 売	濁 音	遠 鐘	徹 底	後 塵	婦 長	聖 書	認 識	
{ 让 与	仓 库	断 层	儿 戏	东 亚	药 价	忧 郁	浓 雾	
{ 讓 与	倉 庫	斷 層	兒 戲	東 亞	藥 価	憂 鬱	濃 霧	
{ 护 卫	鱼 网	纵 队	质 义	简 单				
{ 護 衛	魚 網	縱 隊	質 義	簡 単				

のごときものである。

なおこの第 4 回分を指示するに当たっての中国文字改革委員会の談話によれば、一般には試用実施してない残余28字はもちろん試用してもよいのであるが、この28字およびすでに公布実施中の特定の文字については、大衆からの意見をもとにしてその修正を研究中である、と述べられている。またこの第 4 回の公表は、過去 3 回の公表とことなり、すでに偏旁簡化（e.g. 言→讠）を行なった活字体で示されているが、これについて「談話」は、'56年の方案中の偏旁簡化は、手写やガリ版ではやくから行なわれており、活字印刷においえも母型鑄造の情況に応じて逐次遂行してゆくものであって、これについては今後新

たに公布することはしない；大小各種の活字を鑄造するにはかなりの時間がかかるものであり、従ってある期間、簡化されたものと然らざるものとが混用されることはやむをえない、と述べている（偏旁簡化の状況の一端は、年報10に報告したごときものである）。

なお第4回公布と'56年の方案とは、必ずしも厳密に一致するものではなく、たとえば方案では鐘→钟とのみ規定していたが、この第4回分では鐘・鍾→钟と規定している。また逆に、方案では婁・婁→婁、徹・澈→彻、倉・𪚩→仓と規定されていたが、第4回分では婁・澈・𪚩は削除されている。これは、前記の残余28字に対する場合と同様、改革における当局の研究と柔軟性を示すものである。

前記517字と偏旁簡化による略化とを用いることによって、常用漢字6千余字のうち約千7百余字が簡化されるが、さらにこのほか、大衆はどんどん自由に簡略化を行なっているようである。その一端を次に挙例してみれば（×印のもの）

重委 重要	主委 主要	畧求 要求	郵畧 郵票	不婦 寡婦	逋仗 通信	文𠂔 文部	伋生 衛生部
重号 重量	稀𠂔 稀薄	𠂔记 簿記	𠂔年 青年	𠂔洁 清潔	𠂔情 感情	𠂔严 尊嚴	𠂔守 遵守
𠂔头 街頭	𠂔厅 餐厅	𠂔力 能力	英𠂔 英雄	𠂔问 慰問	𠂔览 展覽	𠂔览 展覽	𠂔览 展覽
𠂔览 展覽	𠂔传 宣傳	𠂔演 出演	机𠂔 機器	𠂔漆 漆器	𠂔始 原始	𠂔愿 願意	比𠂔 比賽
𠂔务 勤務	𠂔响 影響	𠂔理 整理	𠂔理 整理	𠂔理 整理	𠂔理 整理	𠂔宁 酒家	酒𠂔 酒家
𠂔富 貧富	𠂔富 貧富	𠂔子 面子	𠂔车 停車	𠂔加 增加	西𠂔 西藏	西𠂔 西藏	效𠂔 教導
𠂔德 道德	𠂔命 革命	𠂔店 商店	美𠂔 美麗	𠂔部 幹部			

のごとくである。現在ではこうした常用文字が旧繁体のままに放置されているが、それらの簡略化を望要する声は年とともに高まってきている。そしてげんに、とぼしい資料の中からも、未公認の民間略字として、しかもそのごく一部として、以上のように挙例できるということは、中国にあっては現実に略字が通行し横行しているということ、これを生み出すある精神的基盤の上に立って漢字改革が行なわれつつあるということ、を示すものといえよう。

上記のように、筆画の多い旧来の漢字は画数の少ない簡体字へと変貌しつつある。’56年の方案にある漢字についていえば、旧字体での平均画数は16.08画、簡体字としての平均画数は8.16画、更に偏旁簡化を行なえば6.5画である（わが当用漢字の平均画数は12画である）。現在は簡体字と特別によばれているが、漢字はかように簡略化する大勢にある。この大勢を象徴し、またこれに対応助長するかのように、本’60年4月22日中共中央委は、ローマ字ふりがな法による識字教育の全国的推進に関する指示を出した中で、漢字は更に簡化すべく、各字は10画をこえないようにすべきであること；それは広範な大衆によらねば不可能であること；各地の関係機関は大衆の創造した略字を中央に報告すべきこと、を指示している。過去の歴史からみて、また自国語・中国語の文字に対する中国人の創造性からみて、この指示は正当なものかと考えられる。わが日本は、文字改革の根底たる精神的基盤において、改革を遂行すべき政治的社会的条件において、漢字に対する言語的条件において、中国とは本質的に異なる立場にある。しかし中国における以上の傾向は、われわれも虚心にこれを注目し反省すべきかと思われる。

ローマ字は、前年度報告にのべたように、今日なお「注音」（ふりがな）の段階にある。某要人が「20年以内に漢字を廃止してローマ字にする」と外人記者に語ったという報道や、何年後には一定の分野で漢字・ローマ字の二本立てが出現するであろうとの主張も伝えられているが、しかし今日のところでは、ローマ字は依然として単に注音用としてのみ公認され行なわれている。

ローマ字は、’58年以降、小学校（及び中学、師範学校等）において在来の注音符号に代って実施されている。これら学校教育を通しての普及のほか、ローマ字は成人の識字教育においても、昨年来次第に利用され普及しつつある。

これについて、成績のよい所での実例でいえば、文盲がローマ字を習得するのに15～20時間（一般に20～30時間という。また学習するのは印刷体小文字だけである）、以後これをふりがなとして利用して、更に約100時間で漢字1,500字見当を覚えるという。漢字だけによる在来の識字教育では3百～4百時間を要したことに比べれば、ローマ字利用はこの点だけでも有力な手段といえるであろう。ふりがなという補助手段の効果は、われわれ日本人にも歴史的に身近かな、かつ明らかなものである。前にも少しふれたように、本'60年4月22日中共中央委は、ローマ字注音法によって文盲一掃・識字運動に卓効をあげた山西省万榮県の例（2カ月で文盲を一掃したという）をひきつつ、この方法を全国的に推進すべき旨の指示を出している。この指示の中で、ローマ字注音を利用することによって、在来の識字上大きな難点であった復盲現象（1,500字を覚えたはずの者、1年たつとすでに40%を忘れていた、などと伝えられる）を大いに軽減あるいは消滅させたこと；1,500字なり一定の字数なりを習得した後は、教師なしでも多くの注音新聞や注音通俗冊子が読めること、がうたわれている。元来1,500字の漢字では、今日一般に考えられる水準の読み書きにはどうしても不十分であって、やはり3,500字ぐらいの漢字習得が必要だとされている。ローマ字による注音法は、この点でかなりの効果をあげうるものといえよう。と同時に、学童を通じ成人の識字教育を通じて、ローマ字そのものが「洋文鬼字」とけざらえられる段階から脱却し、大衆の間に次第に根をはってゆくことであろう。現在のこうしたローマ字がやがていつかは独立単行しうるものかどうか、それは、言語的条件のほか、新社会建設に邁進する中国の政治的社会的諸条件によるところも大であって、今日では予断を許さないとみるべきであろう。

なお文盲一掃、識字運動について一言すれば、'58年の「大躍進」期には運動に参加した青壮年（14～40才）は1億人以上、脱盲した者5千万人以上と伝えられたが、'59年度においてもこの運動はかなりよく行なわれたようである。'59年末現在でいえば、過去10年の総計として、1億1千万以上の青壮年が文盲を脱した；農村の青壮年についていえば、すでに三分の二が文盲を脱している；残余文盲についてみても、1字も知らぬという完全文盲はきわめて少な

く、今後の文盲一掃はかなり樂觀しうる、と伝えられている。また工鉦企業などの労働者文盲も、すでに20~30%にさがっており、この方は '60 年内に基本的には一掃しうるかも知れぬ、と伝えられている。

学習に参加して千5百字なり2千字を覚えた者は、新聞を読みあうグループに参加したり、民歌を創作したりしつつ向上をはかるほか、あるいは更に業余高小や中学へと升学してゆく。彼等の具体的知識水準を云々することはしばらくおき、彼等が文字通り日ごとに向上しつつあることは事実であり、今日各地各分野でみられる創造的な技術発展と生産躍進の根底には、こうした掃盲運動、識字教育があるといえよう。小学はすでに基本的には普及し、本 '60 年に入っては、中学（業余中学）の普及段階に足をふみいれたとも伝えられている。毛沢東はすでに '55 年に「五年から七年以内に文盲を一掃しよう」とよびかけており、本 '60 年4月の第2期第2回の人民代表大会で譚震林は、本来12年を予定した農業綱要（'56~'67年）は二三年くりあげて実現しようと述べている。これは一般大衆、ことに農村青壮年の識字教育、知的向上にまつところが大きい問題であるが、中国の現状は、この点についても、10年前には全く予想しえなかった程に急速に改善向上しつつある、と断言できよう。なお上記大会で陸定一は、在来の教育年限12年を10年に短縮する案を出しているが、これが文字の問題に直接に関連しているか否かは別として、間接には影響するところがあるといえよう。

以上が、漢字の面を主としてみた中国の文字改革に関する '59 年度調査の大綱である。中国における文字改革は、具体的には略字とローマ字注音を支柱としつつ、きわめて政治的に、また広く大衆運動として、かつ目標を当面におく現実主義的に遂行されつつある、といえようか。（村尾）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行なった。

A. 刊行書の調査

国語学・国語国字問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典および国文学などの新刊書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化した 499 冊(1959年1月～12月)の分類目録を作った。

1. 刊行書の分類とその冊数

国語学一般	26	読みの指導	6
文 法	17	読書指導	3
音韻・音声	3	文法指導	2
方 言	11	作 文	10
語 彙	20	学 力	3
文 字	7	視聴覚教育	7
文 章	12	計	65
年 鑑	5	言語学	9
(資料)	14	国文学一般	18
計	115	上 古	14
国語国字問題	8	中 古	34
言語技術	16	中 世	25
マス・コミュニケーション	12	近 世	30
辞典・用語集	30	近代・現代	16
ことばと機械	1	作家論	25
国語教育一般	19	文学一般	53
学習指導一般	15	文学史	21
		その他	12
		計	248
		合 計	498冊

この目録は、下記の雑誌論文、および新聞記事の目録とともに、当研究所編

「国語年鑑」（昭和35年版）に掲載されている。

B. 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの逐次刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカード2通を作り，分類別・雑誌別のカード目録を作った。採録した論文・記事の総数は2,214点（1959年1月～12月）に達した。

1. 逐次刊行物の分類と種別数

a 一般刊行雑誌…………… 186 種

国語・国文学	58種	総合誌	4種
文学・芸術	37	中国関係誌	5
国語教育	35	出版誌	4
人文・民俗	12	その他	27
新聞・放送	4		

b 大学・研究所等の紀要・報告類…………… 100 種

紀 要	47種	論 集	16種
年 報	11	研究報告	26

なお，調査した逐次刊行物は，研究所に寄贈された分（後記「昭和34年度に寄贈された図書の一覧(2)逐次刊行物の部」参照）と，当所購入による下記の諸雑誌である。

計量国語学	（計量国語学会）	児童心理	（金子書房）
解釈と鑑賞	（至文堂）	思 想	（岩波書店）
文 学	（岩波書店）	中央公論	（中央公論社）
国語と国文学	（東大国語国文学会）	理 想	（理想社）
声	（丸善KK）	社会学評論	（日本社会学会）
NHK放送文化	（日本放送協会）	リーダーズダイジェスト	（同日本支社）
教 育	（国土社）	週刊朝日	（朝日新聞社）
教育心理学研究	（国土社）	学術月報	（日本学術振興会）
教育心理	（日本文化科学社）		

2. 論文，記事の分類とその点数

国語学	23	国語研究の方法	8
国語の概説	8	計	31

国語史

国語史概説	24
訓点と訓読語	32
計	56

音韻・音声

国語音韻論・音声学の概説	22
音韻の変化	12
アクセント	9
計	43

文法

文法上の諸問題	38
文法の史的研究	41
品 詞	52
計	131

語彙

語彙に関する概説	11
語句（古語）	47
語句（現代語）	20
民俗語彙・辞典	7
新語・外来語	22
各種用語	5
名づけの問題	13
計	125

古典の注釈

万葉・源氏・平家・その他	計 216
--------------	-------

文字

文字一般	10
計	10

文体

文体表現	26
近代以前の文体	45
現代の文体	50
文学と言語	24
翻訳の問題	2
計	147

方言

国語方言の概説	9
方言の音韻・文法	5
各地の方言	
（北海道）	5
（東北地方）	13
（関東地方）	16
（中部地方）	7
（近畿地方）	10
（中国地方）	18
（四国地方）	7
（九州地方）	5
計	95

敬語

言語生活

言語生活一般	78
話しことば	8
計	86

ことば随筆

ことばの機械

マス・コミュニケーション

マス・コミの問題	14
新 聞	19
放 送	21
テレビ	3
宣 伝	2
計	59

国語問題

国語問題の概観	50
（言語時評）	36
文字の問題	
（国字問題一般）	28
（当用漢字・現代かなづかい）	10
表記法	
（表記法一般）	11

(送りがな)	38	文 法	
(横書き・縦書き)	6	(文法教育)	9
(わかち書き)	26	(文法の指導)	37
ローマ字の問題	14	(送りがなの指導)	9
地人名	10	文学教育	
共通語と方言	5	(文学教育一般)	5
計 234		(文学の指導)	18
国語教育		(古典教育とその指導)	6
国語教育概説	107	学力・評価	20
指導・学習の問題	110	新聞・放送の学習	4
聞く・話す	15	視聴覚教育	5
(聞くことの指導)	4	国語教科書	21
(話すことの指導)	19	特殊教育	27
(話しあいの指導)	8	幼児教育	10
読むこと		ローマ字教育	
(読みの指導一般)	19	(ローマ字教育一般)	35
(読み方の指導)	4	(ローマ字の指導)	20
読 解		計 759	
(読解一般)	8	国語資料	16
(読解指導)	56	言語学	25
読 書		言語心理	12
(読書一般)	10	外国語の研究・問題の紹介	
(読書指導)	20	(外国における国語国字問題)	8
書くこと	8	(外国語の研究)	10
(作文教育)	22	外国における日本語研究	7
(作文の指導)	78	計 62	
(日記・手紙の指導)	10	その他	9
(文集の指導)	3	書評	83
文 字		合 計 2,214	
(漢字・かなの指導)	12		
(習字の指導)	20		

C. 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、その整理に当たるとともに、分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語・（欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜に題名をつけた。）紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。調査した紙名は次のとおりで

その切抜数は1,257点（昭和34年1月～12月）である。

(1) 東京出版（日刊）朝日 毎日 読売 東京 東京タイムズ 産経時事
日本経済

（夕刊）朝日 毎日 読売 東京 産経時事 日本経済
夕刊タイムズ

(2) 地方出版 中部日本 同（夕刊）

なお、大阪の山田房一氏、富山の平岡伴一氏など、地方のかたがたから関係記事のあるごとに恵送されたものがある。

(3) 特殊新聞 日本読書新聞 図書新聞 週刊読書人 新聞協会報 その他

1. 記事の分類とその点数

国語		方言一般	6	（地人名の表記）	8
国語一般	16	各地の方言	51	（わかち書き）	6
国語の諸問題	58		計 57	（たて書き・よこ書き）	19
計	74	言語生活	40	名づけの問題	31
国語史	31	話しことば	14	敬語の問題	21
			計 54	標準語と方言	11
音韻・音声	8	ことばの機械	42	計	518
文法	5	マス・コミュニケーション		国語教育	
語彙		新 聞	7	国語教育一般	18
語彙一般	49	放 送	20	学習指導一般	18
新語・流行語	21	テレビ	20	読むこと	
外来語	18	宣伝広告	5	（読書指導）	9
隠 語	7		計 52	書くこと	
各種用語	19	国語問題		（作文）	4
計	114	国語問題一般	118	ローマ字教育	8
文字		（問題語）	29	国語の学力	19
文字一般	8	文字の問題		国語教科書	3
活 字	11	（国字問題）	25	計	79
計	19	（漢字・漢語）	25	言語	
文体		（当用漢字）	54	言語一般	5
文体・表現	48	（ローマ字の問題）	17	外国語	28
翻訳の問題	30	表記の問題		（外人の日本語教育）	10
計	78	（表記の問題一般）	37	（問題の紹介）	9
方言		（かなづかい）	8	計	52
		（送りがな）	109	書評・紹介	55

その他

19
合 計 1,257

2. 調査紙の種類と記事の点数

朝日	199	産経時事	235	印刷材料時報	8
(大阪)	15	(大阪)	13	電通報	11
毎日	155	日本経済	47	中央タイプ通信	9
(大阪)	14	(大阪)	0	京都新聞	30
読売	132	中部日本	45	北日本	8
(大阪)	13	読 書	9	富 山	8
東京	108	読書人	34	その他	66
東京タイムズ	28	図 書	31		
夕刊タイムズ	3	新聞協会報	36		
				<u>合 計</u>	<u>1,257</u>

(村尾・有賀)

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動に必要な研究文献・言語資料などを収集し、管理した。収集の方針、整理の方法など、従来とかわるところはない。

また、各方面からの寄贈図書も、例年と変わらず、多くあった。

昭和33年度に新しく備えた図書の数は、次のとおりである。

単行本	購入	655冊
	寄贈	184冊
雑誌	購入	1257冊
	寄贈	925冊
新聞	購入	15種
	寄贈	2種

本年度末の蔵書数（単行本のみ）は25,524冊である。

昭和33年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名（敬称略） 図 書 名

1. 単行本 （ ）内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。

愛知県立女子大学図書館 「善本目録」国語・国文学篇

天沼寧 「国語・国字問題小史」

池田静思 「文法教育ゼミナール」（広島大学教育学部国語科）

石垣幸雄 「かきことばの文法」

石原忍 「あたらしい横がきカナ文字」改訂2版

糸井寛一 「見せガナのきまり」

上野図書館 「和漢書分類目録」古書之部

榎垣実 「外来語のカナ書き」

大阪学芸大学図書館 「明治以降教科書目録」第一冊

大阪大学附属図書館 「大阪大学図書目録」洋書昭和32年度

大阪大学文学部 「創立十周年記念論叢」

大里武八郎 「鹿角方言考補遺」

香川県教育研究所 「小学校学力検査問題」昭和33年度「中学校学力検査問題」昭和33年度

香川大学 「伊路波」（朝鮮版）

金沢文庫 「金沢文庫古文書」第十三輯，第十四輯

カナモジカイ 「コセキメン ニ アラワレタ オトコ ノ カタカナ ナマニ シ
ラベ」1959 (フクシマヤスノブ)

上村孝二 「奄美方言のアクセント」

関西大学国文学会「亀田教授古稀記念国文学論集」

木下友敬 「句集聴診器」

九州大学 「歌書目録」

行政管理庁行政能率調査班 「公文書の左横書きについて」

京都大学 「孝子伝」

京都大学人文科学研究所 「昭和32年度東洋史研究文献類目」

京都大学文学部 「漢籍分類目録」第一

京都市教育研究所 「学力の実態とその考察」(小学校編)昭和32年度「英語科学力
の実態とその考察」(中学校編)昭和33年度「数学科図形教材における論証
能力についての分析研究」1959「勤労青年の職業生活と学習機会の実態」19
59「道徳内容指導の事例的研究」1959「幼稚園児の個別指導」1959「京都市
小学児童の読解力に関する調査」No. 2 1959「道徳価値観調査」第二次

慶応義塾大学国文学研究会 「平安大学, 研究と資料」

神戸市立神戸小学校 「一年生のカタカナ指導」

国立教育研究所 「増加図書目録」4「蔵書目録」和書の部, 社会科学1

国立近代美術館 「所蔵品目録」1959

国立国会図書館 「市中取締類集(正・続)細目」「逐次刊行物目録」昭和33年版
「欧文による官庁刊行物一覧」1949—1958

小林芳規 「助詞イの残存」

小松代融一 「岩手方言の語彙」

小部勇二 「たかたことば」(高田郡方言集)[広島県]

コロンビア大学図書館 「新書目録」No. 56, 57, 58, 59

埼玉県教育研究所 「道徳教育の方向とその実践」

佐藤誠 「松前方言考」(淡斎如水)「奈良県風俗誌所載方言資料抄」

清水茂夫 「山口素堂の研究」(六)

寿岳章子 「永正本, 六物図抄」附 解説, 索引

神宮文庫 「神宮文庫五十周年記念善本写真集」

菅裸馬 「うしろむき」上, 下

鈴木一彦 「和歌注釈に於ける方法意識」(下)「10年間に於けるかなづかい問題の推
移」

成城大学民俗学研究室 「南島文献資料目録」1

高羽五郎 「譬喩尽」七

中央図書出版社 「解釈文法必携」(遠藤嘉基)

中教出版KK 「送りがな辞典」

天理図書館 「天理教図書目録」(昭和33年12月末現在)「古俳書」二「百科辞典」

東京教育研究所 「小学校高学年聞き方指導案の研究」

東京芸術大学附属図書館 「収書目録」No. 24

東京女子大学比較文化研究所 「植村記念佐波文庫仮目録」(1)

東京大学史料編纂所 「大日本史料」第三編之十五, 第六編之三十二, 第八編之二十二, 第十一編之十一, 第十一編別巻之一, 第十二編之四十, 「大日本古記録」梅津政景日記五, 言経郷記一, 小右記一, 「図書目録」第一部, 和漢書刊本編4, 「大日本古文書」家わけ第二十, 幕末外国関係文書之二十九, 家わけ第十, 「大日本近世史料」諸問屋再興調二, 市中取締類集一, 「大日本維新史料」井伊家史料一

東京堂 「用字の技術」(広田栄太郎)

東洋文化研究所 「アジア地域関係文献速報」4号, 5号, 6号「LIST OF THE PERIODICALS IN FOREIGN LANGUAGES. No.2」「LIST OF ACCESSIONS TO THE LIBRARY. No.3」「新収和漢図書目録」6, 7

永江秀雄 「『遠敷』考略説」「『わらづみ』の方言」

名古屋大学文学部 「十周年記念論集」

奈良女子大学図書館 「明治教育文庫目録」

西宮一民 「近畿方言調査簿」改訂版, 1959「記紀の史料性」「奈良県磯城郡大三輪町の方言」

日本学術会議 「科学者生活白書」1959—10「文学・哲学・史学・文献目録」Ⅲ, Ⅵ, Ⅶ, Ⅷ

日本学術振興会 「研究報告集録, 社会科学編」昭和34年版「研究報告集録, 人文編(1)」昭和34年版

日本国有鉄道労働科学研究室 「人間関係における認知構造の研究」1

日本事務能率協会 「文書の左横書き実施についての調査概要」

日本放送協会 「全国方言資料」1—東北, 北海道編—「日本地名発音辞典」第一集「スポー辞典Ⅶ, バレーボール・バスケット」「難読姓氏」「改定版謡曲狂言曲名一覧」「テレビの用字・用語と書き方」—改定版—

日本民間放送連盟 「全国民放便覧」(昭和34年8月)

日本民俗学会 「日本民俗学」索引

函館図書館 「郷土史料目録」第一集, 第二集

東蒲原郡PTA連合会 「東蒲原郡方言調査報告書」第三輯

美術研究所 「日本美術年鑑」(昭和33年版)

日野資純 「方言文法の実践」

兵庫県美方郡温泉小学校 「入門期のキソ学力」1959

広島大学文学部国語学研究室 「古本説話集総索引」二

広戸惇 「岡山県方言分布の実際」(その一)
 福井大学 「斎藤静教授還暦記念論文集」
 福岡市立教育研究所 「福岡市における児童生徒・父母・教師の道德的価値観」
 富良野町 「開町50年略史」
 堀内庸村 「カナ・ローマ字共通、やさしい分かち書き法」
 毎日新聞社 「日本の百年」1860—1959
 三沢光博 「増訂国語学序説」
 明治図書出版KK 「国語科教育」第六集(全国大学国語教育学会編)
 森田武 「天草版平家物語の書入れ難語句解」
 文部省 「文部統計要覧」「児童生徒体力調査報告書」昭和32年度「学術雑誌総合目録人文科学和文編」1959年版「研究機関誌要覧」昭和34年「教育課程調査報告書」(高等学校)昭和33年度「卒業後の就職状況調査」(大学)昭和33年度「文部省刊行目録」(第18集)「中学生・高校生の漢字を読む力」「公文書の書式と文例」「外国学術雑誌補充目録」昭和33年度「児童・生徒の語い力の調査準備調査」昭和32年度第1分冊・第2分冊「国語問題問答」第7集「ことばと教育」「古典と現代語」
 山口隆俊 「彼岸花日本渡来記」「老師の花」考
 山田房一 「広告のことば」(渡辺実)
 JOHANNES RAHDER “ETYMOLOGICAL VOCABULARY OF CHINESE, JAPANESE, KOREAN AND AINU” 2
 RONALDS ANDERSON “JAPAN” —THREE EPOCHS OF MODERN EDUCATION—
 SEVER POP “PREMIER CONGRÈS INTERNATIONAL DE DIALECTOLOGIE GÉNÉRALE”
 WILLIAM A. GROOTAERS “ETYMOLOGY THROUGH MAPS”

2. 逐次刊行物(おもなもの)

愛知学芸大学国語国文学会 「国語国文学報」9集～11集
 愛知県立女子大学 「説林」Ⅳ, Ⅴ「紀要」10輯
 青山学院大学英文学会 「英文学思潮」31巻1号, 32巻1号
 秋田大学学芸学部 「研究紀要」9輯
 朝日新聞東京本社記事審査部用語課 「ことば」68号～72号
 明日香路社 「明日香路」11巻4号～6号「明日香」11巻7号～13号・25巻1号～3号
 跡見学園 「国語科紀要」7号
 池田静思(広島市) 「文法教育」創刊号(広島大学文法教育研究会)
 石川国語方言学会(金沢市) 「国語方言」4号
 いずみ会(熊本市) 「IZUMI」32号～37号

茨城大学文理学部 「紀要」 9 号
 宇都宮大学学芸学部 「研究論集」 1 部, 8 号
 榎垣実 「近畿民俗」 25号
 愛媛県立教育研究所 「紀要」 27輯～29輯
 愛媛国語研究会 「国語研究」 31号, 33号
 愛媛国語国文学会 「愛媛国文研究」 8 号
 大分県立教育研究所 「研究報告」 16輯
 大分大学学芸学部 「研究紀要」 8 号
 大蔵省印刷局 「日本学術会議ニュース」 3 巻 6 号～12号, 4 巻 1 号
 大阪学芸大学 「紀要」 A 7 号, B 7 号
 大阪市教育研究所 「教育研究紀要」 37号
 大阪大学文学部国文学研究室 「語文」 22輯
 大阪市立大学 「人文研究」 10巻 4 号～12号(7 号欠), 11巻 1 号～3 号, 「中国語学
 研究集刊」 2 号
 大谷大学 「大谷学報」 38巻 4 号, 39巻 1 号～2 号「研究年報」 11号
 王朝文学研究会 「王朝文学」 2 号～3 号
 大間知篤三 「民間伝承」 243 号
 岡山大学 「学術紀要」 11号
 お茶の水女子大学 「人文科学紀要」 12巻～13巻
 お茶の水女子大学国語国文学会 「国文」 11号～12号
 尾道短期大学 「研究紀要」 8 集
 恩田逸夫 「四次元」 111 号
 香川県教育研究所 「教育研究」 12号～14号
 香川大学学芸学部 「研究報告第 1 部」 12号
 学習院大学国語国文学会 「会誌」 4 号
 学燈社 「国文学」 4 巻 6 号～8 号, 5 巻 1 号～5 号
 鹿児島大学教育研究所 「研究紀要」 10巻
 神奈川県国語教育研究会 「国語教室」 3 号
 カナモジカイ 「カナノヒカリ」 442 号～452 号「モジ ト コトバ」 201 号
 関西大学国文学会 「国文学」 25号～28号
 関西学院大学人文学会 「人文論究」 9 巻 4 号, 10巻 1 号～3 号
 関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」 10巻 4 号, 11巻 1 号～4 号
 観世会 「観世」 26巻 4 号～12号, 27巻 1 号～4 号
 九州大学国文学会 「語文研究」 9 号
 九州大学文学研究会 「文学論輯」 6 号
 九州大学文学部 「文学研究」 58輯
 教育技術連盟 「教育技術」 14巻 1 号～14号 [5, 7 号欠], 15巻 1 号「教育技術・幼

児と保育」5巻1号～12号, 6巻1号 「小一教育技術」13巻1号～14号,
[4, 9号欠], 14巻1号「小二教育技術」12巻1号～14号 [4, 9号欠], 13巻
1号「小三教育技術」13巻1号～14号 [4, 9号欠], 14巻1号「小四教育技
術」12巻1号～14号 [4, 9号欠], 13巻1号「小五教育技術」13巻1号～14
号 [4, 9号欠], 14巻1号「小六教育技術」12巻1号～14号 [4, 9号欠],
13巻1号「教育技術・中学教育」4巻1号～12号, 5巻1号「教育技術・社
会科指導」4巻1号～12号(終刊号)「教育技術・学習心理」1巻1号

京都学芸大学 「学報」A14号, 15号 B14号, 15号

京都女子大学国文学会 「女子大国文」13号～16号

京都大学教育学部 「紀要」Ⅶ

京都大学国文学会 「国語国文」295号～306号

京都大学人文科学研究所 「紀要」22号～25号「調査報告」17号～18号「ZINBUN」

3号

京都府立大学国語国文学会 「会誌」1号

熊本女子大学 「学術紀要」11巻1号

熊本大学法文学会 「法文論叢」文科篇11号

倉沢良介 「滋賀県高等学校国語教育研究会会誌」昭和34年度

クラブ尖塔(大阪) 「尖塔」35号～37号

訓点語学会 「訓点語と訓点資料」11輯～12輯

群馬大学 「紀要」10周年記念号

群馬大学語文学会 「語学と文学」3号

言語政策をわなしあう会 「言語政策」1号

高知大学 「学術研究報告」8巻

甲南女子短期大学 「論叢」4号

甲南女子短期大学国語国文学会 「甲南国文」4号～5号

甲南大学文学会 「甲南大学文学会論集」9号～10号

神戸市外国語大学 「神戸外大論叢」43号～45号「外国学資料」5号～6号

神戸女学院大学 「論集」17号～19号

神戸大学教育学部 「研究集録」20集, 22集～23集

神戸大学文学会 「研究」20号

語学教育研究所 「語学教育」241号～244号

国学院大学 「国学院雑誌」60巻3号～12号, 61巻1号～2・3号

国学院大学国語研究会 「国語研究」9号

国語学会 「国語学」36輯～39輯

「国語教室」友の会(京都市) 「国語教室」10号～12号

国立教育研究所 「紀要」13集～19集

国立近代美術館 「年報」昭和32年度, 昭和33年度

国立国会図書館 「国際交換通信」30号～40号「公報」11巻2号～12号, 12巻1号
 「納本週報」1959年23号「洋書速報」59号～88号
 「古典と現代」の会 「古典と現代」7号～10号
 駒沢大学 「駒沢国文」創刊号「駒沢地理」1号「研究紀要」17号
 西京大学 「人文」10号
 埼玉県立教育研究所 「研究紀要」25集～26集
 佐賀県立教育研究所 「研究紀要」17号～21号
 佐賀竜谷学会 「紀要」7号
 滋賀コトバの会 「みんなのコトバ」5号
 滋賀大学学芸学部 「紀要」9号
 静岡県立教育研修所 「教育研究」8号～10号
 静岡大学教育学部 「研究報告」8号～9号
 静岡大学「文化と教育」研究会 「文化と教育」105号～117号
 静岡大学文理学部 「研究報告—人文科学—」9号
 詩世紀の会 「詩世紀」90号～98号
 実践女子大学 「実践文学」7号～9号
 信濃教育会 「信濃教育」869号～880号
 島根大学 「論集」5号(社会), 9号(人文)(教育)
 純真女子短期大学(福岡市) 「紀要」創刊号
 昭和女子大学光葉会 「学苑」229号～238号
 初等教育研究会 「教育研究」14巻4号～12号, 15巻1号～4号
 信州大学 「紀要」8号
 信州大学教育学部 「研究論集」10号
 新文芸協会 「ECRIBISTO」0号～2号
 成城大学文芸学部 「成城文芸」18号～20号
 清泉女子大学(横須賀市) 「紀要」6号
 仙台市立東六番丁小学校 「研究紀要」2号
 総理府統計局 「研究叢報」10号
 大修館 「国語教室」81号～94号「高等国語教室」15号～20号
 大正大学国文学会 「国文学踏査」6号
 玉川大学文学部 「論叢」創刊号
 千葉大学文理学部 「文化科学紀要」1輯
 中央大学国文学会 「中大国文」2号
 中央大学文学部 「紀要」—文学科—7号
 中国語文雑誌社(北京) 「中国語文」81期～92期
 土のいろ社(浜松市) 「土のいろ」復刊12号
 帝塚山学院短期大学 「研究年報」7号

電通KK 「電通広告論誌」18号～20号「電通報」845号～966号
 天理大学 「天理大学学報」28輯～30輯
 天理大学おやさと研究所 「日本文化」38号
 天理大学国文学研究室 「山辺道」5号
 天理図書館 「ビブリア」13号～15号
 東京外国語大学 「論集」別冊4号
 東京学芸大学 「研究報告」10集
 東京教育大学文学部 「紀要」22号「社会科学論集」6号
 東京教育大学言語学研究会 「言語学論叢」1号
 東京女子大学比較文化研究所 「紀要」7巻～8巻「比較文化」6号
 東京大学教育学部 「紀要」3号「東大附属論集」4号
 東京大学教養学部 「人文科学科紀要—国文学・漢文—」21輯
 東京大学新聞研究所 「紀要」8号
 東京都立大学人文学会 「人文学報」19号～21号
 統計数理研究所 「彙報」11号～13号「数研研究リポート」5号～6号「統計研究通信」2号
 同志社女子大学 「学術研究年報」10巻
 同志社大学人文学会 「人文学」45号
 同志社大学文化学会 「文化学年報」8輯～9輯
 東北学院大学文経学会 「論集」—経済学33号，一般教育33号—
 東北大学教育学部 「研究年報」Ⅷ
 東北大学教養部 「文科紀要」2集～4集
 東北大学文学部 「研究年報」9号～10号
 東洋大学 「文学論叢」13号～16号「近代文学研究」5号，6号
 東洋文化研究所 「紀要」16冊～19冊
 徳島県教育委員会 「教育月報」110号～121号
 徳島県立教育研究所 「研究紀要」10集
 徳島大学学芸学部 「学芸紀要」8巻
 徳島大学学芸学部付属小学校 「紀要」6集
 鳥取県教育研究所 「研究紀要」11集
 富山大学文理学部 「文学紀要」9号
 ナカシマイズミ 「カナ と RÔMAZI」1号
 名古屋大学教育学部 「紀要」5巻
 名古屋大学教養部 「紀要」3輯
 名古屋大学言語研究会 「ことば」19号～20号
 名古屋大学国語国文学会 「国語国文学」2号～4号
 奈良学芸大学 「紀要」人文科学8巻1号，9巻1号

奈良女子大学文学会 「研究年報」Ⅱ
 新潟大学教育学部 「紀要」1巻1号～3号
 日本音声学会 「会報」99号～101号
 日本言語学会 「言語研究」35号～37号
 日本国語教育学会 「会誌」8号～13号
 日本大学人文科学研究所 「研究紀要」創刊号
 日本のローマ字社 「RÔMAZI NO NIPPON」82号～91号
 日本比較文学会 「会報」17号～20号(19号欠)「比較文学」2号
 日本文学研究会 「文学研究」14号
 日本文芸研究会 「文芸研究」31集～33集
 日本放送協会 「NHK国語講座」5巻2号～6号, 6巻1号「調査研究報告」4集
 「文研月報」95号～106号
 日本民俗学会 「会報」5号～11号
 日本民族学協会 「民族学研究」23巻1・2号～4号
 日本ユネスコ協会連盟 「ユネスコ新聞」253号～288号
 日本ローマ字会 「ローマ字世界」509号～517号
 能楽思潮 「能楽思潮」7号～11号
 野間教育研究所 「紀要」15輯, 17～18輯
 白楊社 「国語研究」32号～33号
 服部嘉香 「詩世紀」46号～51号, 53号～54号
 花園大学 「禅学研究」49号～50号
 浜田数義(高知県中村市) 「幡多方言」8号
 ヒグチタケン 「コトバ」1巻1号～3号
 一橋大学経済研究所 「経済研究」10巻2号～4号, 11巻1号
 兵庫県方言学会 「兵庫方言」6号
 広島近世文芸研究会 「近世文芸稿」1号
 広島大学学校教育研究会 「学校教育」498号
 広島大学教育学部光葉会 「国語教育研究」創刊号
 広島大学国語国文学会 「国文学攷」21号～22号
 広島大学文学部 「紀要」15号～16号
 広島大学方言研究会 「方言研究年報」2巻
 広島中世文芸研究会 「中世文芸」16号～18号
 福岡大学学芸学部 「紀要」9号
 福岡漢文学会 「漢文学」8輯
 福岡大学国語国文学会 「国語国文学」8号
 福岡学芸大学 「紀要」9号
 福岡女子大学 「文芸と思想」18号

福島県教育調査研究所 「資料」20号, 24号～25号
 平安文学研究会（京都市） 「平安文学研究」23輯～24輯
 米国大使館文化交換局 「アメリカーナ」5巻3号～12号, 6巻1号～3号
 法政大学国文学会 「日本文学誌要」復刊2号
 北海道学芸大学 「学術文献収報」9号～15号「人文論究」19号「紀要」第一部9巻
 2号, 10巻1号
 北海道教育研究所 「研究紀要」27号～32号
 北海道大学一般教養部 「外国語・外国文学研究」7号
 北海道大学国文学会 「国語国文研究」13号～14号
 穂波出版社 「実践国語教育」222号～235号
 まひる野会 「まひる野」14巻6号
 万葉学会（吹田市） 「万葉」31号～34号
 三重県立大学 「研究年報」第一部3巻2号
 「未定稿」の会 「未定稿」3号, 6号～7号
 宮城学院女子大学 「研究論文集」14号～15号
 武庫川女子大学 「紀要」6集
 武蔵大学学会 「武蔵大学論集」14号～17号
 武蔵野文学会 「試論」3号～4号
 明治大学図書館 「増加書目録」95号～100号
 文部省 「高等学校育英事業調査報告書」昭和33年度「教育統計」58号～63号「指定
 統計」13号, 15号「初等教育資料」107号～120号「長期欠席児童生徒調査」
 昭和33年度「中等教育資料」8巻3号～12号, 9巻1号～3号「へき地教育」
 1号～3号「文部時報」977号～988号「文部省年報」85年報「文部統計速報」
 88号～90号
 山形大学 「紀要」人文科学4巻2号～3号 社会科学1巻1号
 山形県教育研究所 「山形教育」73号～78号
 山形県方言研究会 「山形方言」4号
 山口女子短期大学 「研究報告」11号～12号
 山口大学文学会 「文学会誌」10巻1号～2号
 山梨大学学芸学部 「研究報告」9号～10号
 立教大学 「心理・教育学科研究年報」3号「日本文学」2号～3号
 立正大学 「立正学報」4巻1号「文学部論叢」11号
 立命館大学人文学会 「立命館文学」165号～177号
 立命館大学日本文学会 「論究日本文学」10号～11号
 竜谷大学 「論集」361号～363号
 竜谷大学国文学会 「国文学論叢」7輯
 ろう教育研究会 「ろう教育」107号

ローマ字教育会 「ことばの教育」 112号～121号

早稲田大学演劇博物館 「早稲田演劇」 5号～6号

早稲田大学教育会 「学術研究」 8号

早稲田大学国文学会 「国文学研究」 19輯～21輯

早稲田大学史学会 「史観」 54冊～56冊

SEUER POP “ORBIS” VOL. Ⅷ No. 1～No. 2

UNIVERSITY OF LONDON “BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES” VOL.22 No.1, VOL.23 No.3

UNIVERSITY OF WASHINGTON “MODERN LANGUAGE QUARTERY”
VOL.20 No.1, No.2, No.4

(三島)

庶務報告

A. 庁舎および経費

1. 庁舎

所在 東京都千代田区神田一ツ橋1の1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 321,709坪

軽量不燃書庫 30,501坪 閲覧室 13,985坪 計 366,195坪

2. 経費

昭和34年度予算 総額 33,216,000円

人件費 23,220,000円

事業費 9,996,000円

B. 評議員会

会長 土岐 善麿	副会長 波多野完治
有光 次郎	伊藤忠兵衛 円地 文子
金田一京助	倉石武四郎 桑原 武夫
沢登 哲一	時枝 誠記 土居 光知
中島 健蔵	中島 文雄 野村 秀雄
服部 四郎	松方 三郎 松坂 忠則
宮沢 俊義	山本 勇造(34.9.1就任)
颯田 琴次(34.4.1辞任)	

C. 組織と職員

1. 予算定員

教官 33 事務職員 16 合計 49

2. 組織および職員

	職名	氏名	備考
国立国語研究所	所長	岩淵悦太郎	35. 1. 22就任
	"	西尾 実	35. 1. 22辞職
第1研究部	部長	林 大	35. 1. 22就任
			" 書きことば研究室長 事務取扱を命ずる
			35. 3. 16書きことば研究室長 事務取扱を免ずる
	"	岩淵悦太郎	35. 1. 22所長に昇任
話しことば研究室	室長	大石初太郎	
		飯豊 毅一	35. 3. 16第2資料研究室長に 昇任
		宮地 裕	
		吉沢 典男	
	補助員	泉 喜与子	
		吉村 香苗	
書きことば研究室	室長	見坊 豪紀	35. 3. 16就任
	"	林 大	35. 1. 22第1研究部長に昇任
		斎賀 秀夫	
		水谷 静夫	
		石綿 敏雄	
		宮島 達夫	34. 5. 1採用
	補助員	橋本 圭子	
	"	高木 翠	
	"	西山 洋子	
	"	鈴木百合子	
	"	渡辺 嘉子	34. 9. 28辞職
地方言語研究室	室長	柴田 武	
		野元 菊雄	
		上村 幸雄	
		徳川 宗賢	
	補助員	白沢 宏枝	
第2研究部	部長	興水 実	
国語教育研究室	室長	芦沢 節	
		高橋 太郎	
		村石 昭三	
	補助員	根本今朝男	
	"	川又瑠璃子	
言語効果研究室	室長	永野 賢	
		林 四郎	

第3研究部 近代語研究室	補助員	渡辺 友左 宮地美保子	
	部長	山田 巖	
	室長	高橋 一夫	35. 3.16就任
	"	見坊 豪紀	35. 3.16書きことば研究室長 に配置換
		広浜 文雄	
		進藤 咲子	
	補助員	丸山 敦	34. 5.23辞職
	"	石田 秋子	
	"	中曾根 仁	34. 6.11採用
第4研究部 第1資料研究室	部長(併)	岩淵悦太郎	
	室長	松尾 拾 市川 孝	34. 5. 1お茶の水女子大学に 配置換
		大久保 愛	34.11.17第2資料研究室に配 置換
		田中 章夫	34.10.16香川大学から配置換
		露峰 裕子	
	補助員	飯豊 毅一	35. 3.16就任
	室長	高橋 一夫	35. 3.16近代語研究室長に配 置換
	"	村尾 力	34. 8. 1第3資料研究室長に 昇任
		大久保 愛	35. 3.16第3資料研究室に配 置換
		高田 正治	35. 3.16配置換
		小池 滌	旧姓織田
	補助員	村尾 力	34. 8. 1就任
	室長	上甲 幹一	34. 4. 1名古屋大学に配置換
	"	有賀 憲三	
		大久保 愛	35. 3.16配置換
		高田 正治	35. 3.16第2資料研究室に配 置換
		山本 征子	35. 3.31辞職
庶務部 庶務課	部長	尾崎源之助	
	課長	三島 良兼	
	課長補佐	名古屋恒太郎	
		鈴木 篁二	
		芳賀清一郎	
		増山 治子	
	補助員	根岸佐代子	

会計課	課長 課長補佐	黄木得二郎
		伊藤 伸二
		三浦 清伍
		渋谷 正則
		鈴木 亨
		西山 博
		江頭 健一
		吉田芳太郎
		金田 とよ
		岡本 まち
	補助員	加藤 雅子
図書室	室長(併)	三島 良兼
	(併)	鈴木 篁二
	(併)	芳賀清一郎
	補助員	大塚 通子
	非常勤職員	佐藤 利男
	"	金森 巖子

D. 内地留学生受け入れ

全国都道府県から内地留学生を受け入れて、研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目などを掲げる。

氏名	学 校	研究題目	研究期間
鈴木たか	静岡県静岡市静岡精華	現代語の研究	昭和34. 4. 1から
	高等学校教諭		" 34. 9.30まで
島野義智	埼玉県熊谷市立大麻生	教材研究のための現代文学	昭和34. 4. 1から
	中学校教諭	の文体の研究	" 35. 3.31まで
韭塚知久	埼玉県深谷市立深谷中	読書指導のための基礎的研	昭和34. 4. 1から
	学校教諭	究	" 35. 3.31まで
山口正長	長崎県壱岐郡芦辺町立	義務教育期間中に習得すべ	昭和34. 6.24から
	芦辺小学校教頭	き国語の学力について	" 34. 7.10まで
岩田洋一	長崎県福江市立大浜小	効果的な読解指導について	昭和34. 6.24から
	学校教諭		" 34. 7.10まで
鍋師六好	京都府綾部市立八田中	話しことばのきまり一特に	昭和34.10. 1から
	学校教諭	コソアド語の研究	" 34.12.31まで
佐藤 誠	北海道学芸大学函館分	北海道方言の研究	昭和34.10. 1から

校教授	〃 35. 3.31まで
米沢武司 岐阜県吉城郡神岡町立 鑑賞・読解指導について	昭和34.10.12から
茂住中学校教諭	〃 34.10.16まで

E. 日誌抄

1959. 5.28～29 第18回文部省所轄ならびに国立大学付置研究所長
会議（日本学術会議で）
- 5.30 文部省所轄研究所長会議（文部省で）
- 6.18～19 第10回文部省所轄機関事務協議会（水上で）
- 6.30 第42回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和34年度研究事業の実施計画
 2. その他
- 7.10 文部省所轄研究所長会議（文部省で）
- 9.15 カルフォルニヤ大学教授趙元任以下5名研究所見学
- 9.25 第43回国立国語研究所評議員会
議事
1. 庁舎の新営について
 2. その他
10. 8～9 第12回文部省所管研究所事務協議会（片瀬で）
- 10.10 文部省所轄研究所長会議（緯度観測所で）
- 10.23 群馬県館林市中学校国語研究部小川福文（館林市立六郷中学
校長）以下18名研究所見学
- 11.11 群馬県邑楽郡邑楽村高島中学校教諭牧島正重以下15名研究所
見学
- 11.12～13 文部省所管研究所長会議第3部会（九州大学で）
- 11.27 マルブルグ大学教授 Heinrich Herrfahrdt, 研究所見学
12. 5 群馬県館林市小学校国語主任会堀口わか（館林南小学校教諭）
以下10名研究所見学

- 12.19 群馬県邑楽郡板倉町東小学校長黒野仲雄以下8名研究所見学
- 12.20 国立国語研究所創立記念日
1960. 2.17～18 第10回文部省所管人文系（第3部会）研究所事務協議会（京都大学人文科学研究所で）
- 2.23 第44回国立国語研究所評議員会
議事
1. 研究事業の中間報告
 2. その他
- 3.10 昭和34年度文部省給与監査

—国立国語研究所刊行書—

国立国語研究所報告1	八 丈 島 の 言 語 調 査	
国立国語研究所報告2	言 語 生 活 の 実 態 —白河市および付近の農村における—	(秀英出版刊) ¥ 300.00)
国立国語研究所報告3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 —用法と実例—	
国立国語研究所報告4	婦 人 雑 誌 の 用 語 —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 —鶴岡における実態調査—	(秀英出版刊) ¥ 600.00)
国立国語研究所報告6	少 年 と 新 聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—	
国立国語研究所報告7	入 門 期 の 言 語 能 力	
国立国語研究所報告8	談 話 の 語 の 実 態	
国立国語研究所報告9	読 みの 実 験 的 研 究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	
国立国語研究所報告10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	
国立国語研究所報告11	敬 語 と 敬 語 意 識	
国立国語研究所報告12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前 編) —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後 編) —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	
国立国語研究所報告15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	
国立国語研究所報告16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	(明治書院刊) ¥ 900.00)
国立国語研究所報告17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	
国立国語研究所報告18	話 し こ と ば の 文 型 (1) —対話資料による研究—	

国立国語研究所資料集1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年)	
国立国語研究所資料集2	語 彙 調 査 —現代新聞用語の一例—	
国立国語研究所資料集3	送 り 仮 名 法 資 料 集	
国立国語研究所資料集4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	(秀英出版刊) ¥ 300.00)

国立国語研究所論集1	こ と ば の 研 究	
国立国語研究所 共著	高 校 生 と 新 聞	(秀英出版刊) ¥ 280.00)
日本新聞協会 共著	青 年 と マ ス ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	(金沢書店刊) ¥ 280.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 29 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 450.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 30 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 600.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 31 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 450.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 32 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 480.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 33 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 480.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 34 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 500.00)
国立国語研究所編	国 語 年 鑑 (昭 和 35 年 版)	(秀英出版刊) ¥ 550.00)

昭和24年	年度	国立国語研究所	1
昭和25年	年度	国立国語研究所	2
昭和26年	年度	国立国語研究所	3
昭和27年	年度	国立国語研究所	4
昭和28年	年度	国立国語研究所	5
昭和29年	年度	国立国語研究所	6
昭和30年	年度	国立国語研究所	7
昭和31年	年度	国立国語研究所	8
昭和32年	年度	国立国語研究所	9
昭和33年	年度	国立国語研究所	10

昭和35年10月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1-1

電話 九段(331)代表 4295

UDC 058:495.6

NDC 810.5

1959~1960

ANNUAL REPORT OF NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research from April 1959 to March 1960

Research in Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on the Vocabulary in Magazines, especially

the Use of Chinese Letters in Magazines Survey

for Linguistic Maps of Japan

Study of Language Development of School Children

Study in the Readability of Newspaper Sentence

Study on the Japanese Language of the Meizi Period

Research in Special Problems

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO